SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

研究開発実施報告書

平成27年度指定　スーパーグローバルハイスクール　第5年次

令和2年3月

学校法人 創価学園
関西創価高等学校

2019 年度 SGH 研究開発成果集発刊にあたって

関西創価高等学校校長　杉本 規彦

SGH アソシエイトから始まった研究開発も指定期間を経過し、このたび最終となる成果集を発刊する運びとなりました。これもひとえに多くの皆様のご支援とご協力のおかげであり、関係する皆様に心より感謝を申しあげます。誠にありがとうございます。

本校では開校以来、「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」との信条を、教育の根幹としてきました。SGH 事業においても、この信条を基点として「世界市民教育プログラム」の研究開発に取り組んでまいりました。

研究開発構想名は「TRY 人の郷・交野から　平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム」です。その概要は、「Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感、共感力、問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する」というものです。

メインプログラムは全校生徒を対象にした探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquire Time）と、その集大成たる学年模擬国連です。また SDG s をより専門的に学ぶため、希望者による課題探究授業として高大連携の UP（University Partnership）クラス、さらに選抜された生徒が全て英語で行う Learning Cluster があります。国内外のフィールドワークも回を重ねるごとに交流先も広がり、充実した内容となっています。

GRIT で取り組んでいる「環境・開発・人権・平和」の 4 分野は、調べるほど難問ばかり。しかし、一つ一つの課題に真剣に向き合い格闘する生徒の姿に、私たちは大いなる希望を抱いています。SDG s の根幹である「誰も置き去りにしない」世界をつくるため、たとえ小さな一歩であろうと勇気をもって行動する TRY 人をさらに育成していく決意です。

最後に、本校 SGH 運営指導委員である梶田叡一先生、米田伸次先生、朝野富三先生、また提携していただいております大学、国際機関、研究機関、企業、地元・交野市教育委員会の皆様、ユネスコスクールの皆様、そして多くの SGH 校の皆様に深く感謝申しあげます。

2020 年 3 月 16 日

報告書　目次

Ⅰ　【別紙様式５】平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要
・・・・・・・・・・・・　4

Ⅱ　実施報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

１　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

２　各研究の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
２－１　ＧＲＩＴ（Global Research and Inquiry Time）
２－２　Global Citizenship Seminar
２－３　ＦＷ（Fieldwork LC 東京・東京・広島・アメリカ）
２－４　ＬＣ（Learning Cluster）
２－５　ＵＰ(University Partnership)

３　成果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　90

Ⅲ　関係資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　126
１　第１回運営指導委員会議事録
２　ＳＧＨ中間研究発表会・第２回運営指導委員会議事録
３　ＳＧＨ最終研究発表会・第３回運営指導委員会議事録
４　中間研究発表会 運営指導委員講評
５　最終研究発表会 運営指導委員講演

【別紙様式５】

平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">かんさいそうかこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">大阪府</td></tr>
<tr><td>27～31</td><td>①学校名</td><td colspan="4">関西創価高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="4">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">普通科　生徒数 1075 名（2014 年度）
同キャンパスに中学校を併設</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>359</td><td>357</td><td>359</td><td></td><td>1075</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">TRY 人(じん)の郷・交野から
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7"><u>Active Learning の土台の上に、国連が提起している地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力を育む教育活動を高大連携して開発する。</u></td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1 全体</td><td>

⑴ 目的・目標

1600 年前に日本に技術を伝えた渡来人が住み着いたとされる交野。21 世紀はこの交野より世界へ飛び立ち、<u>地球的課題の解決に果敢に挑み、世界の平和に貢献するグローバルリーダーを育成することを目的とする</u>。

SGHA として 2014 年度に取り組んだプログラムをさらに発展させ、創価大学･アメリカ創価大学･オタゴ大学等の高大連携を強力に推進し、UNDP 等国際機関とも提携して、地球の今を学び、体験し、問題解決へ発信する新教育プログラムを作り上げる。

⑵ 現状の分析と研究開発の仮説

最近 5 年間における海外大学進学者数の累計は 53 名であり、本校から創価大学に進学した者の 40%は留学等海外経験を行うなど意識は高いが、さらなる語学力の向上や主体的な学びの姿勢を育む授業改革が必要であり、高大連携しての Active Learning、ICT 教育に取り組むことで大きく改善が期待できる。

生徒自ら地球的課題に挑み解決しようとする「使命感」は、第一に世界の現状を知り、苦しみを分かち合う「共感力」の向上の中で培われるものであると信じる。

<u>世界が課題とする「環境・開発・人権・平和」の４分野について、大学、国際機関、企業と提携し、国連が具体的に提起している諸問題を探究し、生徒たちがチームとして新たな視点からその解決を目指すプロセスを確立する</u>こととする。

そのため、教育の根幹たる授業において、友と協力し自ら学ぶ学習スタイルを確立することが今後のグローバルリーダー育成の取り組みの土台となるので、Active Learning を全教科にわたり積極的に導入するべきである。その基礎の上に、全員で取り組む探究型総合学習 GRIT での「環境・開発・人権・平和」の 4 分野の学びはより進むものと確信する。さらに興味関心を抱く希望者には、高大連携プログラムとして、SP（SOKA Progress）クラスと呼ばれるグローバルイシューの基礎講座を実施。そこで学びを深めた生徒からさらに選抜して、国際機関と提携しての LC（Learning Cluster）プログラムを行う。

⑶ 成果の普及

専用 WEB サイトでの発信とともに、他の指定校と連携しながら、SGH 教育報告会を開催。またオープンキャンパスにおいて、内外に向けた取り組み成果の報告を行う。新たに開発した教材はデジタル化し、広く公開していく。

</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	(1) 課題研究内容 グローバルリーダーとしての使命感・共感力・問題解決への創造力の育成を図るため、**「環境・開発・人権・平和」の４分野について国連が具体的に提起している諸問題を探究し、チームとして解決方法を目指すプロセスを確立する。** ※コアとなるグローバルイシューは、「ポスト 2015 開発アジェンダ」の検討内容を中心として各チームがテーマを設定し探求する。 (2) 実施方法・検証評価 ①探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time） ○土曜日に実施　○全校生徒を対象　○「環境･開発･人権・平和」の４分野について大学･国際機関･企業と提携し探究活動　○大学院生を各クラスに TA として配置 ○1 年生「環境･開発」 2 年生「人権･平和」 3 年生では模擬国連と論文作成 ○GRIT 講演会 Global Citizenship Seminar を学期毎に開催 ○全員が EarthKAM を体験し、宇宙から地球を見つめる視点を育成 ○「天の川ホタル復活プロジェクト」で自然との共生の心を育む ②高大連携プログラム SP（SOKA Progress ）Class ○希望者を対象　○グローバルリーダーの資質向上に資する連続講座 ○提携大学･国際機関から講師を招き実施する UP(University Partnership)Class ○2016 年度から単位を付与　○GRIT を推進し、LC へつなぐ ③国際機関と提携して行う先進的な特設プログラム LC（Learning Cluster） ○2・3 年生の希望者から最大 32 名（2015 年度は 20 名を予定）を選抜 ○4 名 1 チームで 4 分野からコアとなるテーマを設定　○活動の全ては英語 ○創価大学と提携した東京・アジアフィールドワーク ○アメリカ創価大学と提携したカリフォルニア環境人権平和フィールドワーク ○UNDP と提携した開発フィールドワーク ④高大連携で授業改善 ― 友と協力し自ら学ぶ Active Learning を強力に展開 ○全ての課題研究の推進の土台として、主体性あふれる学びの姿勢を築く ○ICT 教育も同時に研究、推進　○創価大学教育学部と提携し全教科で導入 検証評価 学年･学期毎に SGH 委員会が作成したルーブリック評価を導入し、生徒の変容を評価するとともに、提携大学関係者を交えた評価委員会により行う。 (3) 必要となる教育課程の特例等　なし
	⑧-3 上記以外	(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 ①留学生と地球的課題を語るプログラム Global Camp ②語学力向上の取り組みを強化 ○Critical Writing Center の設置　外国人講師が face to face で添削指導他 ③世界に、社会に目を向ける NIE（Newspaper in Education） ④日本人としての identity を育成する Feel Japan Program ○海外高校生徒との共同生活体験　○留学生への古都案内 ○国語の授業、図書館、クラブでの「日本文化」の深化など 検証評価　教養とリーダーとしての資質向上を期し、授業連携や読書教育をさらに進める。各種コンテストの参加数、生徒へのアンケートをもって検証評価を行う。 (2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等　特になし。 (3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取組内容・実施方法 ①校長を長とする SGH 委員会等教職員体制の整備、強化　②保護者の意識変革 ③専用 WEB サイトの開設 ④図書館に「環境・開発・平和・人権」「グローバルビジネス」専用書架の設置　⑤SGH カリキュラムを含め研究開発計画に沿って実施
⑨その他特記事項		提携校の創価大学は SGU であり、本校の研究開発を効果的に進めることができる。

研究開発の概要

（１）研究開発の概要

関西創価高校がＳＧＨを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learning の土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の４分野について学ぶ探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time)や Global Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムの UP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行う LC（Learning Cluster）で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を研究開発する。

（【別紙様式５】平成２７年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要を参照）

（２）本年度の研究開発の経緯

GRIT（探究型総合学習、「環境・開発・人権・平和」について探究）については高校 3 年間で行うプログラムをさらに精査し、主体的で対話的な深い学びの中で、世界市民としての使命感・共感力・問題解決への創造力を培う学習内容へと発展させることができた。具体的には、1 年生では SDGs の内容を「地理」で、環境分野の「校内フィールドワーク」は「生物」の授業で行うことにより、より深い学びとなった。本年度からは「平和」の分野で「AI 兵器」の単元を新たに設け、現在の紛争で使用されている無人兵器や、今後予想される「AI 兵器」についても学ぶ機会とした。2 年生では、職員会議の中で研修会を行い教員が指導できる「課題探究メソッド」を確立。生徒たちに課題探究の手法について細かく指導するとともに、発表の手法についても細かくレクチャーすることができた。高校 3 年生で行う、大学教員を招いての「アカデミックライティング講座」は、より内容を充実させるため、年 2 回の開催とし、大学教員と国語科の教員が連携を密にして高大連携し、国語の授業でも細かく指導できるプログラムとなった。「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間を GRIT の時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、担当国の政治や経済についてのプレゼン発表を行った。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析の力の育成を行った。様々な教科で GRIT を深めるための教科横断の授業が確立された。学習評価においても、「政治・経済」の授業の中で、GRIT で各国大使としての視線で作成した論文を、ルーブリックを用いて生徒と教師で評価し、成績に反映した。そして作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中で GRIT の取り組みを評価できたことで、GRIT に取り組む生徒の意識がさらに向上した。また、「模擬国連」「GRIT 論文」「英語サマリー」の流れがスムーズに進んだため、3 学期の「GRIT 論文作成」に充てていた時間に余裕ができ、3 年生 3 学期の GRIT では、卒業後に向けた「世界の現状」「世界の動向」を考え、本校の創立精神を踏まえ、「どう世界に貢献するのか」を考えるプログラムが追加された。

（３）本年度の具体的な取り組み内容

①GRIT

・アクティブラーニングを中心に、本校 SGH のテーマである「環境・開発・人権・平和」４分野について SDGs に照らして全校生徒で探究し、３学期に生徒による成果発表会を行う。

②Global Citizenship Seminar

・国内外の国際機関や大学等の学術機関、社会で活躍する著名人から直接講演を受講。

③LC（Learning Cluster）

・希望者から選抜し、オールイングリッシュによる探究・調査・提言作成を行う。

④SP(Soka Progress)class ならびに UP(University Partnership)Class

・希望者を対象にした高大連携プログラム国内外の大学教授などから受講。

⑤FW（Fieldwork　東京・広島・アメリカ・東北）

⑥各教科における探究的な取り組み

GRIT（Global Research and Inquiry Time）

1　２０１９年度 GRIT 概要

2014 年度に SGHA として採択されてから、登校する土曜日を利用し、総合学習 GRIT の授業を行っている。GRIT では、関西創価高校の SGH テーマ「環境・開発・人権・平和」の 4 分野についての基礎知識をビデオやプリントで学び、SDG s に照らしてフィールドワーク、体験学習を行ってきた。GRIT は全員が４分野について学ぶ、本校の SGH プログラムの根幹となるものである。

１年生では、「環境・開発・人権・平和」の４分野について、概要と体験型授業をもとにグローバルイシューを体感できるようにした。また、教科と連動して SDG s を徹底して学ぶ機会とした。

2 年生は、6 月に行われる創価大学での研修において、４分野に関する課題研究の研究計画を各分野の専門の教授の前で行った。これは 2015 年度より始めたものである。その研究は SDG s に照らしたものとし、１年間通じて探究する。2 月に保護者に向けて発表会を行い、3 月にはポスターセッションを行い、高校１年生と外部の方たちに発表を行う。(2019 年度はコロナウィルスのためポスターセッションは中止)その発表をよりよいものとするために、大学院生からのアドバイスをいただく機会を２回持ち、学年内では分野別にクラスをシャッフルした発表も行った。

３年生では、今まで学んだ経験と知識を利用し、全クラスを１００ヶ国に分け、模擬国連の形式で交渉を行い、初等教育に対する解決案を考案しまとめた。そして、その内容を一人一人が論文にし、英語でサマリーを書いた。

２０１９年度の変更点としては、１年生では「アースカム」「AI 兵器」についての GRIT、２年生の「課題研究」での流れを追加、リニューアルした。

2　GRIT 授業までの流れ

GRIT は土曜日に全学年同時で開催する。授業の担当は、担任もしくは学年担当の教員である。授業考案者や専門の教員が必ずしも実施しないため、どの教員でも担当できるよう学年会等で準備に時間をかけている。

流れとして、まず GRIT 担当の教員が授業内容を考案し、SGH 委員会で検討して修正を加える。その後職員会議（学年ごとに内容が違うときには週１回行われる学年会）で、授業を実施する教員に説明し、質問を受けた。その際、授業の内容をまとめ、流れがわかるような指導案やパワーポイントも作成した。

指導案を用いて授業を行う中で、担当者がこうしたらいいのではないかと問題点を改良し、フィードバックをすることにより PDCA サイクルが行われ、よりよい授業になっていっている。

3　GRIT リーダー

GRIT の授業において、アクティブラーニングプログラム、フィールドワーク、ディスカッション、体験学習などを行う際には、授業担当者の教員のみではなく、生徒に進行役をさせることがある。この役割を担うのが GRIT リーダーと呼ばれるメンバーである。GRIT リーダーが必要な授業の前に、クラスで募集をし、事前に授業内容に関する研修を受け、生徒が進行を行う。高 3GRIT の「模擬国連」に関しては、模擬国連部が GRIT リーダーを務める。

GRIT 授業内容詳細

2019/4/13　GRIT ガイダンス

１年生　テーマ :「環境」「開発」「人権」「平和」概要

SGH 校に採択されたことを受け、関西創価高校の SGH 構想の説明と、GRIT の意義、４テーマの概略を放送システムで説明した。１年生にはこれからの３年間で学ぶこと、２・３年生には改めて GRIT を学ぶ意味を説明し、考える時間とした。

2019/4/13	1	ガイダンス	今年度行われるGRITの説明
4/13	2	開発	世界が50人の村だったら
	3	開発	〃
4/27	4	人権	シナリオディベート
	5	人権	〃
5/11	6	人権	ポスターツアー
	7	人権	〃
5/18	8	環境	地球温暖化・環境かるた
	9	環境	〃
6/1	10	開発	貿易ゲーム
	11	開発	〃
6/8	12	平和	ＡＩ兵器
	13	平和	〃
7/12	14	FW	インタビュー講座
夏休み		FW	ＦＷ（インタビュー）
9/14	15	FW	インタビューポスター発表会
9/21	16	FW	〃
	17	環境	アースカム
10/5	18	環境	〃
	19	環境	〃
10/24	20	平和	原爆詩朗読会・沖縄戦
	21	平和	〃
11/2	22	開発	今井夏子さん（国連大学）セミナー
	23	開発	〃
11/8	24	平和	平和のためにできること
	25	平和	〃
12/12	26	プレゼンテーション	プレゼンテーション立ち上げ
	27	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2019/1/18	28	プレゼンテーション	プレゼンテーション講座
	29	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	30	プレゼンテーション	〃
1/29	31	プレゼンテーション	〃
2/1	32	平和	平和提言学習
	33	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
	34	プレゼンテーション	〃
2/5	35	プレゼンテーション	プレゼンテーション準備
2/8	36	プレゼンテーション	〃
	37	プレゼンテーション	〃
2/12	38	プレゼンテーション	プレゼンテーションリハーサル
2/15	39	プレゼンテーション	プレゼンテーション発表準備
	40	プレゼンテーション	発表
	41	プレゼンテーション	発表

②③　4/13　テーマ：開発　「世界が５０人の村だったら」

現在の世界の状況をクラス内の人数で体現するとどうなるかをモデル化した「世界が５０人の村だったら」のプログラムを行った。開発教育協会が発行している教材を中心に学んだ。

クラスごとに生徒に役割カードを配布して、そのカードにかかれた人種・言語などによってグループ分けをし、世界の状況をモデル化した形で確認した。

例えば、カードに書かれているネパール語「座ってください」を、全員が起立した状態でプロジェクタに表示して、座る人が何人いるか。つまり世界の識字率が何%あるのかを確認し、読めない人はもしかすると薬と間違えて、毒を飲んでしまう可能性があるということを考えた。

最後に「世界が５０人の村だったら」の文章を全員で読んで、気づいたことを話し合わせた。

◯GRIT 用 PowerPoint：世界が５０人の村だったら（抜粋）

④⑤　4/27　テーマ：人権　「いじめといじりディベート」

日々当たり前に使っているあだなも、エスカレートし本人が嫌がるといじめにつながる。「いじり」と「いじめ」の境界線を考え、今近くにいる友達の人権を考えるためにディスカッションを行った。

まずは、NHK「いじめをノックアウト」あだ名は禁止するべきですか？」の回を視聴し、あだ名を嫌がっている子、あだ名は禁止すべきであるという意見を紹介した。その後まずは個人でメリット・デメリット・あだ名がいじめにならないための解決策３か条を考え、グループごとにディスカッションし、グループごとに解決策を考える、それをクラスで発表し、またグループでディスカッションし、クラスのルールを１つ作成した。

スムーズにディベート風ディスカッションができるように、ワークシートには穴埋め形式のシナリオを準備した。

◯GRIT 用 PowerPoint：「いじり」と「いじめ」ディスカッション（抜粋）

⑥⑦　5/11　テーマ：人権「世界の人権問題ポスターツアー」

GRIT 人権の初めは世界の人権問題のインプットを行うことを目的とした。ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさん紹介ビデオと、国連でのスピーチを視聴した。

次に、人権問題に関して多くのテーマを生徒が学べるよう、ジグソー法を発展させたポスターツアーの形式で発表を行うことにした。

まず、少人数のグループに分かれ、国際 NPO「アムネスティ」のホームページに掲載されている人権問題を、グループごとに違うテーマで読ませた。次にポスターを作り、発表ができるようにした。ポスターといっても、項目ごとに付箋を使い、内容をまとめたものである。ポスターが完成したら、グループを作り直し、新しいグループには最初とは違うグループのメンバーが集まるようにした。時間を区切って、ポスターを回り、自分の作成したグループのポスター前ではそのグループ員が発表するようにした。

○GRIT 用 PowerPoint：人権問題ポスターツアー（抜粋）

○生徒の感想

世界では僕たちが知らない、様々なところで、人権の問題や紛争が起こっているのだと改めて理解、知ることができました。僕たちが今日、学んだことを覚えておくことは大事なことだと思います。今日のことを友達に話したり、共有したりすることで、更に関心や理解が深まっていくと僕は思います。

⑧⑨　5/18　テーマ：環境　「地球温暖化」・「環境かるた」

SDGｓと世界で起きている環境問題の関連を考え、高校生にできることを考えた。さらに、大阪府が提供している環境カルタの絵札を見て、読み札をつくり、実際の読み札と見比べてみるということを行い、どう啓発するかを考えた。

◯GRIT 用 PowerPoint：地球温暖化・環境カルタ（抜粋）

○生徒の感想

今日の学習をとおして、今のままの生活では、まだ私たちが生きている近い将来も危ないということを改めて感じました。具体的な数値も知ることで、さらなる危機感ももてたことは本当に良かったです。また、12 歳のカナダの少女のスピーチにも感動しました。思っているだけでなく、はっきりと大人の前で発表できるその勇気は素晴らしいと思いました。

⑩⑪　6/1　テーマ：開発　「貿易ゲーム」

この日は貿易ゲームを通して、フェアトレードについて学ぶ時間とした。この日の進行は GRIT リーダーに依頼した。この GRIT は毎年好評を得ており、全員が大きな学びとしている。

「フェアトレード」とは、公正な国際貿易のこと。途上国の原料や製品を、適正な価格で継続的な購入を通じて、立場の弱い人たちの自立と生活を改善することを目指す取り組みであることを理解しするとともに、現実の国際社会では、経済的に豊かな力の強い国に有利な不公平・不公正な貿易が行われており、貿易ゲームを通じて、世界の不公平な貿易の状況を学んだ。

さらに、２０１６年に来日したウルグアイのムヒカ元大統領の紹介ビデオとスピーチ動画を視聴した。このビデオは「世界で最も貧しい大統領」として知られており、資産の８０％を寄付、個人資産は約１８万円の車のみ、月に約１０万円強で生活をされており、そのビデオを見て、開発の必要性、などを考えた。

◯GRIT 用 PowerPoint：貿易ゲーム（抜粋）

〇生徒の感想

貿易ゲームを通して、貿易というものが世界の人々の暮らしにどのような影響を与えているのかを知ることができ、楽しく学ぶことが出来ました。貿易をする上で、正しい情報を得る手段が必要ということ、高い交渉力が求められるということが分かりました。また、お金を稼ぎ自国が豊かになることばかりを考えてしまい、他国の繁栄を考えることが出来ませんでした。現実社会でも、他国より優位な立場に立ちたいという気持ちがあるかぎり、世界の問題は上手く解決していかないと思います。世界中の国々が協力しあい互いに繁栄していくことを考えていけば、問題の解決にも繋がっていくのではないかと思いました。ムヒカ大統領のスピーチにもあった通り、人々が幸せに生きていくためにはどうしたらいいのかと考え、行動していくべきだと感じました。

⑫⑬　6/8　テーマ：平和　「AI 兵器」

この日は世界で開発の進む AI 兵器について、動画を拝聴し LTD 手法を用いて学びを深めた。まず初めに、ドバイで行われた武器の見本市に出展された、イスラエルの最新兵器のプロモーションビデオを見て、AI 兵器のもたらす未来について考えた。更に中国の高校生世代で起きていることや無人兵器についての動画を見て、2･3 人で無人兵器のメリット・デメリットについて話し合った。最後に、SGI 提言の「AI 兵器」について述べられた部分の読み合わせを行い、LTD という手法を用いて、SGI 提言について議論を行った。

◯GRIT 用 PowerPoint：AI 兵器（抜粋）

〇生徒の感想

AI の技術が最強の兵器をつくる目的で使用されようとしていることに対して、とても恐ろしく感じました。本来、AI の技術は、これからの生活をより豊かにしてくれる希望ある技術であると思います。無差別に人の命を奪ってしまうような、恐ろしい兵器に利用されるようなことは、絶対に防がなくてはいけないと思いました。また、優秀な高校生を AI 研究者に募集するという動画には、衝撃を受けました。私たちは、世界平和に貢献できる人材に成長していけるよう、日々学んでいますが、「何のために学ぶのか」ということを問うことが、どれほど大事なことなのかと改めて思いました。

⑭～⑯7/12・9/14・9/12 インタビュー講座・インタビュー・インタビューポスター発表会

本年も高校１年生全員が探究活動の課題として夏休みにインタビューに取り組んだ。フィールドワークリサーチとして、「環境、開発、人権、平和」の４分野の中からテーマを選び、身近でその分野で働く人々にインタビューを行うことにより、現実の中でどんな活動が行われているのかを学ぶことを目的とした。

ＮＨＫの高校講座「国語表現」から「インタビュー」の回を抜粋して視聴し、その後、課題を説明。

生徒はそれぞれ夏休みに身近な人にインタビューを行い、内容を、Ｂ４のポスターとしてまとめた。

９月のＧＲＩＴの時間に、ポスター発表会として、グループで自分のポスターを見せ、内容を発表していき、優秀作品をグループでひとつ決め、代表はクラスみんなの前で発表。更に、クラスで最優秀作品も決め、全作品を廊下に掲示した。

○GRIT 用 PowerPoint：インタビュー説明（抜粋）

⑰⑱⑲　9/21・10/5　テーマ：環境　「アースカム」

ISS のデジタルカメラを地上から操作し、地球を撮影しその写真から地球について考えるプロジェクトである。その EarthKAM を疑似体験する授業を行うことで、地球の今を考える授業を行った。

進行は GRIT リーダーが行った。

EarthKAM の説明、EarthKAM のミッション・ISS についてのビデオを見た後、実際に EarthKAM プロジェクトが撮影した写真をもとにクイズを行った。

その中で宇宙から地球を見る視点を学び、地球全体のためにできる行動を考えた。さらに、大阪府が提供している環境カルタの絵札を見て、読み札をつくり、実際の読み札と見比べてみるということを行い、どう啓発するかを考えた。

◯GRIT 用 PowerPoint：EarthKAM・環境カルタ（抜粋）

○生徒の感想

（かるたを見て）私は今までディポジットなるものを知らなかったので、てっきりこの絵ではすでに地球ではバナナはもう育たなくなっていて、いくら金を積んでも無駄ということかと思ったら違ったので、今日新しいことを知ることができて良かったと思いました。

一人ひとりの日々の行動の積み重ねだと思うので、エアコンの設定温度やエコバッグなど、１つ１つ心がけていくことが大切だと感じました。

⑳㉑　10/24　テーマ：平和　「原爆詩朗読会・沖縄戦」

核兵器について学ぶために、広島フィールドワークの際に国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で行われている「被爆体験朗読会」を行った。広島フィールドワークに参加した生徒が全クラスを分担して担当し、フィールドワークのときの報告が行われた。その後、原爆被害の概要をまとめた「被爆の爪痕」のビデオを視聴。その後 GRIT リーダーさんが被爆体験を２つ朗読した。

次に４つの原爆詩を全員で音読、その後グループごとに１つずつ音読した。そして、その様子を思い浮かべながら、感想を話し合った。

休憩をはさんで、原爆の問題点がかかれたプリントを学び、ジグソー法をつかって、新しいグループでそれぞれが発表した。さらに NHK スペシャル「スミソニアン展示」を視聴し、アメリカの意見を学んだ。

進行は GRIT リーダーさんにお願いした。

◯GRIT 生徒用プリント：原爆詩朗読会（抜粋）

GRIT 平和　ワークシート

① ビデオ１の感想
② 朗読会をしてみて思ったこと
③ 自分たちの班の内容を１分で発表できるようにまとめよう
④ 他の班のメンバーの発表をメモしよう
⑤ 学んだこと・感想

◯GRIT リーダー用進行プリント

11/19　２・３限 GRIT リーダー会１・２年平和用

よろしくお願いします。シナリオ付き PowerPoint は木曜日の帰りの HR で担任の先生から配ります。今日は流れと、あらかじめ準備しておいてほしいことをお話しします。

GRIT テーマ：核兵器

核兵器の悲惨さを広島の体験談を使って学び、問題点を資料によって、ジグソー法で学ぶ。２限（GRIT の１時間目）は広島 FW メンバーが全クラスに入って、思いなどを話してくれます。（各クラスに担当の広島 FW メンバーがいきます。他クラスからくる場合もあるので、進行は基本的に GRIT リーダーさんがお願いします。もし可能なら、あらかじめ打合せができると素晴らしいです）

GRIT リーダーの役割

①．GRIT 進行役（シナリオ付き PowerPoint を準備中）
②．グループワーク用グループ（１グループ５～６人）作成（途中で解体します）
　　（公欠がないかなど担任の先生とあらかじめ相談しておいてください）
③．体験談の朗読（一人ずつ）

GRIT（２・３限）流れ　波下線はあらかじめ GRIT リーダーが準備すること

2時間目：

①．導入説明（教員）・プリント配布・グループ移動（５分）
　グループをあらかじめ作成しておいてください。
②．広島 FW メンバーによる一言（５分）
③．ビデオ（PowerPoint 内にあります）（１０分）
④．被爆体験記朗読会（２０分）：別紙参照
　被爆体験記を渡しますので、それを１人ずつ読んでください。（ぜひ最大限気持ちを込めて読んでください）
⑤．ディスカッション・感想記入（１０分）

3時間目（グループは変えても変えなくてもかまいません）

①．説明＋資料配布（５分）

②．資料をグループごとにまとめ、全員が１分で説明できるようにする。（１０分）

③．グループ移動（５分）

全グループがばらばらになるように移動をさせてください。（前回のポスターツアーの方法を思い出して、担当の先生と相談してください）

④．新グループ内で前グループでまとめた内容を発表（１０分）

⑤．ビデオ（１０分）

⑥．ディスカッション・感想記入（１０分）

◯GRIT 用 PowerPoint：原爆詩朗読会（抜粋）

〇生徒の感想

アメリカと日本の考え方のちがいは、とても考えさせられました。でも、私はやはり原爆投下は絶対にいけないことだと思いました。そもそも戦争がいけないのです。立場による考え方の違いも踏まえて、これからもっと平和について考えていきたいと思います。

22・23　11/2　テーマ：開発　「今井夏子さん（国連大学）セミナー」

〇生徒の感想

今、日本人の暮らしが、アフリカやアジアに負担をかけたり苦しめたりしていると知って、申し訳なさと、悔しさを感じました。また、アフリカで働きたいと言っている割に、今の自分は何も知らない状態だから、もっと調べていかないといけないなと思いました。

24・25　11/8　テーマ：平和　「平和のためにできること」

GRIT 平和最後の回では、２０１６年に国連で核兵器禁止条約に日本が反対をしたということから、そのことに「賛成」「反対」の立場の意見を読み、同時に昨年１２月に行われた「国連軍縮会議」の様子、「核廃絶を訴える高校生たち」とのビデオを見て、自分達ができることは何だろうかと考えた。

〇GRIT 用 PowerPoint：平和のためにできること（抜粋）

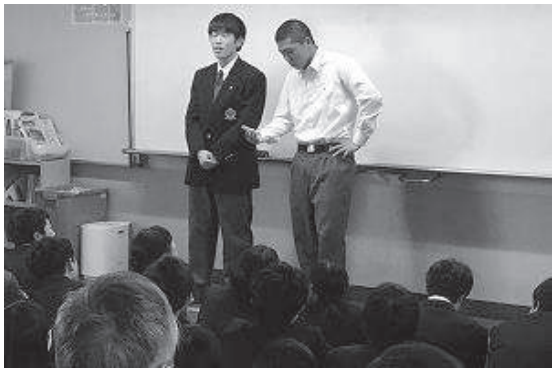
〇生徒の感想

ビデオの中にもあったように、日本は被爆国でもあり、アメリカに守られている国でもある、という非常に複雑な立場にあると思います。しかし、日本だからこそ言えることもあると思います。非核保有国と核保有国の溝を深めるのではなく、互いに意見を交わしあい、平和に進めるような世界になっていかなければならないと思いました。

世界中の高校生が平和について考えている様子を見ると、私も平和について考え、行動していこうと改めて決意することができました。また、ビデオを見ていると、世界中の人々と話し合うためには英語が重要だと感じたので、これからも語学に励んでいきたいと思います。

○　12/12～2020/2/15　プレゼンテーション準備・発表

６人グループを作成し、１年間学んできたことをまとめ、学園生からの提言という形でまとめて、保護者の前で発表した。この発表では、寸劇・紙芝居・模造紙によるまとめ・パネルディスカッションなどの手法を使うことにより、どう発表したいことをまとめるのか、表現するのかを学んだ。



（<u>保護者感想</u>）

・一人一人、それぞれ役割があり、協力しあっていく姿がよかったです。テーマもよく、いろいろな発表があり、聞く側も学べたと思います。

・それぞれが考え、友の意見を聞いて学びあった成果を感じました。

・寸劇形式を盛り込んだプレゼンを楽しませていただきました。人前に出るのが苦手な人も一生懸命活き活きと取り組む姿に感動しました。

2 年生　テーマ：「課題研究」　※赤字は、変更済み部分

2 年生の GRIT では、1 年間を通して、グループによる課題研究を行った。SDGs（持続可能な開発目標）を達成するために、私たちに何ができるのかを考え、行動に移すことを主眼に置き、研究を行った。

1 学期は、自分の興味がある SDGs を選び、本校創立者と識者との対談集や SGI 提言と関連づけてプレゼンを作成。2 学期以降は、それまでの探究の上に、テーマを深め、リサーチクエスチョンと仮説について検証をかさねた。

4 月 13 日　課題研究立ち上げ・グループ決め・SDGs 学習

4 月 27 日　代表プレゼン見学、リサーチ・学習

5 月 11 日　創価大学研修プレゼン立ち上げ、リサーチ・学習

創価大学研修に向けて、日程を確認し、どのようなプレゼンテーションを作るのかを徹底した。

5 月 18 日　リサーチ・学習

6 月 1 日　創価大学研修プレゼン準備

創立者の対談集を通して、対談の要旨をまとめ、スライド作成に取り掛かる。

創大研修プレゼン　チェックシート

（　　）組（　　）班　名前（　　）

	Ⅰ:項目ごとの内容理解	Ⅱ:スライドの達成度	Ⅲ:聞いている人がプレゼンに興味を持てるか
①対談集について（選んだ理由、分野との関連）	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
②対談者について	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
③対談集の内容（要旨）	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
④創立者の平和哲学　特に伝えたいこと	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
⑤これから研究したいこと	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
⑥参考文献	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
班の現在の進み具合、現状			

創大研修プレゼン　チェックシート

（　　）組（　　）班　名前（　　）

	Ⅰ:項目ごとの内容理解	Ⅱ:スライドの達成度	Ⅲ:聞いている人がプレゼンに興味を持てるか
①対談集について（選んだ理由、分野との関連）	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
②対談者について	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
③対談集の内容（要旨）	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
④創立者の平和哲学　特に伝えたいこと	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
⑤これから研究したいこと	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
⑥参考文献	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5
班の現在の進み具合、現状			

6 月 8 日　創価大学研修プレゼンリハーサル

分野別に集まり、創価大学研修で行うプレゼンテーションのリハ

6 月 12 日～14 日　創価大学研修にてプレゼンテーション

創価大学研修では、大学教授を前に、各グループが発表を行った。大学教授には事前にプレゼンデータを共有しており、本番では質疑応答も行い、様々なアドバイスを頂いた。

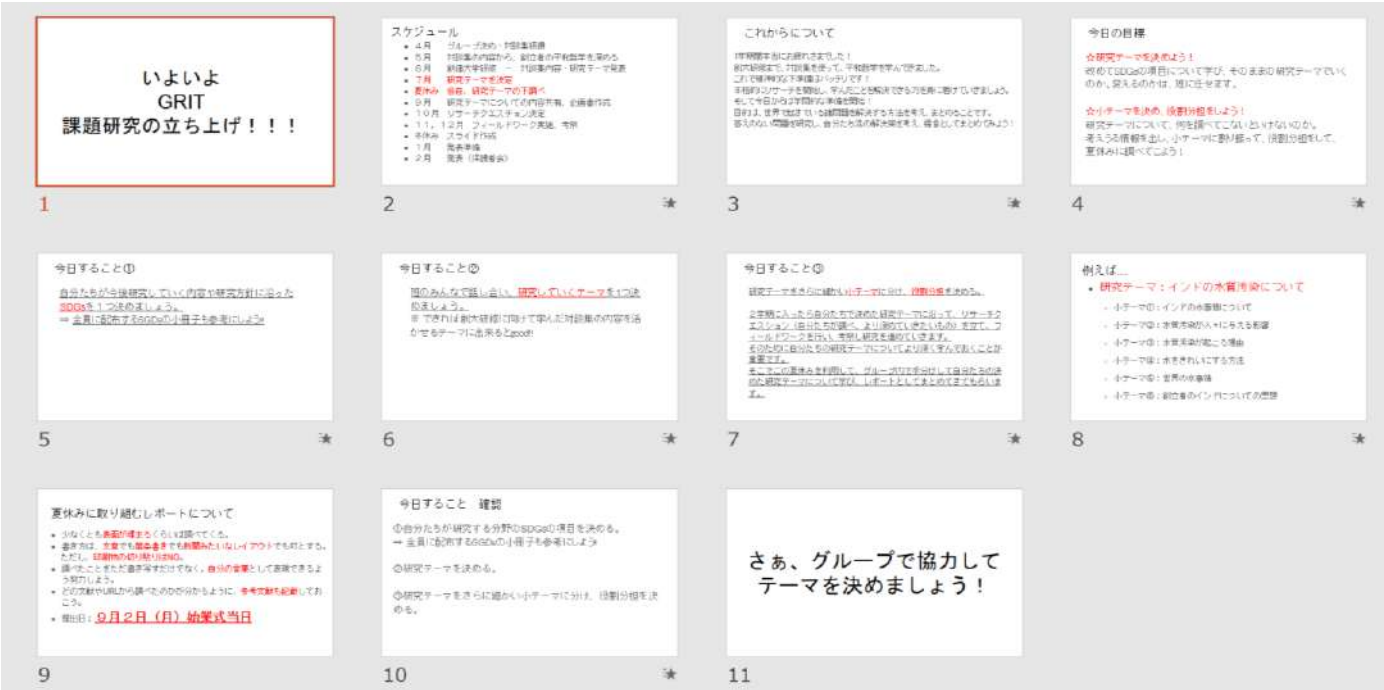
6 月 19 日　創価大学でのプレゼン振り返り

創価大学研修で教授から頂いたコメント等を参考に、プレゼンの改善点や次の課題研究のテーマについて簡単な話し合いを行った。

7 月 12 日　課題研究のテーマ決め

本格的な課題研究に移るため、対談集で学んできた内容を踏まえつつ、興味のある SDGs を再度班で話し合い、1 つに決めた。

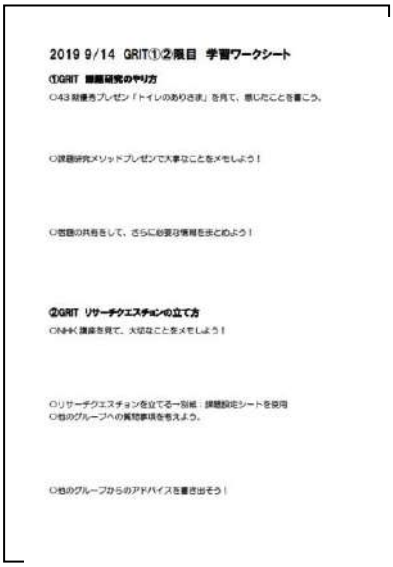
そして、そこからさらに深く研究していくテーマを絞り、そのテーマに関して、いくつかの関連する小項目を上げ、夏休みまでの調べ学習とした。



9 月 14 日　課題研究についてのプレゼン講座、宿題共有、リサーチクエスチョン・仮説の設定

卒業した 43 期生で優秀プレゼンに選ばれた「トイレのありさま」を見たあと、「課題研究メソッド」のプレゼンを見て、探究の進め方を再度確認する。その後、夏休みの宿題で各自が調べてきたことの共有。参考文献等の確認をし、リサーチクエスチョンの設定にうつった。

NHK 講座を視聴後、研究の流れについて再確認。最初のリサーチクエスチョンの設定とそれについての仮説をワークシートを使いながら立てる。その後、テーマとリサーチクエスチョンと仮説についてジグソー法を使って、他のグループに紹介しアドバイスをもらう。次回への課題として、リサーチクエスチョンに対しての根拠調べや効果的な仕掛けを考える。



2019 9/14 GRIT①②限目 学習ワークシート

①GRIT 課題研究のやり方

○43期優秀プレゼン「トイレのありさま」を見て、感じたことを書こう。

○課題研究メソッドプレゼンで大事なことをメモしよう！

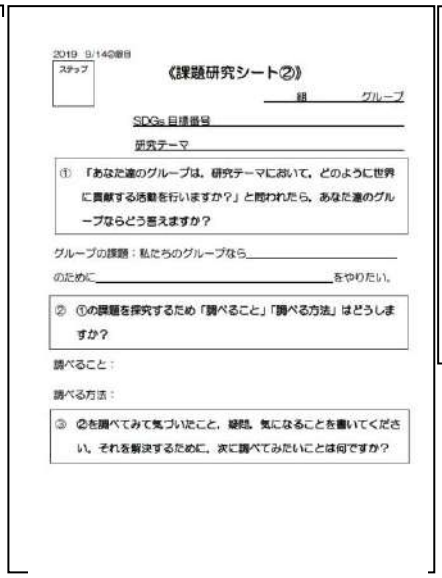
○問題の共有をして、さらに必要な情報を集めよう！

②GRIT リサーチクエスチョンの立て方

○NHK講座を見て、大切なことをメモしよう！

○リサーチクエスチョンを立てる→別紙：課題設定シートを使用
○他のグループへの質問事項を考えよう。

○他のグループからのアドバイスを書き出そう！



2019 9/14②限目

ステップ

《課題研究シート②》

組　　グループ

SDGs目標番号

研究テーマ

① 「あなた達のグループは、研究テーマにおいて、どのように世界に貢献する活動を行いますか？」と問われたら、あなた達のグループならどう答えますか？

グループの課題：私たちのグループなら＿＿＿＿＿＿＿＿

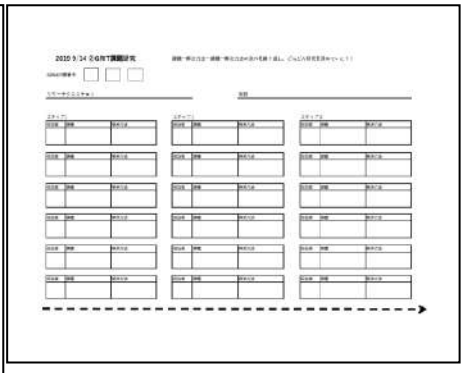
のために＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿をやりたい。

② ①の課題を探究するため「調べること」「調べる方法」はどうしますか？

調べること：

調べる方法：

③ ②を調べてみて気づいたこと、疑問、気になることを書いてください。それを解決するために、次に調べてみたいことは何ですか？



9 月 21 日　リサーチクエスチョンと仮説の検証

ワークシートを使いながら、調べてきたことを共有し、仮説の検証を行う。仮説を立証できそうであれば、そのまま研究を進め、仮説を立証できない場合は、別の角度から仮説を検証するという形で研究を進めた。

生徒たちは、SDGs の分野によって、比較的身近な問題に結びつけ、仮説を進めていくグループと、身近な問題に結びつけにくく、様々な観点から問題解決策を考えているグループに分かれ、お互い試行錯誤しながら研究を進めていた。

10 月 24 日　課題研究の続き・模擬国連見学

前回の研究の続きを行った。

3 年生の模擬国連を代表のメンバーが見学し、ハングアウトというアプリを使って全クラスに放送した。来年のことを踏まえて、国ごとの交渉を見たり、3 年生の意見を聞いたりした。

11 月 2 日　課題研究の続き

11 月 8 日　スライド立ち上げ、作成

ここから課題研究で調べてきたことをスライドにするため、スライド作成の講座を見た。スタディサプリ提供の「プレゼンテーションの技術」を見て、スライド作成にあたってのアイデアの出し方や、情報整理の仕方について学んだ後、ワークシートを使って一人一人が持っている情報をグループで整理した。

その後「見やすい！分かりやすい！パワポのコツ」を見て、フォントや画像、データの使い方などを学び、スライド作成に取り掛かった。

11 月 27 日　スライド完成

スライドの準備を少し行い、完成したデータを各教員に共有した。次回の大学院生への発表について簡単に確認した。

12 月 11 日　大学院生への発表に向けてプレゼン練習

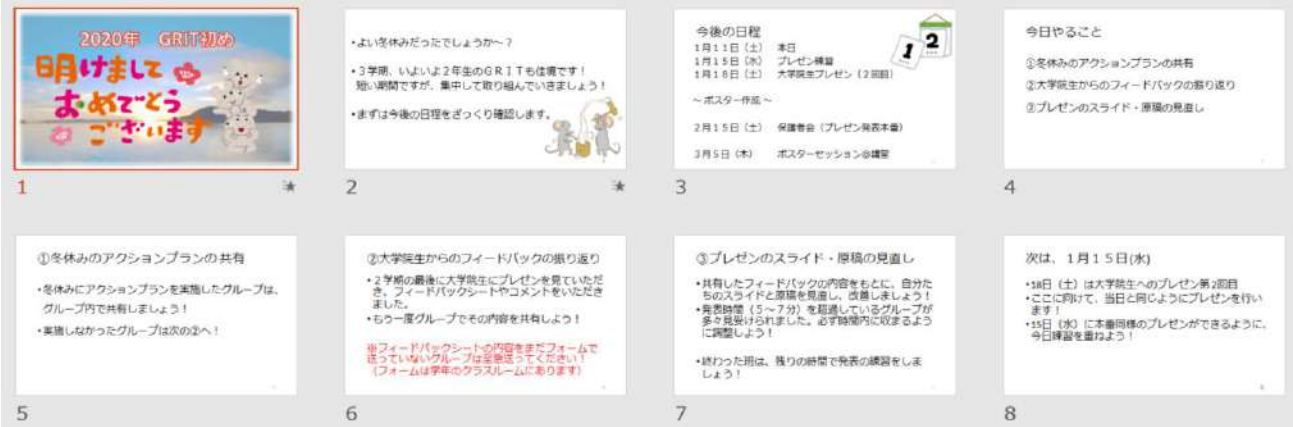
12 月 12 日　大学院生への発表 1 回目

各クラスで発表を行う。発表の順番を決め、大学院生にも入ってもらい、発表と質疑応答を進めた。発表している間、他のグループは自分たちのスライドの修正を行っていた。最後に全体へのアドバイスをもらい、冬休みの間のアクションプランについて共有して終了した。

12 月 17 日 SDG s 映画鑑賞

2020 年 1 月 11 日　アクションプランの共有・大学院生からのフィードバックの振り返り

前回の大学院生への発表を振り返り、記入してもらったフィードバックシートを使いながら、プレゼン・スライドの見直しを行った。

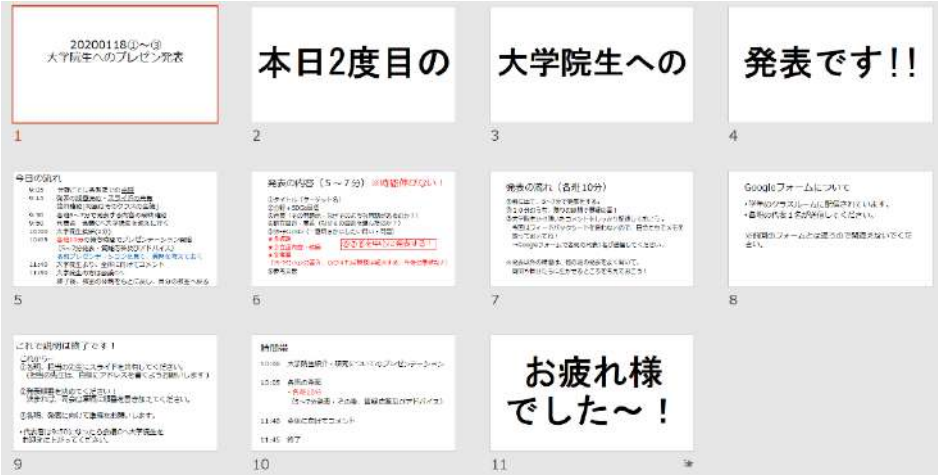


1 月 15 日　プレゼン発表練習

1 月 18 日の第 2 回の大学院生への発表に向け、プレゼンの発表練習を行った。担当教員が時間をはかり、一斉に発表を開始。発表が終わったグループから着席し、時間の確認を行った。

1 月 18 日　分野別プレゼンテーション発表、大学院生への発表 2 回目

環境・開発・人権・平和の分野にはそれぞれ 16 グループ存在するので、それぞれの分野のグループを 2 班に分けて、1 班 8 グループ（合計 8 班 16 グループ）体制を作り、班ごとに 8 教室にわかれプレゼンテーション大会を行った。前回と同じように大学院生にはフィードバックシートを記入してもらい、生徒たちが後から振り返ることができるようにした。



1 月 27 日　ポスター作成開始

生徒たちは、最後の段階として、今後行われる授業公開で行うパワーポイントでのプレゼンのブラッシュアップ、そして、一般公開されるポスターセッションの作成を行うことになる。5 時間ほどの時間を割り当て、ポスターの下書き作成を行った。

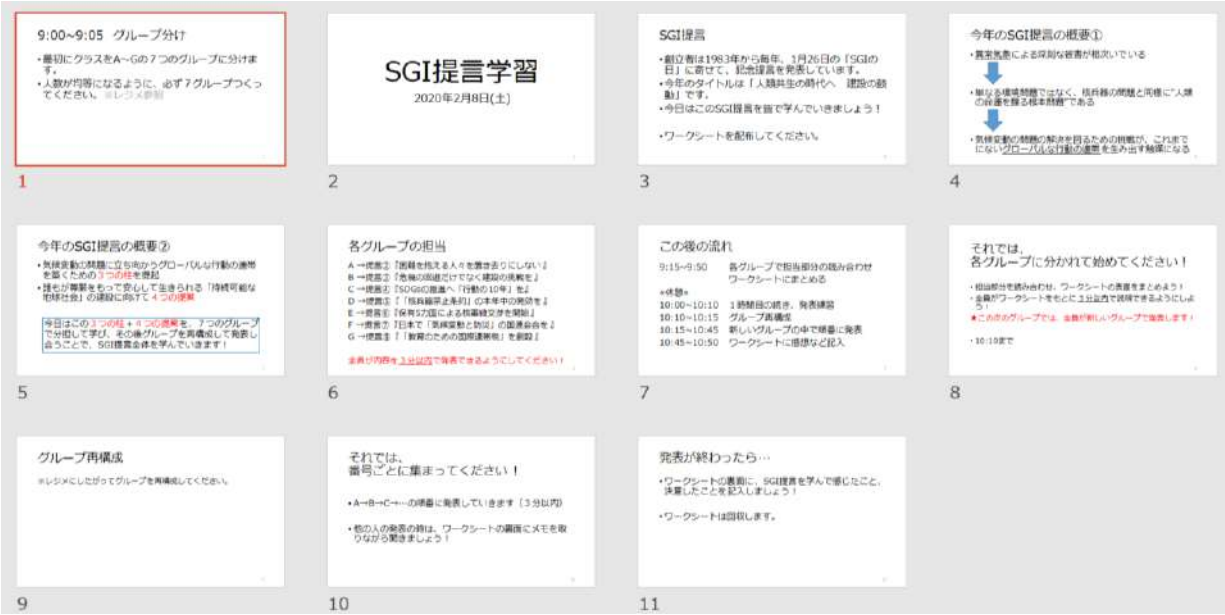
必要事項として、①テーマ②SDGｓ③リサーチクエスチョンを入れるように指示。その他の内容は自由裁量とした。

2 月 1 日　ポスター作成

下書きをもとに、ポスターを作成。昨年度と同じように 2 年生のポスターセッションを経験している分だけ、ポスターに書く字の大きさ、構成、色合いなどは、細かく指示をしなくとも、ある程度イメージが出来ていたため、比較的にスムーズに作成をすることができた。

2 月 8 日　SGI 平和提言学習

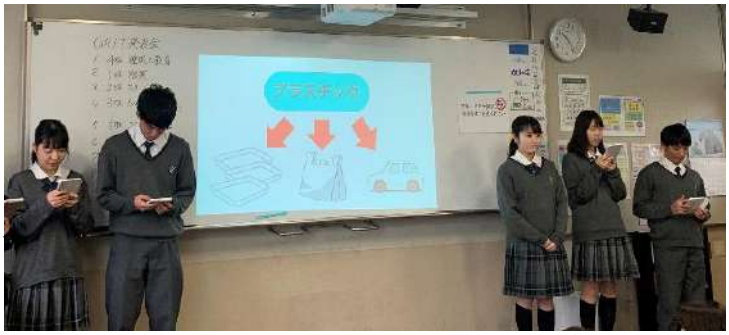
今年度の SGI 平和提言を学び、グループでの学習とした。各クラスを 7 班に分け、ページごとにグループを割り当てた。再度グループをシャッフルし、ジグソー形式で各ページの内容を共有し合い、SGI 平和提言の要旨を学んだ。



2 月 12 日　プレゼン発表練習

2 月 15 日　授業公開でのプレゼン発表

生徒たちは、保護者を招いての授業公開を行い、そこで一年間の成果を発表する機会を作った。自分たちだけの発表をしていると、緊張感がだんだんと薄れてしまいがちになるため、このように、観衆を変えてプレゼンする機会は、生徒たちにとって非常に有益な機会となった。



＜保護者の感想＞

■各グループとても良く SDGs のことを勉強されていて良かったです。自分たちが実生活の中で目標達成の努力として“自分たちに何ができるか”を考えて実践してきたことに感動しました。

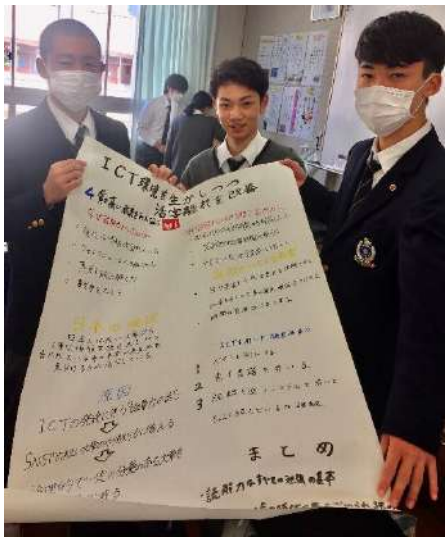
■平和のために一人一人が身近なことからできることを考えており、発表を聞くことで改めて自身も SDGs に対して意識を持てました。昨秋、他校の大学祭に参加したとき、SDGs のブースがあり、そこで発表をされていた方は関西創価の卒業生でした。今回の研究発表がとても貴重な経験であることを強く感じました。

■発表の後の質問に戸惑うことなく、「この定義は〇〇の意図なので、その質問は…」と明確に答えておりすごいと思いました。はっきり議論する立派な姿をみて、将来が楽しみです。
内容も難しいものもあり、こちらも考えさせられました。

3 月 5 日　ポスターセッション一般公開

一般公開を学校のホームページで呼びかけ、お知らせを全国の SGH 校に郵送した。しかし、今回のコロナの影響により、残念ながらポスターセッションは中止となった。

準備をしていた生徒のポスターは以下のようなものである。



３年生　テーマ：「模擬国連」「論文・英語サマリー」

○テーマ：平和「核軍縮交渉シミュレーション」

模擬国連を行うにあたり、昨年度までに引き続き核軍縮交渉シミュレーションを行った。生徒を各クラス１２のグループにわけ、架空の国という設定で、模擬国連風の交渉を行った。広島女学院高等学校の教材を教えていただき、時間数などにアレンジを加え、授業をさせていただいた。

１２のグループにはそれぞれの立場と指令が配られ、自分たちが果たしたい目的が示される。それを利用し、交渉と作戦をたてて交渉していく。

クラスによっては、１国の力が強く、交渉をリードするところもあれば、同盟を組んで、交渉を行ったクラスもあった。

進行の様子などは 2016 年度報告書を参考にしてください。

○アカデミックライティング

講師：創価大学士課程教育機構 野﨑雅子さんをお迎えし、論文作成のためのリサーチ・ライティングのための講座を開催した。

内容：相手に伝わるライティングスキル（構成・パラグラフライティング）を身に付ける。
一貫性とは何かを理解し、一貫性のあるレポートのアウトラインを考える。

○論文・英語サマリー

【　趣旨　】GRIT 学年模擬国連で学んだこと、調べたことについて自分自身のクローズ（提言）を考え論じる

【　論文タイトル　】『貧困により教育を受けられない全ての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現』

上のテーマを前提として、そのテーマと各国がどのように関わっていくか、課題解決のための提案を論じる。（模擬国連部の生徒は、『学年模擬国連における課題と展望』をテーマとする）

【　作成日程　】2 学期授業　現代文演習及び現代文（佐藤先生・藤原先生）の授業でアカデミックライティング事前準備

5 月 11 日（土）②③限「アカデミックライティング講座」　※問いたて、アウトライン作成

12 月 12 日（木）②③限「アカデミックライティング講座」　※アウトライン確認、参考文献リスト

※2 学期中に、論文を完成させる

【論文について】　①文字数：2000 字程度（文字カウントで）
②グーグルドキュメントやワープロソフトなどに入力。（手書き不可）

12 月 13 日（金）GRIT　※提出〆切　各国で意見交換し、ルーブリック評価。

12 月 18 日（水）GRIT　※最終提出〆切　グループを作り、発表をしあって再度論文のルーブリック評価を行い、修正。よい論文を選ぶ。

12 月 18 日（水）この日までに作成を終わらせる。

【他の授業との連携】※3 学期の成績に反映された

・政治経済：GRIT の論文を含めて、さらに論文を追加作成したものが評価される

・TEⅢ：論文をもとに、英語サマリーを作成・完成し、評価される

2019 年度

高校 45 期
学年模擬国連総会

関西創価高等学校

１１月８日（金）

11.8　第2回学年模擬国連会議

議題：貧困により教育を受けられない全ての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現

【模擬国連とは】

模擬国連とは、参加者が各国の大使になりきり、定められた議題について実際の国連での会議と同じ形式で会議を行うことです。国際政治のしくみを理解し、他国と合意形成をしながら国際問題の解決法を考える過程を体験できることから、教育プログラムとしても高い評価を受け、現在では世界中の大学・高校において授業に採用されているほか、学生の課外活動としても楽しまれています。

【会議前の準備】

模擬国連では、参加者それぞれが担当国の外交官として会議に臨むことが求められるため、担当国の調査・研究が重要となります。本年4月、学年模擬国連の立ち上げ当初から、生徒たちは担当国の基本情報（政治・経済・歴史など）や教育問題の現状・背景、過去に行われてきた対策などについてリサーチをしてきました。そして、初等教育の普及における問題点の分析を行い、解決策となるクローズ（政策）を考えました。本日、会場内に掲示しているポスターには各国のクローズが記載されています。10月には各クラスで地域討議を行い、ワーキングペーパー（WP）と呼ばれる各国のクローズを集約した文書を完成させました。

【会議当日の行動】

会議当日は、事前に立案した自国のクローズをもとに他国との交渉を繰り返し、会議の意思決定の下地となる決議案（Draft Resolution、DR）を作成していきます。最終的には、担当国の利益を追求しつつも、国際社会にとっても有益かつ問題解決に実効的な解決策を盛り込んだ決議案を投票にかけ、決議（Resolution）として採択します。前会議では、９つのWPを４つの決議案にまとめました。今回は更に議論や交渉を重ね、それらを３つ以内におさめ、投票を行い決議を採択します。

【用語解説】

- **モーション（Motion）**
  会議中に出す動議。今回は主にモデとアンモデの2種類の動議を使います。
- **モデ（Moderated caucus）**
  着席したまま、全員で議論することができる時間。自国が発言したいときに挙手し、議長に当てられたら発言が出来ます。議場全体に共有したいこと、クローズもしくはDRに対する質問やそれ対する答えについて話します。
- **アンモデ（Unmoderated caucus）**
  自由に動き回って、話したい他国大使のもとへ行って（あるいは複数の国の大使を集めて)議論・交渉をすることができる時間。
- **アウトオブアジェンダ（Out of Agenda）**
  議題の解決に直接繋がらない、また議題からそれているクローズ。

【本日の式次第】

時間帯	流れ
10：35	開会宣言・出席確認
10：43	各DR提出国によるDR説明
10：49	モデ（8分）
10：57	アンモデ（50分）
11：47	DR提出
12：00	投票開始
12：08	Best Delegates賞授与式
12：20	完全終了

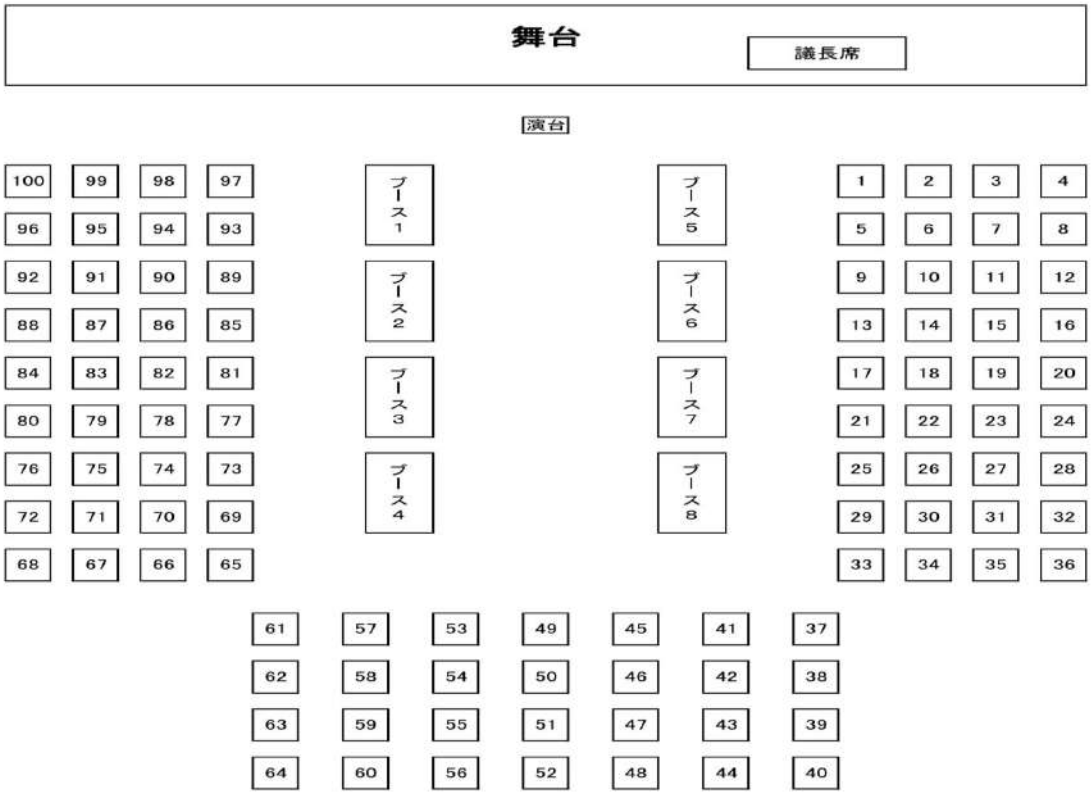
１．2019 年度スケジュール

2019年度　高校3年生模擬国連大会　スケジュール						
月	日	曜日	時限	会議	内容	備考
4	27	土	③	模擬国連立ち上げ	模擬国連部によるﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ、各ｸﾗｽ国決め	
5	18	土	② ③	PPP作成	PPPの書き方の説明、ﾘｻｰﾁ、PPP作成→提出	
6	1	土	③	PPP提出	PPP作成→提出	提出：ｸﾗｽﾙｰﾑ(6月1日まで)
7	10	水	② ③	ｸﾛｰｽﾞ作成	ｸﾛｰｽﾞの説明、ｸﾛｰｽﾞの作成	
7	11	木	① ② ③	ﾎﾟｽﾀｰ作成	ﾎﾟｽﾀｰの説明、ｸﾛｰｽﾞが完成次第、ﾎﾟｽﾀｰの作成・完成	
7	12	金	①	ﾎﾟｽﾀｰ発表	各国のﾎﾟｽﾀｰ発表	提出：1学期振り返りｱﾝｹｰﾄ (7月20日まで)
夏休み				模擬国連部メンバーによるクローズチェック		
9	14	土	① ② ③	ｸﾛｰｽﾞ修正 ｶﾝﾄﾘｰｽﾋﾟｰﾁ作成	ｸﾛｰｽﾞ修正、ｶﾝﾄﾘｰｽﾋﾟｰﾁ作成、ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ説明	
9	21	土	① ②	地域討議 ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ作成	地域討議、ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰの作成と提出	提出：Googleﾄﾞｷｭﾒﾝﾄ
10	5	土	① ②	ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ仕上 他地域WP確認	ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ仕上げ、他地域ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ確認・作戦会議	
10	18	金	① ② ③		第1回会議ﾘﾊｰｻﾙ、JICAによる出張授業	
10	24	木	① ② ③	第１回会議	地域ﾜｰｷﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ発表(ﾌﾞﾛｯｸｽﾋﾟｰﾁ)、説明→交渉→DRｸﾞﾙｰﾌﾟ作成	提出：議長　ﾁｪｯｸ：議長団
11	2	土	① ② ③		DRごとに討議、交渉	
11	8	金	① ② ③	第２回会議	DRの説明→交渉→修正DRの作成→修正DRの提出→修正DRの発表→投票	提出：議長　ﾁｪｯｸ：議長団

２．2019 年度国割り

２０１９　関西創価高校　ＳＧＨ　模擬国連　国割り								
	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組	8組
	南米・カリブ海	サハラ以南（北）	アラブ・北アフリカ	東南アジア	東ヨーロッパ	サハラ以南（南）	環太平洋	西ヨーロッパ
1	ブラジル	ニジェール	エジプト	カンボジア	ポーランド	マダガスカル	カナダ	イタリア
2	アルゼンチン	シエラレオネ	サウジアラビア	ラオス	ロシア	モザンビーク	マレーシア	アイスランド
3	ウルグアイ	チャド	ヨルダン	ミャンマー	ウクライナ	ウガンダ	シンガポール	オランダ
4	パラグアイ	カメルーン	カタール	モルディブ	ハンガリー	アンゴラ	インドネシア	スイス
5	エクアドル	ギニア	チュニジア	タイ	リトアニア	南アフリカ	日本	ギリシャ
6	ドミニカ共和国	南スーダン	アルジェリア	アフガニスタン	スロバキア	ジンバブエ	フィリピン	ドイツ
7	コロンビア	ガーナ	イラク	インド	クロアチア	ケニア	ベトナム	ノルウェー
8	チリ	コートジボワール	アラブ首長国連邦	ネパール	ベラルーシ	中央アフリカ	韓国	フィンランド
9	ペルー	ナイジェリア	イスラエル	バングラデシュ	スロベニア	ザンビア	中国	スウェーデン
10	キューバ	エチオピア	モロッコ	東ティモール	ルーマニア	ブルンジ	ブルネイ	スペイン
11	ハイチ	セネガル	クウェート	パキスタン	チェコ	コンゴ民主共和国	オーストラリア	デンマーク
12	ハバナ	マリ	イエメン	ウズベキスタン	カザフスタン	ナミビア	ニュージーランド	フランス
13						タンザニア	アメリカ	イギリス
14						マラウイ		
国数	12	12	12	12	12	14	13	13
生徒数	45	45	45	45	45	44	42	39

３．座席表



1	アフガニスタン	37	ブルネイ	65	チリ
2	ドミニカ共和国	38	ギリシャ	66	イラク
3	ラオス	39	ミャンマー	67	ノルウェー
4	サウジアラビア	40	スウェーデン	68	アラブ首長国連邦
5	アルジェリア	41	ブルンジ	69	中国
6	東ティモール	42	ギニア	70	イスラエル
7	リトアニア	43	ナミビア	71	パキスタン
8	セネガル	44	スイス	72	イギリス
9	アンゴラ	45	カンボジア	73	コロンビア
10	エクアドル	46	ハイチ	74	イタリア
11	マダガスカル	47	ネパール	75	パラグアイ
12	シエラレオネ	48	タンザニア	76	アメリカ合衆国
13	アルゼンチン	49	カメルーン	77	コートジボワール
14	エジプト	50	ハンガリー	78	日本
15	マラウィ	51	オランダ	79	ペルー
16	シンガポール	52	タイ	80	ウルグアイ
17	オーストラリア	53	カナダ	81	クロアチア
18	エチオピア	54	アイスランド	82	ヨルダン
19	マレーシア	55	ニュージーランド	83	フィリピン
20	スロバキア	56	チュニジア	84	ウズベキスタン
21	バハマ	57	中央アフリカ	85	キューバ
22	フィンランド	58	インド	86	カザフスタン
23	モルディブ	59	ニジェール	87	ポーランド
24	スロベニア	60	ウガンダ	88	ベトナム
25	バングラデシュ	61	チャド	89	チェコ
26	フランス	62	インドネシア	90	ケニア
27	マリ	63	ナイジェリア	91	カタール
28	南スーダン	64	ウクライナ	92	イエメン
29	ベラルーシ			93	コンゴ民主共和国
30	ドイツ			94	韓国
31	モロッコ			95	ルーマニア
32	南アフリカ			96	ザンビア
33	ブラジル			97	デンマーク
34	ガーナ			98	クウェート
35	モザンビーク			99	ロシア
36	スペイン			100	ジンバブエ

5. Position and Policy Paper（例）

Position and Policy Paper

2019年度 45期学年模擬国連

担当国名 （日本語） （英語）	インドネシア Indonesia
大使名	松川蓮、森岡英夫、大和怜央奈

今回の議題	**議題：貧困により教育を受けられない全ての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現** **説明:** 世界には，学校に通えない子ども達が約6700万人いると言われています。教育の機会が失われる原因は様々ありますが，今回は**貧困**により教育を受けられない子供達に焦点を当てています。 【注意】貧困の解決を考えるのではなく，どうすれば世界中の全ての子どもに，平等かつ質の高い教育の機会を与えるかを考えていきましょう！

第1部 担当国の基本情報

自国周辺地図	
首都	ジャカルタ
言語	インドネシア語
人口	2億5500万人
貧困率	11.7%
宗教	イスラム教が8割
民族	マレー系
政治体制	大統領制、共和制
内政状況 (紛争とか)	紛争等は無い
自国の略史	7世紀後半～　スマトラに仏教国スリウィジャヤ王国が勃興。 8世紀　中部ジャワに，仏教国シャイレンドラ王朝が興り，ボロブドゥール等の有名な仏跡を残す。 13世紀　イスラム文化・イスラム教の渡来。北スマトラのアチェ地方に最初のイスラム小王国が現れる。ジャワにマジャパイト王国が勃興し，ジャワ以外にも勢力を伸長。 1596年　オランダの商船隊，西部ジャワのバンテン港に渡来。 1602年　オランダ，ジャワに東インド会社を設立。

	1799年　オランダ，東インド会社を解散，インドネシアを直接統治下におく。 1942年　日本軍による占領（～1945年）。 1945年　8月17日，スカルノ及びハッタがインドネシアの独立を宣言。スカルノが初代大統領に選出。オランダとの間で独立戦争（～1949年）。 1949年　ハーグ協定によりオランダがインドネシアの独立を承認。 1955年　バンドンで「アジア・アフリカ会議」開催。 1965年　軍部と共産党との緊張の高まりを背景に「9月30日事件」が発生。翌1966年3月11日，スカルノ大統領は権限をスハルトに一部委譲。 1968年　スハルト大統領就任（第2代大統領）。 1998年　アジア通貨危機をきっかけに，ジャカルタを中心に全国で暴動が発生。民主化運動も拡大し，スハルト大統領は辞任，ハビビ大統領就任（第3代大統領）。 1999年　住民投票により東ティモールの独立が決定。 ワヒッド大統領就任（第4代大統領）。 2001年　メガワティ大統領就任（第5代大統領）。 2004年　国民による初の直接投票によりユドヨノが大統領に選出。ユドヨノ大統領就任（第6代大統領）。 2005年　ヘルシンキ和平合意（独立アチェ運動（GAM）との和平成立）。 2009年　ユドヨノ大統領再任。 2014年　ジョコ・ウィドド大統領就任（第7代大統領）
国のGDP	国あたり:3494.74US億ドル GDP世界ランキング：7位

1人当たりのGDPまたはGNI	3876ドル
援助をしている/受けている国・機関	日本、ドイツ、豪州
所属する国際・地域機構	ASEAN

各国基本情報（外務省）https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html
貧困率ランキング（CIA） http://top10.sakura.ne.jp/CIA-RANK2046R.html

第2部 担当国の教育状況の把握

若者（15歳～24歳）の識字率	男女と共に100%
初等教育における総就学率	男107女104%
初等教育における純就学率	男90女89%
初等学校に入学した子どもが最高学年まで残る割合	データなし

教育指標（UNICEF）：https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/05.pdf

第3部 自国の初等教育について現状把握

教育途上国
1.自国における12歳以下の子どもへの初等教育の現状
2. 1の背景、原因
3. 教育問題解決のために現在自国で実施されている政策や活動　(なければ他国のものでもよい)
4. 自国の初等教育の状況改善に向けての方針・提案

↓自国にあまり問題がない場合…

教育先進国
1. 自国における12歳以下の子どもへの初等教育の現状
識字率・就学率も高く、施設の設備も整っている。 小学校、中学校(計9年間)は義務教育となっており、無料で授業が受けられる。
2. 1の背景、理由
日本以上に学歴社会である。また、国も予算を教育に当てている。 最近では公立よりも教育の質の高い私立が人気を博している。

3. 他国に援助が出来るか
G20の構成国としての経済力や世界最大のイスラム教徒人口を持つことを背景に大国入りをにらみ、世界での発言力を高める狙いあるため支援できる
4. 出来る場合、具体的にどのくらいの経済支援、技術支援が出来るか
経済支援はある程度望めるが技術支援については教師の質がまだ整っていないため行えない。
5. 教育問題解決のために現在自国で実施されている政策や活動　(なければ他国のものでもよい)
第2次25カ年計画（1994/95年～2018/19年）(6-3制の義務教育の実現、教員の質の向上、非識字問題の解決)
6. 教育途上国における初等教育の状況改善に向けての方針・提案
・教育に対する政府支出を大幅に上げて、教師の給料をあげる。 ・都心部の教師を周辺地域に派遣。 ・賄賂を厳しく取り締まる。

第4部　政策立案

クローズ1
UNICEFに、教師の質を高めるために、インドネシアへ、教師になるための教育を受けた教師にきてもらい講習を開いてもらう。

クローズ2
インドネシア政府に、教師が職務に専念できる環境をつくるため、インドネシアの最低賃金をあげることを要求する。(現在月3万円→7万)

クローズ3
インドネシア政府に、地方部での教師の過疎を解決するために、地方部で、その地方だけでも教育が行える制度を整えることを要求する。

Position and Policy Paper

2019年度 45期学年模擬国連

担当国名 (日本語) (英語)	カメルーン Cameroon
大使名	田中正美 荒井貴美子 大野光恩 矢尾勇介

今回の議題	**議題：貧困により教育を受けられない全ての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現** **説明:** 世界には、学校に通えない子ども達が約6700万人いると言われています。教育の機会が失われる原因は様々ありますが、今回は**貧困**により教育を受けられない子供達に焦点を当てています。 【注意】貧困の解決を考えるのではなく、どうすれば世界中の全ての子どもに、平等かつ質の高い教育の機会を与えるかを考えていきましょう！

第1部 担当国の基本情報

自国周辺地図	
首都	ヤウンデ
言語	フランス語、英語、部族語
人口	2405万人(2017)
貧困率	48.0%
宗教	キリスト教　イスラム教
民族	バミレケ族，ファン族，ドゥアラ族，フルベ族等約250部族
政治体制	共和制
内政状況 (紛争とか)	1982年，前大統領辞任で就任したビヤ大統領は長期政権を継続。1990年に複数政党制移行後，国民議会・大統領・地方選挙等で民主化プロセスを進展。主要野党がボイコットした1997年の大統領選挙後，ビヤ大統領は政治的緊張緩和のため，与党カメルーン人民民主連合（RDPC）と有力野党(UNDP)との連立政権を発足。2018年10月の大統領選挙でも有力な対立候補は無く再選。2018年に予定されていた上院議会・地方選挙は1年延期となった。 2013年以降，極北州及び北部州ではイスラム過激派組織「ボコ・ハラム」による誘拐や暴力事件が発生している。また，2016年以降，英語圏地域（北西州，南西州）では，独立分離派と治安部隊の衝突が継続。両地域の治安・人道状況の悪化，難民・国内避難民の発生が懸念される。
自国の略史	1884年　独保護領

	1922年　ベルサイユ条約による英・仏の委任統治領 1960年1月　仏領カメルーン独立(国名：カメルーン共和国) 1960年5月　アヒジョ初代大統領就任 1961年2月　英領カメルーン南部は西カメルーンとして独立，英領カメルーン北部はナイジェリアへ合流 1961年10月　カメルーン共和国と西カメルーンが合併し連邦国へ。アヒジョ大統領就任 1972年5月　連邦制廃止。国名をカメルーン連合共和国に変更 1982年11月　アヒジョ大統領辞任によりビヤ大統領就任 1984年1月　大統領選挙，ビヤ大統領当選 1984年2月　国名をカメルーン共和国に変更 1988年4月　大統領選挙，ビヤ大統領再選 1990年12月　複数政党制移行（同月国民議会で決定） 1992年3月　複数政党制下初の国民議会選挙実施 1992年10月　大統領選挙，ビヤ大統領3選 1997年5月　国民議会選挙，与党側が勝利 1997年10月　大統領選挙，ビヤ大統領4選 2002年6月　国民議会選挙，与党側が勝利 2004年10月　大統領選挙，ビヤ大統領5選 2011年10月　大統領選挙，ビヤ大統領6選 2013年4月　初の上院選挙，与党側が勝利 2013年9月　国民議会選挙

	2018年3月　上院選挙 2018年10月　大統領選挙，ビヤ大統領7選（任期7年）（再選回数無制限）
国のGDP	国あたり:348億ドル GDP世界ランキング：　96位(2018)
1人当たりのGDPまたはGNI	1,360ドル
援助をしている/受けている国・機関	フランス　米国　ドイツ　日本　韓国
所属する国際・地域機構	

各国基本情報（外務省）https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html
貧困率ランキング（CIA） http://top10.sakura.ne.jp/CIA-RANK2046R.html

第2部 担当国の教育状況の把握

若者（15歳～24歳）の識字率	80%
初等教育における総就学率	117%
初等教育における純就学率	92%
初等学校に入学した子どもが最高学年まで残る割合	66%

教育指標（UNICEF）：https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/05.pdf

第3部 自国の初等教育について現状把握

教育途上国
1.自国における12歳以下の子どもへの初等教育の現状
純就学率92%、総就学率117%と、共に高い数値となっているが、初等学校に入学した子供が最高学年まで残る割合は66%と、約3人に1人が最高学年まで在学できていない
2. 1の背景、原因
貧困率が48.0%と世界で26番目に低く、家計維持のために教育を受け続けることができない
3. 教育問題解決のために現在自国で実施されている政策や活動　(なければ他国のものでもよい)
小学校の学費無償化 大分のTMT japanがバイオトイレを寄付
4. 自国の初等教育の状況改善に向けての方針・提案
小学校を卒業させたい。 →学費完全無償化（むずかしい）、バイオトイレの普及、 安全性(治安、環境など)の確保 →治安…他国と協力？(ボコ・ハラム対策) バイオトイレの普及 医療・衛生管理の改善

↓自国にあまり問題がない場合…

教育先進国
1. 自国における12歳以下の子どもへの初等教育の現状
2. 1の背景、理由
3. 他国に援助が出来るか
4. 出来る場合、具体的にどのくらいの経済支援、技術支援が出来るか
5. 教育問題解決のために現在自国で実施されている政策や活動　(なければ他国のものでもよい)
6. 教育途上国における初等教育の状況改善に向けての方針・提案

第4部　政策立案

クローズ1

JICAに対し、安心安全に学校生活をおくれるように、トイレ設備が不十分な学校に、バイオトイレの普及を要求する。

クローズ2

友好国と周辺国に対し、安全な通学路の確保のために、治安が悪くて学校に通うことができない地域に、ボコ・ハラムの規制を要求する。

クローズ3

6．ワーキングペーパー（例）

GA/A/WP3

2019年9月21日

総会

スポンサー：サウジアラビア、アラブ、モロッコ、カタール、ヨルダン、エジプト、イラク、アルジェリア、チュニジア、クウェート、イスラエル、イエメン

国連総会は、

2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「子供の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1，UNESCOに対し、全ての子供の創造的問題解決能力を向上させるために、全ての教育機関に指導することを要求する。（イスラエル）

2，(国境なき医師団など)に協力してもらい、難民生活の中で教育の権利が奪われている現状と、教師の暴力による学校へのトラウマ、を考慮し、世界人権宣言の重要性を今一度強調し、心理カウンセラーに関するボランティア活動の拡大を実現する。（イエメン、アラブ）担当:アラブ岡崎

3，先進国に対して難民の支援をするために大使館が送られてないところがある現状を踏まえることと、12歳以下の子供が教育が受けられるだけの環境及び権利の保証を目指し、大使館の各国への派遣と大使館との連携を円滑化してビザ発行を促進する事を要求する。（アラブ首長国連邦）

4，ユネスコに対し、初等学校に入学した女子の最終学年まで残る割合を上げるために初等学校に入学した女子の最終学年まで残る割合が50%以下の国に女子が学校に来やすい環境を作る事を要求する。（クウェート）

5．UNICEFに、更なる教育の質の重視を目指し、文房具を寄付している現状に加えて、発展途上国の中に文房具購入店の建設を行う事を要求する。（クウェート）

6．初等教育における純就学率が95%以上の教育先進国に対し、発展途上国の低い就学率をあげるために、アフリカ地域の就学率が70%以下の国に就学率を上げるための政策や技術を提供する事を要求する。（モロッコ）

7，UNESCOに対し、教科書代や給食費が有償である現状を打開するために、北アフリカ地域で、教科書代の分割支払い可、給食費の無償化、無利子貸与奨学金の実施することを要求する。（アルジェリア）

8，国の主要産業が天然資源産出国である国が自国に対して、石油、天然ガスのコスト削減による差額を用い、12歳以下のこどもへの教育を促進する教師派遣代を補うことを要求する。（アルジェリア）

9．中東・アフリカ地域の教育先進国に対して、北アフリカ地域の発展途上国からの12歳以下のこども又は教育実習の留学生の受け入れ体制を自国の各教育機関で整えることを要求する。（アルジェリア）

10．UNHCR に対し子供が教育を受ける機会を得るために労働が原因で教育を受けていない子供に労働休暇期間を設けることを要求する。（カタール）

11，UNICEFに対し、多くの児童が教育を受けることができるようにするために、教育のレベルに教育環境が追いついていない国々で、学校建設、環境整備のための資金援助を要求する。（チュニジア）

12，識字率80%以上の教育先進国に対して、教育環境整備の向上のために識字率70%以上の国に、ハイレベルの教育の提供を要求する。（チュニジア）

13，イスラム教を国教とする国に対し、女性差別を将来撤廃することで教育上の平等を図るために、イスラム教の教えに反さない程度の男女平等の考え方をまとめたガイドラインの作成をイスラム教を国教としない国と協力して作成し、初等教育においてそれを使用することを、また、UNICEFにこれらの活動をするための資金援助する要求する。（サウジアラビア、アラブ、モロッコ、カタール、ヨルダン、エジプト、イラク、アルジェリア、チュニジア、クウェート、イスラエル）

14，UNICEFと識字率が80%以上の国に対し、
失業者が教員免許を取得することで国際的に初等教育の質を向上させるために識字率が50%未満の国に教員を育てるための人材や施設、教員になった人々のための国内外の就職のポストの確保、また、語学学校などの外国人教師の受け入れができる教育施設に要求する。(サウジアラビア、ヨルダン、エジプト、イラク、アラブ、イエメン、モロッコ、チュニジア)担当イラク

16．G20加盟国に中等教育(小中学校教育をさす)の就学率が50%以下の国の教育関と、スカイプなどのインターネットデバイスを通じて現実的な情報の共有を通して現在の教育状況を理解し、教師の収入向上のための経済支援を要求する。(イラク)

17．ILOに、教師数が人口1/500以下の国 に対して、教師不足解消のために教師、教育の必要性を促す啓発活動を要求する。(イラク)

18,先進国に対し、発展途上国の識字率の調査を行い50%以下の国に対して教育の重要性を訴えるイベントを開催し、識字率を上げるための政策、教師研修生を支援を要求する。(クウェート、モロッコ、カタール)担当クウェート

19,UNICEFに教師の平均年間収入が一人当たりのGDPの½以下の国、または電気、技術などのインフラ設備を求める国に教育環境向上に特化した新たな機関「AEDCIST(エドシスト)」の設立を求め、「Circumstance（環境）」「Infrastructure（インフラ）」「Quality&Mass（教育の質と量）」「Fund（基金支援）」の四部門の設立を求める。なお、この機関ではすべての経済的、人材的支援の仲介をし、各部門参加国との中継機関としての役割をもつ。(イラク)

20，ITU(国際電気通信 連合)とUNICEFに学校での教育だけでは学力が標準に満たしていない国に対し初等教育でのIT教育を普及、質の向上をさせるために電気が通っていない地域にITを駆使した教育を受けられるよう、必要な資金を援助することを要求する。（イスラエル)(ヨルダン)(サウジアラビア)(イラク)(カタール)担当イスラエル

7 a．決議案（Draft Resolution）（バハマ提出）

GA/A/DR.1

2019年10月24日

総会

提出国: バハマ
スポンサー: ・キューバ・ラオス・カンボジア・ミャンマー・パキスタン・タイ・ウズベキスタン・バングラデシュ・インド・ネパール・ウルグアイ・モルディブ・アフガニスタン・ドミニカ・アルゼンチン・エクアドル・マレーシア・イラク・ニュージーランド・イスラエル

国連総会は、

2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1. UNICEFに対して、教材不足により教育が十分に受けられない子供たちへ様々な教科の質の高い教育をうけられるようにするために、発展途上国にUNICEFと共同で教科書と文房具を作るシステムを創設することを要求する。（キューバ、ラオス、カンボジア）

2. UNDPに対して、インフラ整備がされておらず学校まで行くことが出来ない地域のために、（スクールバスの維持費・道路・電気・通信整備のための）インフラ整備を要求する。（バハマ・インド・カンボジア・モルディヴ）

3. 教育先進国に対して、子供たちを教育する立場の教師の質が悪いことにより質の低い教育が行われていることを解決するために、教育の質に問題がある国や地域で、2025年までに「国境なき教師団」を組織し質の高い教師、専門知識を身につけた教師を育成する人材を派遣することを要求する。(バングラデシュ、カンボジア、モルディブ、ラオス、ミャンマー、パキスタン、タイ、ウルグアイ、エクアドル、ドミニカ共和国、アルゼンチン)

4. 2030年までにUNESCOとUNICEFに対し、保護者や地域社会の教育に対する理解の乏しさの改善と、現地の教師の教育の質を高めるために、貧困によって10%以上の子供が中退してしまう国や識字率50%以下の発展途上国、少数民族地域へ保護者の教育に対する理解のためのセミナーや各民族の言語に合わせた教師へのセミナー、家庭訪問などの広報活動推進を保存食などの特典付きで要求する。（ネパール、インド、ドミニカ共和国、マレーシア、ベトナム）

5. OECD加盟国に学校や教員の不足により、就学できない子供たちをなくすために、半径１０km以内に学校がないところ、電気が通ってない地域への学校建設、教育設備（コンピュータ設備など）の設置を要求する。（ウルグアイ、エクアドル、ニュージーランド、イスラエル)

6. UNICEFに、企業との連携を通して、女子教育の水準を上げるために、衛生面の設備が充実した男女別トイレ、手洗い場を南アジアの学校に設置することを要求する。（パキスタン）

7. UNICEFに対し多民族地域で、その地域の公用語以外を母国語とする民族の12歳以下の子供に対し、公用語を学校の必須科目とし、公用語の勉強が効果的にできる施設の運営のための資金約900万ドル(3万ドル✖300)を援助することを要求する。（ミャンマー、マレーシア）

8. 全ての国に対し、男女の教育格差の是正のために、各地域機構で、その問題解決のための会議を毎年行うことを要求する。（バングラデシュ）

9. GDPの金額の合計が世界ランキング上位20ヵ国に対し、貧困による小学生の中退を防ぐために最終学年の進学率が90%未満の国に企業を誘致して労働者を適正な賃金で雇うことを要求する。（ミャンマー）

10. UNESCO、UNICEF、OECD加盟国とUNDPに対し、公的教育費の対GDP比率が5.10未満の国かつ、15%以上の子供が初等教育で中退してしまうような国に向けて、地域密着型の初等教育などの国別の教育開発計画(教育場所がない地域への教育、質の高い教育、また教育環境整備、ノウハウなど)の作成およびそれを実行するに足りる十分な資金援助を要求する。（ネパール、アフガニスタン、ウズベキスタ、タイ）

11. UNICEFに対し、教員不足を解決するために生徒と教員の人数比率が40:1になるよう、教員不足の東南アジアの教育水準が高く、教師の賃金が低い国から現地の低賃金を基準とした給料で人材派遣をできるプログラムをつくることを要求する。(キューバ、アルゼンチン、バハマ)

12. UNICEFに教師の平均年間収入が一人当たりのGDPの三分の一以下の国または、電気、技術などのインフラ設備を求める国に、教育環境向上に特化した新たな機関（エドシスト）の設立を求め、「環境」「インフラ」「教育の質と量」「基金支援」の四部門の設立を求める。なお、この機関はすべての経済的人材的支援の仲介をし、各部門参加国との中継機関としての機能を持つ。（イラク）

13. ITUに対して、教育に必要な電気を確保するためにインフラの設備を整えることを要求する。(イスラエル)

7 b．決議案（Draft Resolution）（ロシア提出）

GA/A/DR.3

2019年10月24日

総会

提出国: ロシア
スポンサー: クロアチア、スロベニア、スロバキア、ポーランド、ルーマニア、ウクライナ、ハンガリー、チュニジア、ブラジル、パラグアイ、ペルー、チェコ、コロンビア、モザンビーク、ベラルーシ、チリ、フィリピン、アルジェリア、東ティモール、ハイチ、カザフスタン、マラウイ、リトアニア

国連総会は、
2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1. UNICEFに初等教育を受けられる子供が50%以下の国の親に対して保護者の積極的な協力を促すため、子供の教育の重要性を伝えるワークショップを実施するように求める。(ロシア、コロンビア)

2. UNICEF、WFP及びGDP3309億ドル以上の国に対し、学校の出席率を上げるために、給食制度がない国または給食制度があるが無償でない国かつアフリカ大陸に対して、物資と給食支援を要求する。（モザンビーク、フィリピン、コロンビア、マラウイ、ベラルーシ、アルジェリア、リトアニア）

3. UNICEFに対し、学校にトイレがなく思春期に中退してしまう女の子のために、サハラ砂 漠以南の地域に、学校に男女別トイレ、手洗い場を設置することを要求する。(ペルー、チェコ)

4. UNESCOに対し、教師不足により教育を受けられない問題を解決するため、教員1人あたりの生徒数が100人以上の地域に、教師を派遣することを要求する。(ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、スロバキア)

5. UNESCOに対し、お金がなくて労働しなければならず教育の機会を得られない、また失ってしまった人々のために、中南米、サハラ以南アフリカ地域に、世界寺子屋運動の取り組みとその寺子屋にプロジェクターとパソコンを用意しオンライン学習によっていつでも学習できる環境を作ることを要請する。(パラグアイ、ブラジル、ポーランド)

6. 初等教育を受けれるようにするために、GDP1億ドル以下の発展途上国の各国に学校を設置するため、以下のことを求める
   a. UNESCO が HERO (世界各国で、経済的・社会的な理由により学校に通えない子どもたちのために、無料で通える学校を作り、各国の現実に応じた学ぶ機会を子どもたちに提供している団体）などのNPO、NGO団体と協力して、施設建設のため、経済支援として50万＄協力して寄付する
   (チェコ　チリ　ハイチ)
   b. GDP5500億ドル以上の先進国が協力して1480万ドルの経済支援を行う。（クロアチア、チリ、ハイチ）

7. GDP3,309億ドル以上の国に、その国の財源に応じて、子どもが学校に通えるように、南アジアの国及び北アフリカ地域に対してに教科書代などの備品に対する分割払いの実施、また、無利子貸与奨学金制度をつくることを求める。(コロンビア、チリ、アルジェリア)

8. 2030年までにUNICEFと先進国に対して、初等教育と教師育成を推進するため、ICT教育を設立するための合計1億ドルの支援とその技術及び技術者の派遣を行うように求める。(ロシア、カザフスタン、チュニジア)

9. 東アフリカ地域などの途上国の教育システム確立のため、教材無償化をめざし、以下の事を要求する
   a. 教育先進国における余剰教材（教科書や文房具など）をUNICEFに寄付する
   b. UNICEFはその教材を上記の途上国に配布する。(ペルー、チェコ)

10. 識字率が95%以上で労働人口が世界平均以下の国に対し、貧困により初等教育を受けられない問題と労働人口不足を解決するために、初等教育の非就学率が10%以上の国からの移住を望む人に、移住者の教育の保証と生活の援助をすることを要求する。(ハンガリー)

11. UNESCOとUNOPSに対し、紛争で貧困や治安が悪く、崩壊してしまった地域の子供たちが教育を受けられるように次のことを要求する
   a. 勉強道具の配布
   b. 安全な通学路のための道路整備。（ウクライナ）

12. UNICEFに対し、多くの児童が教育を受けることができるようにするために、教育のレベルに教育環境が追いついていない国々や、授業の二部制を採用している地域で、学校建設、環境整備のための資金援助を要求する。
（チュニジア、ベラルーシ、ルーマニア、カザフスタン）

13. UNESCOとILOに対し、教員の労働環境改善のため、欧州諸国およびサハラ以南アフリカ、アジア諸国の学校に、労働時間や残業手当、給料の見直しを求める。（スロベニア、モザンビーク）

14. UNESCOに対し、無国籍で移動型民族の人たちが十分な初等教育を受けれていない問題を解決するために、これらの民族がいる政府が人数を把握しヨーロッパ地域へ

の学習教材を送ることを要求する。（スロバキア、クロアチア）

15. UNICEFに対し、クラスの成績に応じて教師の給料を決めることを要求し、その決定の精密性の確保のために、年に3回の財務調査、試験監督として公平な第三者を要求する。（東ティモール）

16. UNICEFに対し、障害のある子どもたちが教育を受けられるように、サハラ砂漠以南の地域に、障害のある子どもの教育の専門知識のある教師の派遣を要求する。(ペルー)

17. UNICEFに、教育システムを確立するために、東アフリカの地域に対して、学校の無償化を要求する。(リトアニア)

7 c．決議案（Draft Resolution）（ナイジェリア提出）

GA/A/DR.5

2019年10月24日

総会

提出国:ナイジェリア
スポンサー:ニジェール、マリ、セネガル、コートジボワール、ギニア、アンゴラ、ナミビア、ウガンダ、ザンビア、マダガスカル、タンザニア、カメルーン、シエラレオネ、チャド、コンゴ民主共和国、イエメン、エジプト、ガーナ、ジンバブエ、エチオピア、南スーダン、南アフリカ、中央アフリカ、ケニア、ヨルビア、サウジアラビア、ブルンジ

2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1.国際開発機構に対し、アフリカ地域の国にGDP2兆4000億以上の先進諸国からの教師派遣を要求する。
(ナイジェリア、ガーナ、セネガル、マリ、コートジボワール、ギニア、ナミビア、アンゴラ、ケニア、ジンバブエ、ウガンダ、ザンビア、マダガスカル、イエメン、タンザニア)

2.UNESCOに対して現地教員の質の向上のため、サハラ以南アフリカで学校の夜間を現地教員を育成するための時間とし、現地教員育成に必要な教員の派遣を要求する。
(ナミビア、アンゴラ、南アフリカ、ケニア、ジンバブエ、ウガンダ、ザンビア、マダガスカル、タンザニア)

3.OECDの加盟国に対し20億ドルの資金を要求し、その資金でNGOかJICAかUNDPに対し、安全な通学路の確保のために、通学路または学校周辺の整備を要求する。（ブルンジ、イエメン、エジプト、カメルーン、チャド、ニジェール、セネガル、エチオピア、シエラレオネ）

4.UNICEFに対し、女子児童が安心に学校生活を送れるように、自家発電式バイオトイレの設備ができる人材をサハラ以南アフリカの全小学校に求める。（カメルーン、セネガル、ガーナ、ウガンダ、アンゴラ）

5.ユニセフに、女性教育の大切さを広めるために、女子の初等教育の修了率が55%以下の国に、母親の会への出席を推進することを求める。(ナイジェリア)

6．OECD(経済協力開発機構)とGDP4200億ドル以上の先進国に対し、教師の賃金の低さによる教師不足を防ぐために、PPP(購買力平価)が4200米ドル以下の国に、最低賃金＋5ドル以上の賃金を教師に与えることを要求する。(イエメン、エジプト)

7.WHOに対して、小学校での感染症拡大による学習が妨げられることを防ぐために、アフリカ地域への感染症予防ワクチンの支援を求める。(シエラレオネ)

8.先進国に紛争地域に休校時でも安全に教育を受けられるよう、UNICEFのラジオ教育プログラムを実施するためのラジオを各学校や難民キャンプに配布することを要求する。(ギニア)

9.先進国に途上国の授業料を減らすために使わなくなった教科書をNGO団体（途上国へ教科書を提供する団体)へ提供することを要求する。(ギニア、コートジボワール)

10. UNICEFと就学率が98%以上、識字率が85%以上の国に対し、
失業者が教員免許を取得することで国際的に初等教育の質を向上させるために識字率が50%未満の国に教員を育てるための人材や施設、教員になった人々のための国内外の就職のポストの確保、また、語学学校などの外国人教師の受け入れができる教育施設に要求する。
(サウジアラビア、ヨルダン)

11.UNICEF に対し、初等教育の修了率を上げるために、GDPが300億ドル以下で初等教育が無償化されていない国に、無償で初等教育を受けられるようにー人あたり2000ドル程度の給付型奨学金の支援を要求する。(ジンバブエ)

12.UNICEFに、教育の機会を持たない子供たちが基礎的な教育を受けるために、授業内容を録画したDVDを発電式プレーヤーを用いて配布する教育プログラムを実施することを要求する。
（エチオピア、マリ、ガーナ)

13.UNICEFに対して、多くのこどもたちが初等教育を受けられるようにするための学校を増やすため、アフリカ地域の小学校以上の子をもつ親に対し、学校運営や教育行政のマニュアル作成及び研修を求める。(シエラレオネ、マダガスカル)

14.UNICEFに対して、衛生面や安全性が保証されている安全な学校を設置するために、サハラ以南のアフリカ諸国に、約37万米ドルの資金援助や技術提供をする。
(ナミビア、アンゴラ、南アフリカ、ウガンダ、ザンビア)

15.JICAに将来を担っていく子供を教育者に育成するために、サハラ以南地域からGDPー兆ドル以上の先進国へ4年間留学するプログラムの実施や作成を要求する。
(コンゴ民主共和国)。

17.UNICEFに対し教材取得のために、サハラ以南に教科書作成の技術とー国あたり7200万ドルの支援を要求する。（ザンビア、アンゴラ、ブルンジ、ウガンダ、南ア

フリカ、中央アフリカ、コンゴ共和国、マダガスカル）

18.国際NGO プランインターナショナルに、女性の早い結婚、妊娠を減らし、教育を受けられるようにするため、アフリカへの正しい性教育の知識の発信を要求する。（ウガンダ）

19.WFP(世界食糧計画)に対し、小学校の出席率を上げ退学率を下げるために、給食制度がない国で、学校給食支援を要求する。(中央アフリカ共和国)

20.GDP1兆ドル以上の先進国及びJICAに紛争が激しくて学校に行けない子供達、遊牧民の子供達が学校に行けるようにする為に、紛争地域並びに遊牧民がいる国に対して、移動式学校を作るための物資と人材を要求する。(中央アフリカ共和国、コンゴ民主共和国、ケニア、南スーダン)

21.UNESCOに修学率向上のため初等教育から留年や卒業試験がある地域に卒業試験の免除や科目選択制等の進級試験及び卒業試験簡易化をさせることを要求する。(マラウイ、マダガスカル、タンザニア)

23.GDP1兆1500億ドル以上の国に対し、児童の交通の便を図るため国土面積300万㎢以上のサハラ以南の国に各国100台のスクールバスの生産を要求する。(タンザニア)

24.EU諸国に対し教育の質を高めるために小学校が3000校以上ある途上国へ基礎計算力と読解力を高める新たな教育カリキュラムの作成を要求する。（南アフリカ）

25.UNICEFに対し、子ども兵が教育を受けられない環境から抜け出すために、子ども兵がいる国へ教育プログラムと子ども兵を辞めた後に就職出来るような環境を運命は作ることを要求する。(チャド共和国)

26.UNHCRに対し、教育が受けられない難民の子供たちが無償で教育を受けられるように、難民キャンプに、勉強を教えてくれる資格をもった教師を派遣することを要求する。(南スーダン)

27.世界銀行に対し、地域・地方の学校不足を解決し、初等教育の充実をはかるために、アフリカの農村部や識字率、就学率が80%以下の地域に学校建設やそのための人材派遣のために1000万$の資金援助を要求する。(エチオピア、セネガル、ニジェール、マリ、エジプト、イエメン）

28. UNICEFに対し、イスラム教を国教にする国などの、女性教育の重要性の認識が低い地域で、男女平等な教育環境を提供できるようになるために作成するガイドラインを、初等教育で使用すること、またこれらの活動の援助を求める。（サウジアラビア、ヨルダン）

7 d．決議案（Draft Resolution）（フランス提出）

GA/A/DR.6

2019年10月24日

総会

提出国:フランス
スポンサー:アラブ、モロッコ、クウェート、カナダ、シンガポール、インドネシア、日本、韓国、ブルネイ、オーストラリア、イタリア、アイスランド、オランダ、スイス、ギリシャ、ドイツ、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン、スペイン、デンマーク、イギリス、カタール、中国、ベトナム

国連総会は、

2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1. 国連に対し、以下の三つを目的とする組織の設立を要求する。
   a.教育に必要不可欠な教材、文具、遊具などの提供を行う。
   b.教員不足の解消、教員の質の向上、先進国の雇用創出を目的とし、教員の育成・派遣を行い、賃金支払いに必要な資金確保を行う。本機関の支援で教育を受けられた子供には、将来一定期間支援を必要とする途上国で働くことを任意とする。
   c.食糧支援、地産地消型教育制度の確立と雇用創出、被支援国への農地整備や技術提供を行う。

以下aの内容

2. ヨーロッパ南部諸国（スペイン以外）に対し、難民の受け入れ及び、難民自立を目指して、紛争地域の難民の教育施設の建設(場所はヨーロッパ南部、要は難民受け入れ国)を要求する。またその際、ヨーロッパ北部諸国に対し資金援助を総額約100億円（92,417,170.00 アメリカ合衆国ドル）要求する。(中国、ドイツ、ギリシャ、ノルウェー）

3. EUに対して、教育に関する物資の不足を解決するためにアフリカ地域のサハラ以南へいらなくなった文房具やスポーツ用品、自転車をEUを介して贈ることを要求する。(イタリア、ギリシャ、スイス、スウェーデン、オランダ）

以上aの内容

以下ｂの内容

4. 一人あたりのGDPが3万ドル以上の先進国に対し、非就学児の割合が30%以上の地域で初等教育を受けれる子供の割合を50%まで上げるため、一カ国最低50名現地へ教員を派遣することを要求する。（カナダ、アラブ首長国連邦、フィンランド、ブルネイ、ベトナム、インドネシア、アイスランド、日本)

5. 人材派遣部門に対し、現地の教員を育成するために、アフリカ地域、東南アジアに教師の派遣をすることを要求する。なお、派遣先に関しては支援国が指定する（アイスランド、イギリス、デンマーク、シンガポール）

6. 先進国に対し、アラビア語圏の識字率40%以下の国に対して教育の重要性を訴えるイベントを開催し、識字率を上げるための政策、教師研修生の支援を要求する。（クウェート、モロッコ、カタール）

7. 人材派遣部門に対し、一人当たりのGDPがUS$3,000未満の東南アジアで初等教育を無償で受けられる教育施設と教師を育成する施設をつくる。また、現地の雇用を増やすため企業をつくる。(デンマーク、イギリス、シンガポール)

8. 人材派遣部門に対し、教員不足の解消と現地の教師を育成するために、スラム街の子供たちが入る孤児院に教師を派遣し、現地の人に教育研修を行い、孤児院での教育を持続可能なものにすることを要求する。（スペイン、イギリス、フィンランド、フランス、イタリア）

以上bの内容

以下cの内容

9. 給食支援部門に対し、貧困・飢餓により学校に通えない子どもを減らすために、貧困地域への食糧支援とともに、現地の人を雇い、地元の食材を使って作った学校給食を提供することを要求する。（フランス、スイス、アラブ首長国連邦）

以上cの内容

以下部門に関係ない内容

10. 北ヨーロッパの国に対し、北ヨーロッパ基金と題した中東の教育資金問題の解決のために中東に対して給付型奨学金を与える団体の設置を要求する。(ノルウェー、フィンランド）

11. UNICEFに女子の教育機会を与えるために、東南アジアへ、小学校に女子の年度始めの在籍人数の基準を設け、その基準を満たした学校に補助金を与えることを要求する。 (イギリス）

12. 教師を育成する施設には、CIESF(国境なき教師団)に、現地の教師を養成するために教師を派遣することを要求する。

13. 世界銀行に対し、厳しい通学条件(川を渡らなければいけない、崖がある、道が木々などで通れないなど)を緩和するために、アフリカ地域への約200億ドルを要求し、その資金を利用してまず1年間通学路の整備を行う。（オランダ、ギリシャ、イタリア、スイス、スウェーデン、韓国）

14. WHOに対し、HIV/AIDSによる教師の死亡率を減らすためにアフリカ地域で教師を対象としたHIV ワクチンの提供を要求する。(アイスランド)

8. 会議での様子

会議の進行は模擬国連部が務めます。

各国の出席確認（ロールコール）を行います。

大使になりきり、担当国の現状や政策を伝えます。

動議を提出し、ロビー活動へと移ります。

協力を得られるよう、議論が交わされます。

至る所で、議論する姿が見られました。

各自のタブレットで情報を得ていきます。

ICT を活用し、決議案を作成していきます。

9 a．最終決議案（Draft Resolution）（ロシア提出）　※今回は 2 つの最終決議案が提出されましたが、否決されました。

GA/AD/R.3

2019年10月24日

総会

提出国: ロシア
スポンサー: クロアチア、スロベニア、ウクライナ、ハンガリー、チュニジア、ペルー、チェコ、コロンビア、モザンビーク、ベラルーシ、アルジェリア、東ティモール、ハイチ、カザフスタン、マラウイ、リトアニア、中央アフリカ、ナイジェリア、ニジェール、マリ、セネガル、コートジボワール、ギニア、アンゴラ、ナミビア、ウガンダ、ザンビア、マダガスカル、タンザニア、カメルーン、シエラレオネ、チャド、コンゴ民主共和国、イエメン、エジプト、ガーナ、ジンバブエ、南スーダン、南アフリカ、ケニア、ヨルダン、ブルンジ、サウジアラビア

国連総会は、
2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億9600万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

1. UNICEFに対し、初等教育修了率が55%以下の国の親に対して保護者の積極的な協力を促すために、子供の教育の重要性を伝えるワークショップを実施するように要求する。(ロシア、コロンビア、ナイジェリア)

2. UNICEFとWFPに対し、学校の出席率を上げるために、給食制度がない国または給食制度があるが無償でない国かつアフリカ大陸に、物資と給食支援をすることすることを要求する。（モザンビーク、フィリピン、コロンビア、マラウイ、ベラルーシ、アルジェリア、リトアニア、中央アフリカ）

3. UNICEFに対し、学校にトイレがなく思春期に中退してしまう女の子の権利向上のために、アフリカの地域に、学校に男女別のバイオトイレを設置することを要求する。(ペルー、チェコ、ウガンダ、ガーナ、アンゴラ、カメルーン、セネガル)

4. 初等教育を受けれるようにするために、GDP1億ドル以下の発展途上国の各国に学校を設置するため、以下のことを求める
   a. UNESCO が HERO (世界各国で、経済的・社会的な理由により学校に通えない子どもたちのために、無料で通える学校を作り、各国の現実に応じた学ぶ機会を子どもたちに提供している団体）などのNPO、NGO団体と協力して、施設建設のため、補助支援として50万$協力して寄付する
   (チェコ　ハイチ)
   b. GDP5500億ドル以上の先進国が協力して1480万ドルの経済支援を行う。
   （クロアチア、ハイチ）

5. GDP1,300億ドル以上の国に対し、その国の財源に応じて、子どもが学校に通えるようにするために、南アジアの国及びアフリカ地域に教科書代などの備品に対する分割払いの実施、また、無料子育て教学金制度をつくることを要求する。(コロンビア、アルジェリア、ジンバブエ、チリ)

6. 修了率が90%以上で労働人口が世界平均以下の国に対し、貧困により初等教育を受けられない問題と労働人口不足を解決するために、就学教育の非就学率が10%以上の国からの移住を望む人に、移住者の教育の保証と生活の援助をすることを要求する。(ハンガリー)

7. OECDの加盟国に対し、２０億ドルの資金を要求し、その資金でUNOPSに対し、安全な通学路の確保のためにインフラがいきとどいてないために通学が困難な地域へ、通学路または、学校周辺の整備を要求する。（ウクライナ、ブルンジ、イエメン、エジプト、カメルーン、チャド、ニジェール、セネガル、エチオピア、シエラレオネ）

8. UNESCOに対し、紛争で貧困や治安が悪く、崩壊してしまった地域へ、その子供たちが教育を受けられるように勉強道具の配布を要求する。（ウクライナ）

9. UNICEFに対し、多くの児童が教育を受けることができるようにするために、教育のレベルに教育環境が追いついていない国々や、授業の二部制を採用している地域で、学校建設、環境整備のための資金援助を要求する。
（チュニジア、ベラルーシ、ルーマニア、カザフスタン）

10. UNESCOとILOに対し、教員の労働環境改善のために、欧州諸国およびサハラ以南アフリカ、アジア諸国の学校に、労働時間や報酬手当、給料の見直しを要求する。
（スロベニア、モザンビーク）

11. UNESCOに対し、無国籍で移動型民族の人たちが十分な初等教育を受けれていない問題を解決するために、これらの民族がいる政府が人数を把握しヨーロッパ地域への学習教材を送ることを要求する。（スロバキア、クロアチア）

12. UNICEFに対し、教師に正当な給料が支払われていない問題を解決するため、クラスの成績に応じて教師の給料を決めることと、その決定の精密性の確保のために、年に3回の財務調査、就職斡旋として公平な第三者を要求する。（東ティモール）

13. UNICEFに対して、教育システムを確立するために、東アフリカの地域に、学校の授業料の無償化を要求する。(リトアニア)

14. UNESCOに対して現地教員の質の向上のため、サハラ以南アフリカで学校の医師を現地教員を育成するための時間とし、現地教員育成に必要な教員の派遣を要求する。(ナミビア、アンゴラ、南アフリカ、ケニア、ジンバブエ、ウガンダ、ザンビ

ア、マダガスカル、タンザニア)

15. OECD(経済協力開発機構)の加盟国に対し20億ドルの資金を要求し、その資金でNGOかJICAかUNDPに対し、安全な通学路の確保のために、インフラ整備が整っておらず学校に通う事が困難な地域へ、通学路または学校周辺の整備を要求する。
（ブルンジ、イエメン、エジプト、カメルーン、チャド、ニジェール、セネガル、シエラレオネ）

16. UNICEFに対し、女子児童が安心に学校生活を送れるように、自家発電式バイオトイレの設備ができる人材をサハラ以南アフリカの全小学校に要求する。
（カメルーン、セネガル、ガーナ、ウガンダ、アンゴラ）

17. OECD(経済協力開発機構)とGDP4200億ドル以上の先進国に対し、教師の賃金の低さによる教師不足を防ぐために、PPP(購買力平価)が4200米ドル以下の国に、最低賃金+5ドル以上の賃金を教師に与えることを要求する。(イエメン、エジプト)

18. WHOに対して、小学校での感染症拡大による学習が妨げられることを防ぐために、アフリカ地域への感染症予防ワクチンの支援を求める。(シエラレオネ)

19. OECD加盟国に紛争地域に休校時でも安全に教育を受けられるよう、現存しているUNICEFのラジオ教育プログラムを多くの地域で実施するためのラジオを各学校や難民キャンプに配布することを要求する。(ギニア)

20. UNICEFに対して、多くのこどもたちが初等教育を受けられるようにするために、アフリカ地域の小学生の子をもつ親に対し、学校運営や教育行政のマニュアル作成及び研修を要求する。(シエラレオネ、マダガスカル)

21. UNICEFに対して、衛生面や安全性が保証されている安全な学校を設置するために、サハラ以南のアフリカ諸国に、約37万米ドルの資金援助や技術提供を要求する。
(ナミビア、アンゴラ、南アフリカ、ウガンダ、ザンビア)

22. UNICEFに対し教材取得のために、サハラ以南アフリカに教科書作成の技術と一国あたり7200万ドルの支援を要求する。
（ザンビア、アンゴラ、ブルンジ、ウガンダ、南アフリカ、コンゴ共和国、マダガスカル、中央アフリカ）

23. 就学率が95%以上の先進国に途上国の授業料を減らすために使わなくなった教科書をNGO団体（途上国へ教科書を提供する団体)へ提供することを要求する。
(ギニア、コートジボワール)

24. 国際NGO プランインターナショナルに、女性の早い結婚、妊娠を減らし、教育を受けられるようにするため、アフリカへの正しい性教育の知識の発信を要求する。
（ウガンダ）

25. GDP1兆ドル以上の先進国に紛争が激しくて学校に行けない子供達、遊牧民の子供達が学校に行けるようにする為に、紛争地域並びに遊牧民がいる国に対して、移動式学校を作るための物資と人材を要求する。(コンゴ民主共和国、ケニア、南スーダン、中央アフリカ)

26. UNESCOに修学率向上のため初等教育から留年や卒業試験がある地域に卒業試験の免除や科目選択制等の進級試験及び卒業試験簡易化をさせることを要求する。(マラウイ、マダガスカル、タンザニア)

27. GDP1兆1500億ドル以上の国に対し、児童の交通の便を図るため、サハラ以南の国全てに各国5台すつスクールバスの生産を要求し、かつ国土面積10万㎢毎に1台ずつの生産を要求する。(タンザニア)

28. EU諸国に対し教育の質を高めるために小学校が3000校以上ある途上国へ基礎計算力と読解力を高める新たな教育カリキュラムの作成を要求する。（南アフリカ）

29. UNICEFに対し、子ども兵が教育を受けられない環境から抜け出すために、子ども兵がいる国へ教育プログラムと子ども兵を辞めた後に就職出来るような環境を作ることを要求する。(チャド共和国)

30. 世界銀行に対し、地域・地方の学校不足を解決し、初等教育の充実をはかるために、アフリカの農村部や識字率、就学率が80%以下の地域に学校建設やそのための人材派遣のために1000万$の資金援助を要求する。(エチオピア、セネガル、ニジェール、マリ、エジプト、イエメン)

31. 国際開発機構に対し、教師不足を解消するために、アフリカ地域の国にGDP2兆4000億以上の先進諸国からの教師派遣を要求する。(ナイジェリア、ガーナ、セネガル、マリ、コートジボワール、ギニア、ナミビア、アンゴラ、ケニア、ジンバブエ、ウガンダ、ザンビア、マダガスカル、イエメン、タンザニア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、スロバキア)

32. UNICEFに対し、子供に対して男女平等な教育環境を提供できるようになるために、イスラム教を国教とする国などの、女性教育の重要性の認識が低い国と男女の就学率が等しい国が話し合い、男女平等の教育を実現するためのガイドラインを作成し、初等教育で使用すること、またこれらの活動の援助を要求する。（サウジアラビア、ヨルダン）

9ｂ．最終決議案（Draft Resolution）（フランス提出）

GA/A/DR.6

2019年10月24日

総会

提出国:フランス
スポンサー:アラブ首長国連邦、モロッコ、クウェート、カナダ、シンガポール、インドネシア、韓国、ブルネイ、イタリア、アイスランド、オランダ、スイス、ギリシャ、ドイツ、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン、スペイン、デンマーク、イギリス、カタール、ベトナム、アメリカ、フィリピン、キューバ・ラオス・カンボジア・ミャンマー・パキスタン・タイ・ウズベキスタン・バングラデシュ・インド・ネパール・モルディブ・アフガニスタン・ドミニカ・アルゼンチン・エクアドル・マレーシア・イラク・ニュージーランド・イスラエル、パハマ・中国・ポーランド、ウルグアイ、ブラジル、エチオピア、ルーマニア、スロバキア
国連総会は、

2019年は「児童の権利に関する宣言」から60年であることを想起し、

「児童の権利に関する条約」採択から30年である重要性を再確認し、

１日$1.90以下で生活している子どもが3億8500万人いることを憂慮し、

初等教育を受けられていない子どもが6100万人いることを懸念し、

初等教育が貧困の負のサイクルを断ち切ると確信し、

a) 教材支援
b) 教師の派遣、育成
c) 給食
d) インフラ

以下aの内容

先進国に対して、教育に関する物資の不足を解決するためにアフリカ地域のサハラ以南へいらなくなった教材、文房具やスポーツ用品、自転車を贈ることを要求する。
(イタリア、ギリシャ、スイス、スウェーデン、オランダ)
※オーストラリアは単体でアジア地域に貿易船を利用してこれらの物資を送る

UNICEFに対して、教材不足により教育が十分に受けられない子供たちへ様々な教科の質の高い教育をうけられるようにするために、発展途上国にUNICEFと共同で教科書と文房具を作るシステムを創設することを要求する。（キューバ、ラオス、カンボジア、パハマ、チリ）

UNICEFに対し,多民族地域で言語が複数あるために言語が通じないという問題を解決するためにその地域の公用語以外を母国語とする民族の12歳以下の子供に対し、公用語を学校の必須科目とし、公用語の勉強が効果的にできる教材、施設の運営のための資金約援助することを要求する。（ミャンマー、マレーシア）

UNICEFに対して、教材不足により教育が十分に受けられない子供たちへ様々な教科の質の高い教育をうけられるようにするために、発展途上国にUNICEFと共同で教科書と文房具を作るシステムを創設することを要求する。（キューバ、ラオス、カンボジア、パハマ、チリ）

以上aの内容

以下bの内容

1. 一人あたりのGDPが3万ドル以上の先進国に対し、未就学児の割合が30%以上の地域で初等教育を受けられる子供の割合（総就学率）を50%まで上げるため、教員1人当たりの生徒が多い地域から優先的に、一カ国最低50名現地へ教員を派遣することを要求する。（カナダ、アラブ首長国連邦、フィンランド、ブルネイ、ベトナム、インドネシア、アイスランド)

2.人材派遣部門に対し、現地の教員を育成するために、アフリカ地域、東南アジア、授業の二部制を導入している地域に都師の派遣をすることを要求する。なお、アフリカ地域、東南アジア等の派遣先は、各支援国が各自で決定し支援するとする。（アイスランド、イギリス、デンマーク、シンガポール、ルーマニア）

3.アラビア語の識字率が７０%以上の国に対し、教育の重要性を訴える為に、アラビア語圏の識字率40%以下の国に対して保護者の理解を上げるためにイベントを開催し、初等教育を受けられる子どもの割合を上げるため、政策、教師研修生の支援を要求する。（クウェート、モロッコ、カタール）

4.人材派遣部門に対し、質の高い初等教育を受けられる子供の割合を上げるために、一人当たりのGDPがUS$3,000未満の東南アジアで人々が初等教育を無償で受けられるように、教育施設と教師を育成する施設をつくり、現地の雇用を増やすために、企業を立ち上げ運営したうえで、収益の一部を支援した国に対して納めることを要求する。(デンマーク、イギリス、シンガポール、韓国)

5.人材派遣部門に対し、教員不足の解消と現地の教師を育成するためお、また、孤児院での教育を持続可能なものにするために、スラム街の子供たちが入る孤児院に教師を派遣し、現地の人に教育研修を行うことをを要求する。（スペイン、イギリス、フィンランド、フランス、イタリア）

6.教育先進国に対して、子供たちを教育する立場の教師の質が悪いことにより質の低い教育が行われていることを解決するために、教育の質に問題がある国や地域で、2025年までに「国境なき教師団」を組織し質の高い教師、専門知識を身につけた教師を育成する人材を派遣することを要求する。(バングラデシュ、カンボジア、モルディブ、ラオス、ミャンマー、パキスタン、タイ、、エクアドル、ドミニカ共和国、アルゼンチン、バハマ、チリ）

7.UNICEFに対し、教員不足を解決するために生徒と教員の人数比率が40:1になるよう、教員不足の東南アジアの教育水準が高く、教師の賃金が低い国から現地の低賃金を基準とした給料で人材派遣をできるプログラムをつくることを要求する。
(キューバ、アルゼンチン、バハマ）

、

2030年までにUNESCOとUNICEFに対し、保護者や地域社会の教育に対する理解の乏しさの改善と、現地の教師の教育の質を高めるために、貧困によって10%以上の子供が中退してしまう国や識字率50%以下の発展途上国、少数民族地域へ保護者の教育に対する理解のためのセミナーや各民族の言語に合わせた教師へのセミナー、家庭訪問などの広報活動推進を保存食などの特典付きで要求する。（ネパール、インド、ドミニカ共和国、マレーシア、ベトナム、バハマ）

9.UNESCOに対し、お金がなくて労働しなければならず教育の機会を得られない、また失ってしまった人々が基礎的な教育を受けるために、中南米、アフリカ地域の農村部に、世界手芸屋運動の取り組みとその手芸屋にプロジェクターとパソコンを用意しオンライン学習によっていつでも学習できる環境を作ることを要求する。
(パラグアイ、ブラジル、エチオピア）

以上bの内容

以下cの内容

1. 給食支援部門に対し、貧困・飢餓により学校に通えない子どもを減らすために、最低限必要とされる食糧と食糧以外のものが購入できるだけの所得または支出水準(=国際貧困ラ イン；1日1.90ドル以下)に達していない人々がいる地域（貧困地域）への食糧支援とともに、現地の人を雇い、地元の食材を使って作った学校給食を提供することを要求する。（フランス、スイス、アラブ首長国連邦、フィリピン）

2. UNICEFに女子の教育機会を与えるために、東南アジアへ、小学校に女子の年度始めの在籍人数の基準を設け、その基準を満たした学校に補助金を与えることを要求する。（イギリス）
3. WHOに対し、HIV/AIDSによる教師の死亡率を減らすためにアフリカ地域で教師を対象としたHIV ワクチンの提供を要求する。(アイスランド)
4. UNICEFに各国の教育現場を考慮したIEP(特別支援が必要な子供向けの個別教育プログラム)の作成をする専門家チーム結成し、その実施を要求する。(アメリカ)
5. UNICEFに労働などの理由で学校に通えない子供が全体の60%以上いる国に対して、通常の授業のほかに教材を配布し、生徒の都合のいい時間に学習し、学校で質問できるコースの開設を要求する。(アメリカ)
6. 全ての国に対し、男女の教育格差の是正のために、各地域機構で、その問題解決のための会議を毎年行うことを要求する。（バングラデシュ、バハマ）
7. GDPの金額の合計が世界ランキング上位20か国に対し、貧困による小学生の中退を防くために義務学年の進学率が90%未満の国に企業を誘致して労働者を適正な賃金で雇うことを要求する。（ミャンマー）

2．WFPに対して、発展途上国での食糧支援、地産地消型給食制度の確立と雇用創出、被支援国への農地整備や技術提供を行ってもらうことを要求する。

以上eの内容

以下dの内容　（インフラ）代表国:オランダ

1. OECD加盟国に学校の不足により、就学できない子供たちをなくすために、半径10km以内に学校がないところ、電気が通ってない地域への学校建設、教育設備（コンピュータ設備など）の設置及びオンライン学習の設備の充実を要求する。また、電気のインフラについては部門dの3のクローズとの協力を行う。（ウルグアイ、エクアドル、ニュージーランド、イスラエル、バハマ、アルゼンチン、セネガル国)
2. UNESCO、UNICEF、OECD加盟国とUNDPに対し、公的教育費の対GDP比率が5.10未満の国かつ、15%以上の子供が初等教育で中退してしまうような国に向けて、地域密着型の初等教育などの国別の教育開発計画(教育場所がない地域への教育、質の高い教育、また教育環境整備、ノウハウなど)の作成およびそれを実行するに足りる十分な資金援助を要求する。（ネパール、アフガニスタン、ウズベキスタン、タイ）
3. UNDPに対して、インフラ整備がされておらず学校まで行くことが出来ない地域のために、（スクールバスの維持費・道路・電気・通信整備のための）インフラ整備を要求する。（インド・カンボジア・モルディブ・バハマ）
4. 世界銀行に対し、厳しい通学条件(川を渡らなければいけない、崖がある、道が木々などで通れないなど)を通学路の整備を行うことにより緩和するために、インフラ設備が整備されておらず学校まで行くことができない地域へ約200億ドルを支援してもらう事を要求する。（オランダ、ギリシャ、イタリア、スイス、スウェーデン、韓国、モルディブ、インド、カンボジア、バハマ）
5. UNICEFにより滑滑な支援運用の仮説のため教師の平均年間収入が一人当たりのGDPの三分の一以下の国または、電気、技術などのインフラ設備を求める国に、教育環境向上に以下の内容に特化した新たな機関（エドシスト）の設立を要求する
a.「環境」()d「インフラ」()「教育の質と量」()「基金支援」()の四部門の設立を求める。
b.すべての経済的人材的支援の仲介をし、各部門参加国との中継機関としての機能を持つ。（イラク、バハマ）
ITUに対して、教育に必要な電気を確保するために電気が通ってない地域にインフラの設備を整えることを要求する。(イスラエル、バハマ)
6. 難民受け入れ可能なヨーロッパ南部諸国に対し、難民の受け入れ及び、難民自立を目指　して、紛争地域への難民の教育施設の建設を要求し、またその際、ヨーロッパ北部諸国　に対し資金援助を92,417,170.00ドル要求する。(中国、ドイツ、ギリシャ、ノルウェー）

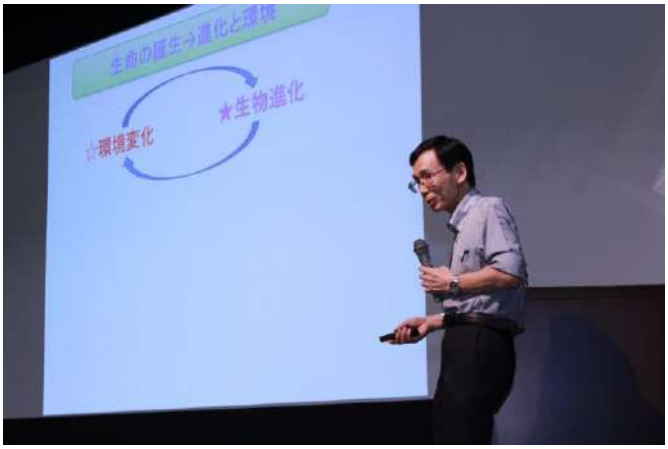
以下部門にはない内容のクローズ

1. 北ヨーロッパの国に対し、北ヨーロッパ基金と題した中東の教育資金問題の解決のために中東に対して給付型奨学金を与える団体の設置を要求する。(ノルウェー、フィンランド）

グローバルシチズンシップセミナー

関西創価高校では、グローバルリーダーの育成を目指して、全校生徒を対象としたグローバルシチズンシップセミナーを実施しており、2019 年度は 3 回実施した。内容は、国内外より講師を招き、環境や人権など世界的な問題について講義をいただくものである。講演の最後の質疑応答では、どの回も生徒からの質問が次々と飛び出すなど、大きな触発を与える機会となっている。

【第 1 回　2019 年 7 月 12 日　宮川　洋三氏】



山梨大学名誉教授の宮川洋三氏をお招きし、「ライスサイエンスの最前線：未来社会はバラ色か？～光明は東洋から～」をテーマに講演を行っていただいた。

宮川氏は 2016 年には、病原微生物分野の権威ある学会である、日本医真菌学会の学会賞を受賞されるなど、ライフサイエンスの最前線の研究に携わってこられた。

講演では、ライフサイエンスの研究成果の紹介から始まり、人間と生物がどうあるべきなのかを考えさせられるものであった。東洋の思想が説く、万物共生の哲学が重要であり、昨今の自然環境に対する人類の横暴な行動は、結局は自らの存在を弱体化させることを学んだ。シカゴ大学の「世界終末時計」が週末まであと 5 分となった今、持続可能な社会へのパラダイムシフトが求められており、私たち一人一人に何ができるのかを考えさせられる講演であった。

〇生徒の感想

「今、世の中は人間が引き起こした問題が溢れている中で、生物学の観点からアプローチしていくことは一種の武器になると思った。宇宙船地球号という言葉は前から知っていたけど、今回のセミナーを通して、その考え方の大切さを改めて実感した。持続可能な社会を目指して、これからも頑張ろうと思った（3 年男子）」

「人間は他の生物がいないと生まれていないし、生きていけないということを痛感しました。目に見えないほど小さいものか、何十億年もの歴史で今の環境が形づくられているということに感動しました。自分中心の考え方から脱し、他の人と影響し合って生きているということを考えて行動しなくてはならないなと思いました（3 年女子）」

「人間などの生物の深化や遺伝子などといった生物について学ぶことによって、人間とは、地球という大きなフィールドでどんな存在かを追求し、考えることができると思いました。これにより、自分はどう生きるのかという問いについて、また自分で考えていこうと思いました（2 年男子）」

「これからの未来を担っているのは私たちだということを強く痛感しました。私一人が行動しても何も変わらないのではなく、私一人が行動することで、誰かの希望になるという考え方に、今回変わりました（1 年女子）」

【第 2 回　2019 年 11 月 16 日　河合　公明氏】

戸田記念国際平和研究所主任研究員の河合公明氏をお招きし、「核兵器禁止条約―SGI の役割と貢献」をテーマに講演を行って頂いた。世界の核兵器廃絶の各機関の会議に代表して参加されている経験を通し、世界の核兵器廃絶の取り組みの現状や課題について、お話して頂いた。

平和な世界を構築していくために、対話というアプローチの大切さを学ぶ機会となった。

【第 3 回　2020 年 1 月 11 日　片桐　隆太氏】

21 カ国に海外現地法人のある、貿易企業の株式会社日新で勤務されている、片桐隆太氏が、「世界市民への道～私の体験から～」と題し、講演を行った。現在は中国やベトナム・タイなど東南アジア中心の部署で輸出業務に携わっておられる。

ネパールで一人の友人と出会ったことから世界が大きく広がった体験をお話してくださった。目の前の一人を大切にすること、友の悩みに耳を傾け、共感力を発揮することの重要性を学んだ。そして、目の前の一人の問題解決から、各国、全人類、地球上の問題解決が始まることを力説した。そして、海外の友人を 1 人作ることで世界の諸問題やニーズを把握することにつながり、友人のためにと思うことで、何ができるのかと日本を見る視点も変わってくることを語った。

〇生徒の感想

「行動力や好奇心、一人の人を大切にすることが大切だなと思いました。偏見や先入観を持たず、自分の目で見てみることが大切なんだなと思いました。誰かがやるだろうと思わず、積極的に取り組んでいきたいです」（3 年男子）

「ネパールで子どもたちのために教育の環境を整えたり、トルコ人のデザイナーからトルコ事業へつながっていったり、国連でセッションされたりなど、はじめは関係なくてつながりがないようなことであっても、きちんと自分で考えて行動を起こしていけば、問題があっても解決し、よい方向へつなげていくころができるということがお話からよくわかりました。」（2 年女子）

「片桐さんに話を聞いて、もっと出会いを大切にしようと思いました。その人が将来どうなっているか分からないし、もしかしたら自分の仕事の助けになるかもしれないので、自分は今日から周りの人とか知り合いの人とかでも仲良くなっていって、いい人間関係を築いていきたいと思う。そして、自分は役に立たないと思っていても、しっかり学んでいったら、きっと何かに貢献できることがあるので、身近なことからコツコツと頑張っていきたいと思います。」（1 年男子）

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork
— Monday, July 22, 2019 —

Day 1

LC Tokyo Fieldwork

By Rion Kunimoto

私たちラーニングクラスター（LC）は創立者池田大作先生の平和提言に基づいてオールイングリッシュで世界的課題を研究するプログラムです。今年は核兵器廃絶を研究テーマとして活動しています。核兵器についてさらに知識を深めるべく、各界の専門家とセッションを行うために7月22日から24日までの3日間、東京大学の高原教授をはじめとした専門家の講義を受けてきました。

Learning Cluster (LC) is a program which research about global issues in English based on Founder Ikeda's Peace Proposal. This year, we are researching about nuclear issues. From July 22-24, we went to Tokyo to deepen our knowledge on nuclear issues and visited various experts such as Dr.Takahara from Tokyo University.

LC students in front of the famous red gate at Tokyo University

Session with Dr. Akio Takahara at Tokyo University

University of Tokyo

By Yuichi Matsuna, Yuichi Sakemi, Miyuki Takeda, Sayaka Amano

１日目には、東京大学公共政策大学院院長で、中国と日本の外交政治や東アジアの国際関係の専門家であられる高原明生教授とのセッションを行いました高原教授は初めに、日本と中国の国民が互いの国民に対して抱いている印象の推移を紹介されました。近年の日本人の中国人への印象は概ね悪くなってきていると思われがちですが、事件などがによって大幅に印象が悪くなることはあるものの、何も事件がなければ徐々に改善するというようなアップダウンを繰り返しているとのことです。また日中関係に関する、アイデンティティ、経済、安全保障、国内政治の4つの枠組みを示されました。そして米中関係が悪化していること、飛行機の衝突、中国の経済成長の低迷が原因となり、尖閣諸島問題が勃発していることを挙げられました。

また、良好な日中関係を目指すには、軍事を伴わない非伝統的安全保障や、経済や文化などの協力の強靭性を高め、歴史問題や領土問題、安全保障の問題といった脆弱性は抑制していくことが必要だと述べられました。両国は国力バランスを保ち、相互依存関係を築き、国際規範の共有をしていくことの重要性を教えてくださいました。質疑応答では、文化交流がどのように政治決定プロセスに変化を与えるのかという質問に対し、直接的な影響はないが、なぜ相手がそのように行動したのだろうと考えることにつながると語られました。また、中国を実際目でみて確かめてほしいと語っていただくとともに、平和のリーダーとなっていくことの期待を込め、勉学を頑張るよう激励していただきました。

On the first day, we had a session with Prof. Akio Takahara, Dean of the Graduate School of Public Policy at the University of Tokyo. Prof. Takahara specializes in Chinese politics and international relations in East Asia. First, he touched upon the transition of the Japanese people's impression of China over the years based on statistical data. Through the data we could see that the impression on China varied depending on incidents. He introduced a framework of identity, economic, security and domestic political affairs which affect the relationship between Japan and China.

Moreover, he affirmed that Japan and China should enhance the resilience of partnership, based on economic, culture, and non-traditional security, and suppress the fragility of cooperation of historical problems, territorial problems, and national security problems, Pin order to improve the Sino-Japan relationship. Prof. Takahara urged the students to go to China and see the reality for ourselves.

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork
— Tuesday, July 23, 2019 —

Day 2

Dr. Laurence MacDonald

Soka University

By Shinichi Takebe, Kazuyo Mizuta

ローレンス・マクドナルド教授は創価大学国際教養学部学部長を務め、社会に貢献する世界市民教育を研究しておられます。マクドナルド教授からの講義では、発展途上国では、4人に1人の女の子が学校で学ぶことができていないことなど国際機関のデータを示していただき、途上国において教育の不足が貧困や子どもの死亡率、男女間の格差などと密接に関わっているということを学びました。また、児童労働や長時間の登校等の問題により、学校に通えない途上国の子ども達の現状を学びました。その後、ディスカッションを通して開発において教育が果たす役割の重要性を実感しました。

Dr. Laurence MacDonald is the dean of the faculty of international liberal arts (FILA) at Soka University, Tokyo. Through an interactive workshop style, he taught us the importance of education in progressing the SDGs. In developing countries, one in four girls is not in school. Through examining statistical data, we learned that lack of education in developing countries closely correlates to various global issues such as poverty, mortality rate of children and gender inequality. In addition, we discussed through case studies of children who cannot go to school because they have to work for their family, as a result depriving them of their educational opportunities. After this session, we strongly felt the importance of the role of education to tackle global issues.

Session with Dr. Laurence MacDonald, FILA Dean

Session with Dr. Hartmut Lenz

Dr. Hartmut Lenz

Soka University

By Anji Kaneoka, Sachie Tokuyama, Takumi Yabune

創価大学大学院国際平和学研究科のハームット•レンツ教授は、政治学と国際関係学の専門家です。今回のセッションでは、「軍縮と軍事衝突」をテーマに、核兵器禁止条約などの国際条約の締結に向けた交渉や条約締結の効果、軍事衝突の原因などについて学びました。安全保障のジレンマや、安全保障のためのパワーバランス、環境の破壊など、軍縮を妨げるさまざまな要因を学び、問題の複雑さを強く実感することとなりました。非常に難しい内容でしたが、Lenz教授が僕たちに投げかけてくださる問いに答えることを通して理解が深まり、多くのことを学ぶことができました。

Dr. Hartmut Lenz is a professor who specializes in political science and international relations. In this session, on the theme of "Arms Control and Military Conflict", we learned about treaties such as TPNW, its affect, causes of military conflict and more. We also learned various factors that prevent disarmament such as the dilemma of security, power balance, and environmental damage. Through this session we realized evenmore the complexity of the issue.

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork
— Tuesday, July 23, 2019 —

Day 2

Peace Boat

By Kazuyo, Hiromi, Takuma, Rion

Peace Boat（ピース ボート）は世界一周の船旅などを通し、国際的な文化交流やグローバルイシューの啓発活動を行っている国際NGOで、広島、長崎の被爆者とともに地球一周の航海を通して核兵器の非人道性を訴える活動を行っている昨年度ノーベル平和賞を受賞したICANの運営団体の1つです。講義の中で、グローバル被ばく者という言葉を初めて聞きました。それは、広島・長崎での核爆弾投下の被害を受けてしまった方や、特に冷戦時代に激しく繰り広げられた核開発競争での核実験で発生した放射能によって健康被害を受けてしまった方を指す言葉です。このセッションで私たちは、各被爆国の日本から世界に核兵器の脅威を伝えていく義務があると確信しました。

Peace Boat is an international NGO which promotes cultural exchange and raises awareness of global issues through passenger trips around the world. Peace Boat is one of steering organizations of International Campaign to Abolish Nuclear Weapon (ICAN) and appeals inhumanity of nuclear weapons through the global voyage with Hibakusha. During the session, we came to know the word of "Global Hibakusha" for the first time. "Global Hibakusha" includes not only the people who got damaged by the tragedy of Hiroshima and Nagasaki, but also the people who were affected by the radioactive nuclear test mostly practiced in the time of cold war. Through this session we redetermined our mission to convey the threat of nuclear weapons.

Session with Dr. Trevor Champbell, Peace Boat

Session with Mr. Kondo Tetsuo, Director of UNDP in Tokyo

UNDP

By Marine, Miyuki, Shota, and Ryoma

2日目の夜には、国際連合開発計画（UNDP）駐日代表である近藤哲生さんと2時間半セッションを持ちました。まず世界史をたどり、「人間開発」、すなわち人々に内在する可能性を引き出すことを根本に活動するUNDPの歴史や使命、そしてUNDPの活動における日本の役割について学びました。また、近藤代表が実際にコソボやチャドなどの発展途上国で働かれていた時の体験談もお聞きしました。そして最後にSDGs（持続可能な開発目標）を経済の面からお話していただきました。セッション中は自由に意見・質問が飛び交い、ロールプレイングでも盛り上がり、近藤代表が一人一人を尊敬し、大切にするその姿に「誰も置き去りにしない」という理念そのものが体現されていました。目標達成のために皆に共通する価値を創造し、自分が責任をもって世界を変えていくとの決意ができました。

On the night of the second day, we had a session with Tetsuo Kondo, Director of UNDP (UN Development Program) in Tokyo. In relation to world history, we learned the origin and mission of UNDP and the role of Japan in international society, which is strongly based on human development, meaning to bring out the potential being inherent in people. We also heard some experiences from Mr. Kondo when he was actually working in a developing country such as Kosovo and Chad. Finally, Mr. Kondo talked about SDGs from an economic aspect. The style of the session was very interactive and we were able to ask questions and say our opinion freely. The way he respected and cherished us itself was embodying the spirit of “No one left behind.” We were able to determine ourselves to take responsibility to change the world by creating value that can be shared by everyone in order to achieve our goal, world peace.

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork
— Wednesday, July 24, 2019 —

Day 3

Toda Peace Institution

By Daiki Katsukawa, Hiroto Tamura, Ren Nakagome, Yoko Sato

3日目の最初にはニュージーランドと中継を結び、戸田平和研究所所長であるケビン・クレメンツ博士に講義を行っていただきました。核兵器に関する条約の変化に触れながら、創立者池田先生の平和提言と比較し、核廃絶の重要性、また核抑止論の構造の矛盾について教えてくださいました。博士は、自分の国が核兵器禁止条約に参加するべきと考えている市民の割合をNATO（北大西洋条約機構）に参加している国で調査したデータを示し、市民の「参加するべき」という意見が多いことに触れ、市民の声を政府に反映することが核兵器禁止条約の発効に必要な50か国の批准へ向けた意識改革につながると教えていただきました。また、対立が深まっている「核保有国」と「非核保有国」との間で、互いを理解し共通項を見出そうとすることが、核兵器廃絶の一歩となることを述べられました。最後に、私たち高校生は「明確なビジョンを持ち、対話を続けること」ができると締めくくりセッションを終えられました。

Through an Internet broadcast session with New Zealand, we received a lecture from Dr. Kevin Clements, the director of the Toda Peace Institute. Dr. Clements shared the importance of nuclear abolition from a humanitarian perspective. He emphasized the contradiction between the current nuclear deterrence structure and the Peace Proposal written by founder, Dr. Ikeda. Based on the data taken in NATO countries, the government's stance contradicts the majority of civil opinion that wishes to ratify the TPNW. In addition, the effort of trying to understand and find a common ground between both non-nuclear weapons state and nuclear weapons state is an important first step to ratify the TPNW. Finally, he concluded the session by emphasizing the importance of having a clear vision and continuing in dialogue.

Broadcast session with Dr. Kevin Clements

Session with Dr. Olivieri Urbain and Guests

Min-On Research Institute

By Daiki Katsukawa, Hiroto Tamura, Ren Nakagome, Yoko Sato

その後、民音研究所の所長であるオリビア・ウルバン博士や、核兵器廃絶運動「8万の声」の中心者であるジナ・ラントン博士をはじめとする、4人の識者と懇談をしました。懇談の中で博士らは、音楽の重要性について強調されました。ジナさんは自身が手掛ける「8万の声」（核廃絶を訴えるために8万人で集結し、コンサートを開くというプロジェクト）を紹介するとともに、「音楽は人々に「楽しさ」や「希望」、また「核兵器のない平和な世界」をもたらしてくれる。また、「人々は音楽の力で差異を乗り越え、絶対に核兵器のない世界をを実現することができる」と語っておられました。私たちはこの懇談を通して、1人の小さな行動が世界を変えられるということを強く実感しました。博士らの情熱に触れ、私たち自身も「世界平和の実現」のために、自分にしかない使命を全うしていこうと深く決意しました。

In the afternoon, we had a session with four experts including Dr. Olivier Urbain, Director of the Min-On Research Institute and Dr. Gina Langton, CEO of 80,000 Voices. In the session, the experts emphasized the power and importance of music for peace building. Dr. Langton shared her project to gather 80,000 people to create a musical concert dedicated for the cause of nuclear disarmament. She stated that music gives us joy and hope towards a world free of nuclear weapons. We can overcome differences and go hand-in-hand through the power of music which is necessary for nuclear abolition. Throughout the session, we strongly thought that we can change the world through our small actions. We were inspired by their passion, and really thought that we must achieve our mission for making a peaceful world.

The Tokyo Times

Kansai Soka High School Learning Cluster Tokyo Fieldwork
— Wednesday, July 24, 2019 —

Day 3

SGI Peace Committee

By Ryoma, Shota, Marine, Miyuki

LC東京フィールドワークの最後にはSGIの平和運動局の皆さんとセッションを行いました。冒頭には、各グループで取り組んでいるリサーチについて私たちからプレゼンをさせていただき、その後、SGI平和運動局の方々からSGIが進める核廃絶運動の理念、国際社会での活動とNGOの役割についてレクチャーをしていただきました。その後の質疑応答で、核の傘にある国にも核兵器禁止条約への参加を促していくためにはどうすればよいかという質問に対して、日本と同様に核の傘にある国の中で唯一、会議に参加したオランダを例に挙げながら、従来のアイデアに付け加えた新しいアイデアや言葉を使った説得力のある議論の枠組みの作り方や、今後の核廃絶を目指す若者世代の拡大の方向性といった、NGOの核廃絶実現への具体的なプロセスを教えていただき、国際社会のレベルでの「核廃絶」の大切さを学ぶことが出来ました。そして、この学びをそれぞれのグループで還元し、核廃絶を実現するプロジェクトを創るということをメンバー全員で決意しました。

For our last session, we learned about the initiatives taken by SGI for nuclear abolition. At the beginning of this session, LC members gave a brief summary about their projects. After that, three members of the SGI Peace Movement Bureau respectively gave us a lecture on the principles of the SGI's nuclear abolition movement, activities in the international community, and the role of NGOs. During our Q&A session, there was a question regarding how to encourage countries that are under a nuclear umbrella to participate in TPNW. Mr. Kawai stressed the importance of building a framework of new ideas, and the role of NGO's to gather the voices of younger generations. Through the session, we were able to learn the importance of nuclear abolition at the international community level and determined to deepen our research furthermore.

Session with SGI Peace Committee

Overall Impressions

By Daiki Katsukawa, Rion Kunimoto

各専門家が平和建設を担う若者としての期待を込め、講義をして頂いたことに感銘を受けました。創立者の平和な世界のご構想を学び、受け継ぎ、全世界に発信することの重要性を改めてこのフィールドワークを通して学び深めることができました。LCは今後の活動として、リサーチをもとにグループ単位で核廃絶プロジェクトを行います。FWでの学びを反映し、生涯、平和な世界の実現へ向けて学び、行動していきます。

Each expert had great hopes for us to create a world free of nuclear weapons. I learned the importance of our founders expectations, and carry on the mission to spread our message for world peace. LC students will conduct group projects based on our research on nuclear weapons. We will reflect on our learning experience and determine to continue studying and taking actions for world peace.

LC students redetermining themselves for their mission for world peace

東京フィールドワーク

■目的

SDG s について深く学び、「国際問題」「開発問題」「環境問題」「人権問題」などについて、グローバルイシューを改善するために、実際に活動を行っている国際機関や団体を訪問し、現実に起こっている課題や問題をリサーチする。

フィールドワーク終了後、参加した一人一人が SDG s 大使として、学校の内外に SDG s の取り組みを発信し、推進することを目的とする。

■期間

7 月 22 日(月)〜7 月 24 日(水)

■参加者

高校 1 年生 6 名、高校 2 年生 2 名、高校 3 年生 2 名

■事前過学習

SDG s プレゼン作成・SDG s 疑問集作成・フィジーにおける SDG s の取り組み学習

■行程・概要

7 月 22 日からの 3 日間、東京フィールドワークが行われた。希望者の中から選出された 10 名が参加した。約一か月前から取り組んだ事前学習では、国連の SDG s について徹底して学ぶとともに、疑問点を洗い出し、皆で共有をした。JICA フィジー事務所とのスカイプセッションのために、フィジーにおける SDG s の取り組みと、問題点などについてリサーチし、英語でのプレゼンテーションを 3 年生が作成した。アムネスティーインターナショナル日本で行う、関西創価 SGH の取り組みを紹介するプレゼンテーションの作成も行った。

22 日の早朝、新幹線で新大阪を出発し、JICA 市ヶ谷に到着。フィジーにある事務所とスカイプでつなぎ、日本語と英語でセッションを行う。地球温暖化に伴う、フィジーや周辺国の環境問題をメインに現状や対策を学んだ。次に、ワークショップを行っていただき、青年海外協力隊の方が実際に現地で撮った写真を元に、お互いの考えを深め合い、SDGs のゴールがそれぞれ密接に絡み合っていることを実感した。地球ひろばの見学では、触って楽しめる展示物も多くあり、地球の問題をわかりやすく理解することができた。

2 日目はアムネスティーインターナショナル日本を訪問。アムネスティーインターナショナルとは世界最大の国際人権 NGO 団体で、死刑や拷問、人質などの人権問題を廃止するように直接政府に訴えかける活動をされ、1977 年にはノーベル平和賞を受賞されている。関西創価の SGH の取り組みを紹介した後、人権問題についてのセッションを行う。アムネスティーインターナショナルの取り組みについて、詳しく教えていただき、権力と戦う市民の

声を、広げ、繋げ、伝える大切さを学んだ。関西創価高校としてもアムネスティーインターナショナルへのボランティア寄付運動を行うことが決定した。

午後は表参道にある国連大学を訪問。GEOC と UNIDO の方にお話を聞いた。GEOC は地球環境パートナーシッププラザの略で国、自治体、企業、NPO、そして市民をつなげ、協力していけるよう支援する活動を行っている機関。UNIDO は国連工業開発機関の略で、開発途上国などにおいて持続可能な産業の開発を進め、経済の発展を支援する国連の専門機関のひとつ。国際協力や支援をするにも、様々な角度があり、企業との連携も大切なことを学んだ。国連大学の中の見学もさせていただいた。

夕食の後、LC メンバーと共にオリンピックセンターにおいて、UNDP の近藤日本代表をお迎えして講義を受けた。実際に世界で活動し、体験されたことや世界の問題に対する上で重要な考え方や方法について、長時間にわたり教えてくださった。お話の中で、課題解決のためには、常に疑問を持つこと、課題を特定することや未来の勝利からの逆算することが大切だと学んだ。また、意見が異なるなかでの合意の方法は、データを見せること、科学的証明が大切であり、他にも対話や、第三者の意見を聞くなど、私達学園生の意見も聞きながら教えて下さった。さらに、仕事上での立場がない、私達高校生にできることは、繋がること、より多くの友人を作ることだと教えていただいた。最後に、誰かのために努力することで、SDGs は達成できる、と次世代の社会を担う私達に期待を寄せて下さった。

3 日目は国会議事堂を訪問した。まず、参議院を見学させていただき、昔ながらの造りで、彫刻も細かく施されていることに感動した。本校の卒業生である石川議員とのセッションでは、私たちの質問に誠実に答えて下さり、政治を行っていく上で大切なことは、国民一人一人のことを考えて、使命感をもって尽くしていくことが大切だと話してくださった。

つぎに、本校の LC メンバーと合流して戸田記念国際平和研究所を訪問した。ここは、核兵器の廃絶を訴え、地球民族主義を提唱した戸田城聖先生の平和理念を原点とし、本校創立者池田大作先生の国際的平和行動と、世界不戦の思想をもとに創設された研究所である。ここでは、NGO 団体でもある SGI 平和運動局の河合さんから、宗教など様々な違いがあっても、対話で共通の土台を見つけていくことが大切だと教えて頂いた。また、核兵器をなぜ無くすのかという質問に対して、「悪いから」「危ないから」「不必要だから」と確信を持って答えて頂き、改めて核兵器の不必要性を実感した。

この 3 日間で私達は、SDGs を通して世界の現状、課題、解決に向けて必要なことをたくさん学んだ。普段は行くことができない国際機関、政府の機関を訪問し、貴重なお話を聞く中で、私たちには何ができるのかを真剣に考えるようになった。今回のフィールドワークでで学んだことを最大限に生かし、地球的課題に真剣に向き合い、持続可能な社会を実現するために行動していきたい。

東京FW1日目

JICAは、SDGs達成の為の活動を行う機関で、ODA(政府開発援助)を国家からの要請で実行します。発展途上国などの復興、支援を担い、各分野の専門技術や知識をもった人材を途上国に派遣するなどの活動をしています。青年海外協力隊もJICAの取り組みの一つです。

～フィジー事務所とのセッション～

まず、グループで学園のSGHの取り組みについてと、フィジーの問題など、調べてきたことについてプレゼンしました。次に、フィジーのJICA事務所の方がフィジーや周辺国の環境問題をメインに現状や対策を教えてくださいました。

フィジーについて

フィジーでは、金属のストローを持ち歩き！

プラスチックのストロー廃止のため、自分でストローをもちあるくひとも多いそうです。

人材は良い！でもコーチが…

フィジーはラグビーでも有名です。しかし、優秀な人材はいれども、育てる先生、コーチがいないため、なかなか続かないようです。

～地球ひろば～

地球ひろばでは、SDGsを楽しんで学べる工夫がされていました。触って楽しめる展示物も多くあり、地球の問題をわかりやすく理解することができました。

2日目

アムネスティー・インターナショナル日本

アムネスティーインターナショナルは1961年に発足した世界最大の国際人権NGO団体です。（NGOとは政府に頼らず、民間人・民間団体のつくる組織のことです。）1977年には**ノーベル平和賞**を受賞されている団体です

このほかにもアムネスティーインターナショナルでは、死刑や拷問、人質などの人権問題を廃止するように直接政府に訴えかける活動をされています

アムネスティーインターナショナルを設立した弁護士ピーター・ベネンソンさん

ーアムネスティーの歴史ー

ポルトガルのとあるカフェで、学生二人が「自由のために！」と乾杯したために逮捕され、7年の刑を受けた、という記事を見たベネンソンさんはこのような人達を「良心の囚人」として彼らの釈放を求める運動を起こしました。この運動が後にアムネスティーインターナショナルになりました。

ーアムネスティーでの活動ー

私たちがまず、SGHの学びについて紹介しました。次にアムネスティーインターナショナル日本の方からアムネスティーの活動などを話してくださいました。

ー感想ー

私はアムネスティーインターナショナルで世界では人権がまだ守られていないということや、罪のない人を不当に罰している世界の現状を知り、まずはこの現状について学ぶことが大切だと思うのでこれからももっと学んでいきます！

GEOC・UNIDO

GEOCは、研究の実施、ならびにオンラインという方法や、シンポジウムおよびセミナーを通じた情報の発信により、UNU-IASのコミュニケーション・アウトリーチ活動を支援し、環境問題に取り組む市民社会団体への働きかけを行うという重要な役割を果たしています。

今回の研修では、浦林貴子さんに「環境パートナーシップ会議」と題し、都会と地方をSDGsで結ぶプロジェクトとその成果を学びました。

講演では、愛媛県で行った若者を地方に送り、地方の抱える課題や魅力を知ってもらう企画を展開していたことを話していただきました。浦林さんは「国、自治体、市民、NGO、企業が協力（パートナーシップを結ぶ）することで、SDGsの達成へ近づくことができる」とお話しいただき、ゴール１７「パートナーシップで目標を達成しよう」を深く考えることができました。

UNIDO (国際連合工業開発機関)は、国連の専門機関のひとつで、開発途上国や市場経済移行国において包摂的で持続可能な産業開発を促進し、これらの国々の持続的な経済の発展を支援する機関です。
中山綾子さんには、UNIDOとして取り組んでいるSDGs９に関連することについてご講演いただきました。

本部をウィーンに構えるUNIDOでは、各日本企業が途上国へ技術的支援を行なっている事例を通し、SDGsの各ゴールー つ一つが他のゴールと密接に関わっていることを知ることができました。
ゴール９の技術協力の観点から、他の国がしっかりと協力することが大切だと学びました。

UNDP

そもそもUNDPって？　→国際連合開発計画の略称。世界で起こっている諸問題に対して調査を行ったり、新しい政策を提案する組織。

今回は、UNDP駐日代表の近藤さんに２時間半にわたって、貴重なお話をうかがうことができました。

駐日代表
近藤 哲生

コソボ、チャドでの体験から、私たちに伝えてくださったこと

今あなた達が高校生であるからこそ様々な人と繋がり、語ることもできる。
意見の対立には正確なデータを用いて理論的に対話することで、相手の納得を勝ち取ることができる。
開発とは、何かを新しく与えるのではなく、その人がもつ可能性を引き出すこと。

～みんなの感想～

・約2時間半に及ぶセッションは、普段は聞けない現場でのリアルな体験も聞くことができ、世界で実際に政治が動いていることを感じることができました、質問にも丁寧に確実に、分かりやすく答えてくださり、私たちが未来を担っているんだとの使命を感じました。
・明確な件数や実績をデータ化して、相手へ伝える、理論的対話や、枠にとらわれない活動など、世界の問題にも通用する考え方を非常に身近に感じることができました。
・その時何があったのか、なぜそうなったのか、というところから様々な事柄が結び付いていき、わかりやすく、興味のひかれるプレゼンテーションをなさっていて、改めてデータや発表する要素の順序の大切さを感じました。

3日目
国会議事堂

～石川博崇議員とのセッション～

それぞれが政治に関しての疑問点を石川議員に質問しました。

右の質問以外にも、なぜアラビア語を選択されたのか、また外務省を目指したキッカケ、他党議員の様子に関してなど普段なかなか聞くことが出来ないことを教えて下さいました！

Q1.
憲法改正についてどう思うか？
A1.
憲法を変えるか変えないかではなく、憲法をどう変えるのか、まず何が目的なのか、本当に憲法を変えなければいけないのかを議論しなければいけない。

～国会議事堂の内部!?～

国会議事堂は昔ながらの造りで、彫刻も細かく施されており、設計の美しさに感動しました。

～みんなの感想～

・石川議員とのセッションを通して真実と事実の違いが分かり、世の中の様々な情報に対してのリテラシーを身につけることが必要だと分かりました。
・政治を行っていく上で国民一人一人のことを考えて、尽くしていくことを根本におくことが大切だと知った。
・石川議員の原点は、高校時代に学んだ創立精神だと聞き、高校生の時に民衆に尽くす決意をすることの大切さを実感した。

SGI 平和運動局

戸田記念国際平和研究所

核兵器の廃絶を訴え、地球民族主義を提唱した第二代会長戸田城聖先生の平和理念を原点とし、第三代会長池田大作先生の国際的平和行動と世界不戦の思想をもとに創設されました。グローバルな「研究協力ネットワーク」型研究所という独創的な発想で、全世界の著名な研究者を結び、平和研究のプロジェクトを進めてきました。

SGI平和運動局の河合さんをはじめとした方々に核の現状やそれに対しての取り組みなどについてお話を頂きました。

～SGIの核への取り組み～

創立者・池田先生の平和提言を基に論理的、道徳的観点から核について活動し、草の根の意識啓発を行っています。

核兵器への考え方
核兵器禁止条約の早期発効と普遍化
核兵器禁止条約は核拡散防止条約

ICAN(核兵器廃絶キャンペーン)との連携

~SGIでの大切なキーワード~

- 課題の共有
- 説得力
- 参加の拡大
- 言葉
- 若い世代

宗教など様々な違いがあっても
対話で共通の土台を見つけていくことが肝要です。

～なぜ核兵器をなくすのか～

悪いから、危ないから、不必要だから

生命の尊厳

生命は無限の価値を持っている

1. SGIはこの言葉を根本に日々活動していらっしゃいます。私たちも、核問題を他人事にせず自分事として受け止め日々行動していきたいと思います。

2019年度広島フィールドワーク実施報告書

〇目的

平和について学び、探求したことを学園生に伝え、意識啓発をしていくこと、また更に世界へと先駆をきって世界平和を訴え、伝えていくことを目的とする。核兵器禁止条約が採択され、核廃絶への関心が高まる中、広島に存在する大量虐殺のための毒ガスが製造されていた大久野島や資料館を訪れ、日本が加害者としても戦争に大きく加担した事実にも目を向け、実際に見て学ぶ研修とする。そして、広島女学院高校主催の“Peace Forum 2019”に参加し、世界の諸問題について、ハワイ，沖縄，東京，長崎，広島から集った高校生とディスカッションし、核兵器禁止条約可決に向けて、私たち高校生にできることを考え、世界平和、核廃絶のために積極的に取り組み、学ぶ研修とする。

〇期間　8/5 (火)～8/7 (木) までの3日間

〇参加者　高校1年生4名、2年生4名、3年生6名の計14名

〇事前学習

事前学習として、第二次世界大戦やそれまでの戦争、植民地の歴史を調べ、メモリーツリーを作成。ビデオ学習なども行い、学び深めた。さらにJR河内磐船駅前、イズミヤ交野店前で交野高校の方とともに核廃絶に向けての署名活動を行った。また、全校生徒の協力で千羽鶴を作成した。今回の事前学習の中で、特に時間をかけて取り組んだのが、3日目の“Peace Forum 2019”に向けての準備である。それぞれが取り組みたい問題を決めるところから始まり、核兵器、教育、新兵器の3つのグループに分かれ、問題点、解決策、高校生にもできるアクションプランを考え、プレゼンテーションを完成させた。

8月5日(月)　1日目

【大久野島・毒ガス資料館】

フィールドワーク1日目は、始めに大久野島を訪れました。

大久野島は戦時中、毒ガス工場として使用されました。工場で行われていた毒ガス兵器の製造は禁止されていたため日本政府はそれを隠蔽し、大久野島は地図から消され、1984年まで日本が毒ガスを使用したことを、旧軍関係者以外の日本人にはほとんど知られていませんでした。

まず私たちは大久野島の毒ガス製造に関するDVDを視聴し、その後それぞれで資料館内を見学しました。館内には、当時実際に使用されていた防毒服や防毒マスクなどが展示されており、実際に工場で勤務していた工員の手記や、毒ガスの研究に使用されていた実験器具も多く残されていました。毒ガス資料館を見学後、島内を散策しました。今ではウサギの島として知られる大久野島は、どの場所も多くの観光客で賑わっていて、毒ガスが作られていたという事実とはかけ離れた、和やかな光景をたくさん目にしました。

・生徒の感想

戦時中、地図から消され秘密で毒ガスの開発が進められていた”恐ろしい島”という印象からは想像もできないほど、穏やかでとても海の綺麗な場所でした。そのような場所に、戦後74年が経った今でも資料館という

形で毒ガスの恐怖や戦争の悲惨さを訴える場所が残されているのは、毒ガスによる計り知れない人々の苦しみや痛みを2度と繰り返さないためなんだと強く感じました。館内では、同じフィールドワークのメンバーの他にたくさんの観光客が真剣な眼差しで資料を見つめていました。私はそれをとても心強く感じ、曲げることのできない過去を受け止め、向き合っていくことが今を生きる私たちに一番大事なことだと思いました。

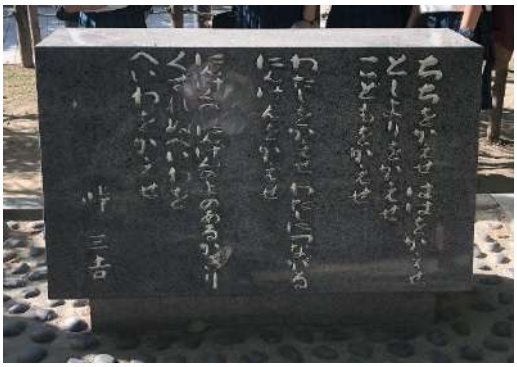
【被爆者朗読会】

実際に被爆された方の代わりに、三年間の講習を終えた被爆体験伝承者が行なっている被爆者朗読会に参加しました。最初、被爆当時のビデオを見せていただき、そのビデオの中には今の技術によってモノクロの写真からカラーの写真として映し出される場面もあり、より被爆の恐ろしさを見に染みて感じることができる映像でした。その後、被爆した小さい子がその当時の感情をありのまま綴った詩を読んでくださり、実際に私たちもその詩を読むことにより自分の身に置き換え考えることができました。

・生徒の感想

この会は、自分がもしこの惨禍にいたら、どんな思いをしていたんだろうと気持ちになる経験ができました。伝承者の皆さんの朗読の後、私も実際に「とうとう帰ってこない」という被爆者の詩を声に出して読ませていただきました。聞くだけでなく自分の声に出してみることで、その時の被爆者の人の家族を亡くした悲しみを感じることができました。お姉さんが原爆によって家に帰ってこなかったという詩で、私にも下に兄弟がいるので自分が帰ってこなかった姉だったらという気持ちで読んだため、とても苦しかったです。この会を通して、改めてこのような悲惨な現状を二度と繰り返してはならないとの思いがまた一段と膨らんでいったと同時に、このように被爆者の実際の苦しみを肌で感じる経験をもっと多くの人に体験してもらいたいなと思いました。

【碑めぐり】



碑めぐりでは広島女学院の生徒の方が広島平和公園内を碑の説明をしながら案内してくれました。まず、説明してくれたのが峠 三吉さんが作った詩が刻まれている碑です。力強い詩が心に残っています。次に「安らかに眠ってください、過ちは繰り返しませぬから」が刻まれている慰霊碑を見ました。実際、広島で亡くなられた方の名簿が保管されているそうです。次に、原爆ドームを見て回りました。想像以上のサイズで、こんなにも大きなものでさえ廃墟と化したことは原爆の恐ろしさを物語っていました。その次に、平和の子の像へ行き、その像の下の鐘を鳴らしました。平和の子の像のモデルになった人は被爆した直後は特に外傷もなく無傷で済んだと思われていました。しかし、被爆してから数年後に原爆の放射能による後遺症で命を落としました。原爆により一人の人間が亡くなったことを忘れないために作られました。最後に、被爆され亡くなった朝鮮人の方の慰霊碑を見ました。原爆は日本人だけでなく、その当時広島に住んでいた朝鮮人の方の命までも奪っていきました。

・生徒の感想

広島女学院の多くの方のご協力があって、たくさんの深い意義のある碑を見て学ぶことができました。特に印象に残った原爆ドームは大きく、とても壊されそうにないのに、実際は原爆によって見る影もなくなっていました。これからも保存するにはたくさんの費用がかかるそうですが、是非守っていきたいと思います。

8月6日

【平和記念式典】

平和記念式典は、市長の方や総理大臣などの平和への思いを拝聴することができました。そのような方々が、平和のために行動を起こしていく強い思いを示してくださったので、私達も、それを励みに平和への活動を進めていこうと思いました。

また、小学生による平和への誓いは、感動しました。様々な世界的課題が蓄積する中で、最も大事な、相手を思いやる心を、思い出させてくれました。

しかし、それと同時に、総理大臣や広島市に対するデモ行進の声も聞こえてきました。まだ、平和を目指すもの同士でも、思いの食い違いが生じているのだと実感しました。そのような課題は一刻も早く解決し、団結して問題解決に取り組んでいかなければならないと思いました。最終的な目標が同じ人同士での対話も、大切なのではないかと感じました。

・生徒の感想

小学生による平和への誓いは、様々な問題について学んでいく中で何をしたらいいのかわからなくなっていた私に、平和を目指す上で一番大切なことを思い出させてくれ、また、子供達も平和への強い願いを持っていると知り、希望を持てました。最後、全員でひろしま平和の歌を歌い、決意に燃えて式典を終えることができました。

【被爆体験を聞く会】

広島女性平和委員会が主催する「被爆体験を聞く会」に参加しました。登壇してくださったのは、松浦悦子さんでした。松浦さんは7歳の時に疎開先から広島市に入り被爆しました。松浦さんの口から出てくる言葉を聞いて避けたくなるような気持ちにもなりましたがすべてを吸収するつもりで真剣に話を聞きました。当時は放射線の影響が知られていなかったため多くの人が放射線に苦しみました。松浦さんも足に腫れ物ができるなどといった症状を発症されました。原爆の被害を受けながらも聖教新聞の通信員として活動されている姿は本当に尊いです。池田先生は松浦さんに対して「大思想は原爆を恐れじ」との揮毫を送られていたことも知りました。「被爆体験を聞く会」では私達が目指す平和について考えることができ、和やかな雰囲気だったのでまた、機会があれば参加したいと思いました。

・生徒の意見

被爆者の平均年齢が80歳をこえた今、直接被爆者の方の話を聞く機会は多くありません。今回の経験を大切にしていきたいと思いました。松浦さんの話の中で入市被爆について話されていた時に、僕は入市被爆について詳しく知っていませんでした。このことから、もっと深く学んでいかないといけないと強く思いました。松浦さんは私達に「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」との信条を大事にし、人のために尽くしてほしいと呼びかけられました。このFW を通して他人の不幸の上に自分の幸福を築くことがどれだけ悪いのか感じてきました。そして、平和のために力をつけ、必ず核なき世界を実現するためにも今回の体験をひとりでも多く広げていこうと思いました。

【袋町小学校平和資料館、第18回広島原爆と戦争展】

袋町小学校平和資料館は、広島の新川(しんせん)場戒善寺にあり、明治6年の2月2日に焦点[就将館]として開校しました。昭和16年の4月1日に広島市袋町国民小学校として改称されました。学校の壁面の漆喰の一部を剥がすと(寮内)という文字が出て、当時の被爆者の消息を知らせる伝言が残っていることがわかったため、急遽取り壊すのを中止し、今の形として残すこととなりました。

「第18回　原爆と戦争展」では、原爆の当時の悲惨さやこれまで世界で起こってきた戦争についてを鮮明に伝えるためにこの展示会を作ったと言われており、戦争についての詩が当時のまま展示されていました。戦争や核兵器や沖縄の地上戦などの悲惨さを伝えるためにそれを経験してきた人たちが語ってくれる場も設けられていました。

・生徒の意見

広島の原爆によって奪われた命は本当に数え切れないほどいて、戦争に関係のない一般市民の人たちが犠牲になるのは本当に胸が苦しくなるほど辛いことだと思うし、特にその中には小学生やまだ生まれて間もない頃の子供たちもたくさん広島にいたというのに、本当に痛ましいことです。それでも子供たちやその親御さんたちは小学校にある黒板で自分たちの居場所を確認するために書いているから本当に悲しかったんだなともすごく思いました。そして戦争に巻き込まれた全ての世界の兵士さんたちは国の圧政によって従うしかなかったことで戦いに臨んだ事が本当に勇敢だったんだなと思ったので、こういう人たちや未来を奪われた子供たちのためにも、私たちは今日を生きていることに感謝し、この人たちの思いを胸に刻みこみこういう事が絶対に繰り返さぬよう考えたり努力していったりいかなければならないといけないと思いました。

【河合部長との懇談】

SGI河合部長に、実際に世界で活動していることなどのお話をしてもらった後、私たちからの質問を聞いてくださる時間がありました。時間が短かったこともあり多くの質問はできませんでしたが、核廃絶を進めていく上で大切なことや、私たちのアクションプランへのアドバイスをいただくことができました。

・生徒の感想

今までずっと調べてきたICANのことや核廃絶のことはどこか遠い話のように感じてしまっている部分がありましたが、お話を聞いてとても身近に感じました。特に印象に残っているお話は、”出発点は違う”ということです。同じ人は一人もいないように、同じ考えを持つ人はいません。その中で意見をやり取りして分かり合うのは難しいけれども、分かり合えたら感謝が生まれるとおっしゃっていました。これから意見が違う人ともたくさん関わっていく際には、自分の意見だけでなく相手と意見をしっかり共有し、感謝の気持ちで分かり合っていきたいと思います。

【広島平和委員会との交流】

広島平和委員会のメンバーの皆さん、河合部長、東京校のFWメンバーと交流しながら自分たちのプレゼンを紹介し、アドバイスをいただきました。

・生徒の感想

初めて聞く目線ならではのアドバイスをいただいたり、私たち自身も、東京校のプレゼンを見て、今まで自分たちが気を付けてきたことなどを伝えたりと、よりプレゼンが良くなるように東西で協力して取り組みました。平和委員会の方が、平和委員会になろうと思ったきっかけなどを教えてくれました。ピースフォーラムでの発表に向けての良いリハーサルとなり、次の日に向けて頑張ろうと思えました。

【平和祈念資料館】

資料館には、原爆が投下された当時の広島の様子や被爆者の方々の遺品が沢山展示されていました。展示のなかには、被爆した子どもたちが着ていた服や、壊れた自転車やお弁当箱など、悲惨さがひしひしと伝わるようなものばかりでした。他にも、被爆者の方がかかれた原爆の絵を最新の技術を使い、絵がかかれた場所をモニターで写し出すという企画も行われていました。また、小さい子どもや海外の方まで多くの人が資料館を訪れていました。

・生徒の意見

自分が今までに学習してきたことや今回学んだことを思い返しながら展示を見て回ると、言葉だけでは伝わらないものを感じられて胸が痛みました。幼くして被爆し亡くなってしまった子どもたちの、助けを求める言葉や遺品も多くあり、特に印象強く自分のなかに残っています。それらを見ると、もし自分や家族がそういった立場になったらと考えさせられ、恐怖を感じました。また家族の手紙のやり取りの展示があり、その中の「さようなら」という最後の一言がとても重く感じ、普段聞くさようならという言葉とは意味が違うような気になりました。初めて資料館を訪れましたが、何度もきて考えを深めて行くことが大切であると思いました。

8月7日(水)

3日目は広島女学院に行き、Peace Forum 2019に参加しました。

【Peace Forum】

ハワイから2校、日本から9校の高校が集まり、“Peace Forum 2019”が始まった。はじめにオープニングセレモニーがあり、広島女学院、ハワイの高校生のプレゼン発表が行われました。また、チョードリー博士からのビデオメッセージがあり、驚きのオープニングセレモニーとなりました。今回は、核兵器の問題にとどまらず、LGBTQや飢餓の問題など、様々なグローバルイシューについて各グループがプレゼン発表を行いました。昼食時には、積極的に声をかけて昼食を一緒に食べたり、写真を撮ったり友好の輪を広げることができました。そして昼食後には、10分のプレゼンを、アクションプランだけまとめた2分間のプレゼンに作り変えました。急な発表で、生徒達は焦りや不安もあったが、グループメンバーと協力し合い作り終えることができました。 そして、全体の場でアクションプランを2分間で全グループ発表しました。

・生徒の感想

他の高校のプレゼンを聞いて、自分たちは考えていなかったようなアクションプランや、問題に目をつけていて学びの多いものとなりました。質問も積極的に関西創価からしていったので良かったです。自分たちのプレゼンテーションでは、しっかりと今まで準備してきたものを出し切ることができました。また、積極的に友好の輪を広げていくことができ、かけがえのない時間になりました。これからもこの友情を大切に、世界平和の実現のために一緒に戦っていきたいです。

○広島フィールドワークを終えて

世界の平和のために何か少しでも学ぼうと全員で決意して臨んだ広島フィールドワーク。たくさんの場所を訪れ、実際に資料を見たり、被爆体験を聞いたりして、被爆された方々がどんなに辛かったか、どんなに苦しかったか、核兵器の悲惨さをひしひしと感じました。実際に現地に行って学ぶということは、机の上で学んでいるだけでは分からない事を本当にたくさん学ぶことができました。被爆者は時間が経つにつれて、だんだん少なくなっていっています。今回そのことを改めて実感し、被爆者の思いや願いを絶対に風化させてはならない、原子爆弾のような恐ろしいものが世界からなくなるまで私たちは戦うことをやめてはならないと強く思いました。今の自分たちに出来ることは少ないけれども、少しでも世界の平和のために出来ることから貢献していこうと決意したフィールドワークでした。

California Trail 2020

Written by Rion Kunimoto, Daiki Katsukawa

DAY 1

1月24日に結団式が行われ、皆で出発前の最後の決意を固め合いました。1月26日、校長先生を始めとした先生方、保護者の方々のお見送りを受け、皆で大成功を誓い合いました。搭乗までの待ち時間の間も、何度もプレゼンテーションの準備を行ったり、少しの時間も無駄にしないと熱心に勉強する生徒の姿がありました。そして現地時間午前10時30分、アメリカ・ロサンゼルス国際空港に無事に到着しました。様々な人種が行き交う様を目の当たりにして、日本とは違った空気に胸を躍らせながらも、絶対無事故・大成功で終えると、気を引き締めて海外フィールドワークのスタートを切りました。

大成功を固く誓い合って

広大なキャンパスを学生と話し合いながら

カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)を訪問した私たちは、UCLAの学生とキャンパスツアーを行ったのち、5グループに分かれてセッションを行いました。あるグループでは、「核兵器に対する無関心」が引き起こす問題について話し合い、UCLAの学生は「核兵器廃絶」に関する講義を受け、核兵器の脅威を理解しているにも関わらず、核兵器を用いたTVゲーム等を日常的に行っていると聞き、ショックを受けました。セッションを通じて、国際問題を自分たちの普段の生活と関連させ、考えることの重要性を学んだとともに、私たちができることを深めていきたいと視野が広がる貴重な交流となりました。

リスベス教授とのセッションは、場所を移して行われました。リスベス教授は私たちを温かく迎えてくださり、私たちは教授の大きな期待を一言も漏らすまいと、セッションに臨みました。リスベス教授は「世界は一瞬には変わらない。だからこそ地道に、対話を通じて人々の苦しみに寄り添うことが大切であり、一歩踏み出せているかが大切。」と述べられ、「私たち高校生に何ができるのか。」「平和な世界とはどんな世界なのか。」という観点でパワフルに語られました。セッションの最後には「この旅を終えて、どうなりたいか」との問いかけがあり、一人一人が自身の使命を再確認したセッションとなりました。

青年への期待を熱く語られたリズベス教授

California Trail 2020

Written by Yudai Sato, Yuichi Sakemi

DAY 2

社会的責任を求める医師の会（PSR）とのセッションでは、まず核実験による環境への影響についてのプレゼンテーションを行いました。PSRのDuffield氏は、「青年の力は偉大で必要になってくると語り、今、皆さんがやられていることは素晴らしい」との講評をくださいました。また、核廃絶活動家のクルーズ氏は参加されてきた国際的な核廃絶のプロジェクトとその活動を紹介され、核兵器をただ怖いものと教えるよりも核廃絶に向けて実際に行動することを促されていました。米国広島・長崎原爆被爆者協会（ASA）のナカノ氏への質問では、「被爆体験を発表するのはつらいはずなのに、どうしてされているのですか」との問いに、「誰一人同じ目にあってほしくないという信念が突き動かしている」と語り、核兵器廃絶の情熱を肌で感じることができました。様々な方々とのセッションで、これからもこの核兵器廃絶への意識は高く持ち続けようと決意することができました。

核実験による環境への影響をプレゼン

ナカノ氏の熱いメッセージに学園生は
平和への決意を新たにした

核兵器禁止条約（TPNW）のプレゼン

対話の重要性を強調されたマクレイス委員長
（左から2人目）

SGI-USAではマクレイス委員長を始めとした3名の平和委員会の皆さんからお話を頂きました。核兵器禁止条約(TPNW)が主題のプレゼンには、講評のなかで、核兵器のない世界を実現する運動をどうすれば広げていけるのかを考えることの大切さを述べられました。また、「人の心と核兵器、どちらが悪か」という主題のプレゼンには、創価の平和思想に触れられた上で、「悪を傍観することは、ガンジーの平和思想に照らしても絶対悪である」と力強い言葉を頂きました。世界に様々な暴力が蔓延しているなかで、青年たちが「ビクトリー・オーバー・バイオレンス」という平和推進活動をしていることに触れられ、青年が平和を創る大きな力であることを強調されました。中でも、マクレイス委員長はセッションの中で、対話の重要性について何度も訴えられ、世界平和のような大きな目標も、地道に周りの人たちと対話することから始まっているんだと確信を持つことができました。

California Trail 2020

Written by Kazuyo Nishida, Miyuki Kikuchi

DAY 3 (1)

3日目はアメリカ創価大学を訪問しました。到着すると、ハブキ学長自ら温かく出迎えてくださりました。セッションでは、「自分の意見を持つにはどうすればいいですか？」との質問に対して、「自分の興味のある分野を1つ徹底的に追求してみてください」とアドバイスをくださいました。アメリカに来てから、自分の意見をしっかり持ち、発言することがどれだけ難しいのか痛感していた私たちにとって、このアドバイスは、世界市民として成長していくために挑戦すべき大きな課題となりました。また、各生徒が抱える悩みにも着飾らず答えてくださり、その慈愛あふれる人柄にとても感動しました。

ハブキ学長から世界市民として成長するためのアドバイスをいただいた

ウォルドルフ学校の生徒とキャンパスツアー

ウォルドルフ学校の生徒とともにキャンパスツアーを行いました。SUAへの寄付者の名前が至る所にあり、SUAとその学生にどれほど多くの人が期待し、協力しているかと思い、驚きました。また、SUAのホールは世界で最も優れたコンサートホールのひとつであるウォルトディズニーコンサートホールと同じ構造になっていて、音がよく響き渡っていました。キャンパスツアー中、ウォルドルフ学校の生徒ともアメリカと日本の学校制度の違いや、今目指している大学について語り合うことができ、友情の輪を広げられました。

午後はSUAの4名の教授とのセッションを小グループに分かれて行いました。オガタ教授とのセッションでは、核廃絶への教育プログラムと心理学から見た核廃絶の発表を行いました。教授はユーモアを交えながら、厳しい講評をくださり、発表内容に入れる情報を見極めること、また、なぜ教育プログラムを作ろうと思ったのか、その授業内容は本当に生徒たちが学ぶべき情報なのかをしっかり考える必要があると指摘してくださいました。アイコンタクトなどの発表時の姿勢も含め、最も大切で、基本的なものを見落としていたことに気づくことができ、とても有意義で実りある時間となりました。

オガタ教授（左端）とのセッションは楽しくも、熱を帯びたものになった

California Trail 2020

Written by Kazuyo Mizuta, Mimi Tokiwa

DAY 3 (2)

ピーター・バーンズ教授とのセッションでは、関西高の3年生が行った学年模擬国連について発表をしました。教授は昨年の模擬国連グループの発表もご覧になっており、去年のグループがでできていなかった模擬国連の説明や今年の3年生が何を学んだのかがよくわかると褒めてくださいました。その上で、さらにロジックモデルに従ってプレゼンテーションを考えたらいいと、ロジックモデルの図を見せてくれながら改善点を具体的に示してくださいました。教授はとても優しく、私たちの緊張もほぐれ、とても話しやすく、私たちの将来の夢についてのアドバイスをくれたりと、とても有意義な時間となりました。

バーンズ教授（中央）とのセッションは非常にアカデミックな内容になった

ガイアス教授はご自身のアートを通して、ホロコーストの悲惨さを訴えられた

ガイアス教授は、ご家族がホロコーストの被害を受けたことをきっかけに、ホロコーストが起きた場所の地図を書き写すという新しいアートを行っています。現在、ホロコーストは知っているが、起こった場所は知らない人が多いという現状です。私たちも、教授の絵を見たときはどこかの地図としか思いませんでしたが、後にどこの地図であるかを知ると、恐怖を感じました。写真ではなく、絵だからこそ、そして場所の絵ではなく、ただの地図だからこそホロコーストの恐怖を伝えることができるのかと感じました。また、どこまでも平和を願い活動をされる教授の姿にとても感銘を受けました。

夕食後、SMCPという核廃絶を目指す学生団体とディスカッションを行いました。あるグループでは、核兵器支持者に核兵器は絶対悪であると理解してもらうにはとの話題に、対話を通して、なぜ相手がそう思うのか、なぜその事が相手にとって重要なのかを理解し、相手と自分の意見の共通点を見いだす事が最も大切だと理解しました。また、対話の限界を感じたとの経験を話した生徒には、自分の言いたいことを伝えるだけではなく、意見が対立した状況下で互いが納得するために必要なことを共に考えることが必要だとアドバイスをくださりました。

SMCPと核兵器廃絶に関する意見交換

California Trail 2020

Written by Shinichi Takebe, Masahiro Iwashita

DAY 4 (1)

アメリカ創価大学では、春学期の頭に3週間の問題探究を行い、その探究成果を発表するLCフェアを開催しています。私たちはそのLCフェアに参加させて頂き、SUAの先輩方の発表を見学しました。様々な研究テーマがありましたが、その中には異国間での文化や言語の違いについてなど、留学生の割合が全米一のSUAならではの研究もありました。その研究を行った学生から、文化や言語が異なっていても問題を感じたことがないと聞き、一人一人がお互いを理解しようとする姿勢が大切で，それがあれば世界平和は実現できると改めて実感をしました。

様々な発表から学び、視野を大きく広げた

ウォルドルフ学校の生徒とキャンパスツアー

同じ高校生とのディスカッションは
学園生にとって、大きな経験になった

4日目の午後、ウォルドルフ学校を訪問しました。お互いの学校紹介、小グループごとに分かれてのキャンパスツアー後、そのグループで核兵器廃絶に関するセッションを行いました。このフィールドワークで初めての同年代の高校生とのセッションは、核兵器廃絶への理解を得られるか心配でしたが、ウォルドルフ学校の生徒と私たちはプレゼンテーションとその後のディスカッションでも真剣に意見交換を行うことができ、核兵器は脅威で、人類にとって不必要なものであり、地球全体に悪影響を及ぼすとの共通理解を得ることができました。他にもそれぞれの趣味、学校での生活、日本の文化、食べ物など身近な話題についても楽しく会話し、友情の輪を広げることができました。最後には，ウォルドルフ学校の生徒から，ピアノとギターを交えた合唱の披露がありました。練習に練習を重ねたんだろうなと思うほど，伴奏も合唱も完成度が高く，それに対して関西創価高校の生徒も校歌を歌い，感動的な交歓会となりました。最後のお別れの際には，どちらの高校の生徒も名残惜しそうにしていました。今回のウォルドルフ学校の生徒との交流は国を超えて友情を結び、素晴らしい交流にすることができました。

California Trail 2020

Written by Yuki Maeda, Marine Uemura

DAY 4 (2)

夕方、私たちはカリフォルニア州立大学アーバイン校（UCI）を訪問しました。緊張していた私たちを、ホワイトリー教授はバス停で出迎えてくださり、教授の思いやりと温かさを感じる振る舞いに、私たちは感動し、緊張も一気に和らぎました。一方で、教授とのセッションはとても熱を帯びたものになりました。私たちの核抑止論のプレゼンテーションと核兵器に関する教育のプレゼンテーション後に、それぞれに対する講評をいただき、教授に講演をしていただきました。教授は核抑止論がいかに矛盾した意見かを資料を交えて、一つ一つ丁寧に、また非常に厳しい論調で説明してくださいました。その中で、教授は、過去の悲惨な核兵器事故によって起こった被害の酷さや核保有によって起こるリスクの大きさを説明してくださり、現代では残念ながら核抑止論が容認されていますが、皆が過去の歴史をきちんと学んでいけば核保有の危険性を必ず感じて核抑止論がいかに暴力的で非人道的かを感じることができるに違いないと述べられました。私たちは、きちんと歴史や記録を多角的に検証し、自身の意思と人道性の面から各自がきちんと核抑止論を考えていかないといけないなと感じ、人道教育・人間教育が改めて重要だと再認識しました。

核兵器に関する教育のプレゼン

ホワイトリー教授（中央）は、
厳しい口調で核抑止論を非難

宇宙の広さを感じ、創立者の「私たちの可能性は無限大」との激励を思い出した

SUAでの夕食後、ペンプレス教授の案内で、新設されたSUAの展望台を見学させていただきました。望遠鏡で月やシリウス、M42オリオン大星雲などを観察させていただき、また、レーザーを使って冬の大六角を説明していただきました。全員が星の名前を必死になって覚える姿がどこか可笑しくて、とても印象に残りました。宇宙の壮大さを感じ、それに比べて地球はなんてちっぽけな星なんだろうと思いました。創立者池田先生が、私たち学園生に「皆、宇宙大の可能性を秘めている」と激励してくださっていることを思い出し、自分たちの手で必ず世界平和を実現してみせるとの決意をさらに深めました。

California Trail 2020

Written by Shota Kuwabara, Hiromi Ieda

DAY 5

5日目はザ・グラウアー・スクールを訪問しました。この学校は、関西創価高校と同じユネスコスクールであり、これが初めての訪問となりました。同年代の高校生17名は、私たちを温かく迎え入れてくれ、ディスカッションがスタートしました。私たちの核兵器廃絶のプレゼンテーションの後、気候変動や平和の定義等、多岐にわたって話し合いました。ある生徒は、「あなたはどうやって平和を定義しますか」との質問に、「平和は戦争がない状態だけでなく、世界中の人々が共に仲良く過ごしていけることだ」と答えていたのが印象的でした。また、私たちは、「大事なことは、他人の不幸の上に、自分の幸福を築くことはしないという信条だと思う」と伝え、グラウアーの生徒からも賛同を得ることができ、創価教育の根本を広めることができました。お互いに意見を交わし、交流を深める中で、私たちが世界平和を築いていくのだとの使命を再認識しました。

核兵器廃絶に関するプレゼンを小グループで

創立者のグラウアー博士（右端）
もディスカッションに飛び入り参加した

ウィロビー教授（左下）の授業に参加し、
大学生3，4年生へ核兵器廃絶の授業をした

授業の後半には、大学生とのディスカッション

最後に訪問したサンディエゴ大学では、ウィロビー教授の授業を訪問し、30人近い大学生に核兵器廃絶のプレゼンテーションを通して、授業をしました。ウィロビー教授は、日本とアメリカの核に対する観点の違いについて言及され、「アメリカでは、『核は国民を守ってくれる』と考えている人もおり、どうやって共通意識を達成するかをもっと考えないといけない」と講評をくださいました。また、大学生も私たちの内容に耳を傾けてくださり、授業の後半で行ったディスカッションでは、私たちのプロジェクトに興味を持ってくださった学生が多く、日本での核兵器に関する教育のことなど、様々な質問や意見をいただきました。アメリカでは核兵器についての教育はあまり重要視されていないらしく、大学生にとって私たちのプレゼンで初めて知ることも多かったと聞きました。私たちは改めて自分たちの核廃絶への思いをもっと多くの人々に伝えないといけないと感じました。

Kansai SOKA Senior High School

Learning Cluster

2019-2020

SGH Learning Cluster Program

【Program Overview】

Picture: Students holding group discussions

The Learning Cluster Program (LC) is part of Kansai Soka High School's Super Global High School (SGH) program, where students study global issues in English. The foundation of this program is based on our school founder Dr. Daisaku Ikeda's Annual Peace Proposal, which called upon the need for educators to foster global citizens, through lessons that explore the four areas of development, environment, human rights and peace. Over the course of one year, students develop their language and research skills, and deepen their understanding of global issues in these four areas. Students also learn and research about the Sustainable Development Goals (SDGs) proposed by the United Nations, and initiate projects with support from a team of international teachers.

The purpose of this program is to provide students with the opportunity to deepen their understanding of current pressing global issues, and to nourish a sense of responsibility and hope through student-led research and autonomous learning. Through this program, we hope that students will discover passion in their learning which will continue into their future university studies, professional career and lifework. In this way, this program hopes to foster the next generation of global leaders who will live contributive lives for the betterment of humanity.

【High School Peace Proposal (HSPP)】

Picture: From left, High School Peace Proposal 2018, 2017, 2016

As part of the Learning Cluster Program, in the second half of the academic year, students are divided into groups of four or five students and conduct a final research project on one global issue, with support from a team of international teachers. The research project typically includes a detailed literature review, background research and an analysis of the issue, followed by an action plan or a proposal for concrete solutions. The final product is created by the students, based on class discussions, student feedback during presentations, and comments from experts during local and overseas fieldwork throughout the year.

【History of Learning Cluster】

Picture: Students during LC class

<u>1st Class (2014-2015, SGHA)</u>

- 15 students selected from grades 10-12
  - Group Research Topics (4 Fields)
    - Development: Renewable Energy
    - Environment: Water
    - Peace: Collective Self-Defense Act
    - Human Rights: Refugees in Japan
  - Tokyo Fieldwork

<u>2nd Class (2015-2016, SGH 1st Year)</u>

- 16 students selected from grades 11-12
  - Group Research Topics (4 Fields)
    - Development: Bullying in An Education
    - Environment: Peace Proposal for Environmental Education for the Future
    - Peace: Actions for High School Students Towards the Abolition of Nuclear Weapons
    - Human Rights: Suggesting Concrete Actions to Provide Basic Human Rights to Syrian Refugees
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

3rd Class (2016-2017, SGH 2nd Year)

- 24 students and 2 student advisers selected from grades 11-12
  - Group Research Topics (SDGs)
    - No Poverty (SDG 1): Child Poverty in Japan
    - Zero Hunger (SDG 2): Equalizing Food Distribution to Achieve Zero Hunger
    - Quality Education (SDG 4): Education for Nuclear Abolition
    - Gender Equality (SDG 5): Gender Equality through Education
    - Decent Work (SDG 8): An Educational Program for Japanese High School Students against Child Labor
    - Peace and Justice (SDG 16): Using Dialogue to Counter Terrorism and Create Inclusive Communities
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

4th Class (2017-2018, SGH 3rd Year)

- 25 students selected from grades 11-12
  - Climate Change Research Group:
    - Adaptation to Climate Change in Maize Production in the Sahel
    - Peace-Building and Climate Change
    - Sustainable Tourism to Combat Climate Change
  - Nuclear Abolition Research Group:
    - Environmental Damage of Dismantling Nuclear Weapons
    - Protecting Human Rights from the Fear of Nuclear Weapons
    - The Role of Religion for Nuclear Abolition
  - Tokyo Fieldwork, Overseas Fieldwork

Picture: Students during LC class

5th Class (2018-2019, SGH 4th Year)

- 22 students selected from grades 11-12
  - Women's Empowerment – The Situation Game
  - Child Abuse Awareness Project Proposal
  - LGBTQ+ Research in Kansai Soka High School
  - Nuclear Abolition: A Humanitarian Perspective
  - Understanding Refugees in Japan

6th Class (2019-2020, SGH 5th Year)

- 22 students selected from grades 11-12
  - Nuclear Deterrence: Research from a Humanitarian Perspective
  - Nuclear Abolition Education Program for Japanese High School Students
  - Environmental Effects Caused by Nuclear Testing
  - Nuclear Abolition in Our Community: Raising Awareness towards TPNW
  - Which is more evil: The Heart or Nuclear Weapons? A Survey on the Psychology of Nuclear Abolition

6th Class (2019-2020, SGH 5th Year)

- 20 students selected from grades 11-12
- Theme: Treasuring Diversity

Learning Cluster 2019-2020: Yearly Course Outline

【Aim】

This course is designed for students to deepen their understanding of global issues by conducting thorough research on a variety of topics, including the United Nations SDGs, throughout the year. All classes, discussions, and presentations were conducted in English.

【Context】

- School Day Thursdays, 1 Year
- 22 students from grades 11 and 12

【Selection Process of LC Students】

All students from grades 11-12 are eligible to apply for Learning Cluster. Students are expected to have an English fluency level of Eiken 2 or above with a strong interest in global issues research. Completion of SP during grade 10 is also required. The selection process includes the following tests:

- **Paper Test**
  - Assesses Basic English ability
  - Reading, listening, and essay writing questions (Pre-1 Eiken / TOEFL)

- **Group Interview Test**
  - Assesses English speaking abilities, discussion, creativity, and leadership skills
  - Students discuss together in English to solve a prompt question

- **Individual Interview Test**
  - Assesses students' commitment levels and other extra-curricular responsibilities
  - Students are asked questions about their reasons for joining LC, study habits, club activities, etc.

【LC Teachers】

- Kazunori Yamagishi (Japan, MA: TESOL)
- Kazuhiro Iguchi (Canada/ Japan, MA: TESOL)
- Liang Ye Tan (Singapore, MA: Sociology; Diploma in TESOL & Advanced Cert in IELTS)
- Louis Butto (USA, MA: TESOL; EDD in Applied Linguistics)
- Ramon Paras (USA/ Philippines, MA: TESOL)
- Swati Raj (India, MA: TESOL)

【Materials】

- Annual Peace Proposals
- A Forum for Peace
- Newspaper Articles
- TED Talks
- Library Books
- Online Resources
- Special Guest Lectures

Picture: LC team-building activity

【2017-2018 Yearly Course Plan】

1st Semester: In the first semester, emphasis was placed on team-building, presentation skills, and a broad understanding of key global issues that are relevant in today's world through an in-depth student-led discussion and study session of Dr. Ikeda's Annual Peace Proposal 2019. Students acquired a broad understanding of current global issues through group discussions, creating poster presentations and special lecture sessions conducted by alumni Learning Cluster members and special guests. Students also had the opportunity to interact with exchange students from the University of Guelph-Humber and share what they have learned through poster presentations.

Picture: LC Students doing poster presentations to students from University of Guelph-Humber

As this year's format was focused on action projects rather than writing research papers, students were divided into five groups towards the end of the first semester, and then taught project management skills such as time management, communication styles and some basic research skills. They were also taught and given the chance to practice their presentation skills through class activities and public presentations during open campus days and other SGH-related events. Thereafter, each group spent the summer holidays researching a specific area related to nuclear abolition that they identified as their area of interest.

Picture: LC Students exchanging their views with students from University of Guelph-Humber

2nd Semester: In the second semester, each group came up with project proposals and worked with the international teachers assigned to them. Using the skills that were taught in the first semester, students embarked on their group research, wrote simple literature reviews, defined their area of intervention, and designed their own research methodologies and action plans. The advisors guided the students on the content of their research, project methodology and project implementation. Armed with a general understanding of the five chosen topics and project proposals, students participated in a fieldwork to Tokyo to present and discuss their research topics with experts. After gaining professional feedback from professors and experts during the Tokyo fieldwork, students then used the information to refine their action plans and started implementing them in the second half of the second semester. As this year's Annual Peace Proposal by Dr. Daisaku Ikeda covered a great deal about nuclear abolition, the students' designed projects such as simulation games that were focused on influencing and empowering youths to take action towards nuclear abolition within the school.

3rd Semester: Several students were selected to participate in our fifth overseas fieldwork to California, where they presented their completed *High School Peace Proposal* to local high school students, university professors, and experts. After coming back from the fieldwork, students shared what they have learnt and held the Learning Cluster Booth Day to share the results of their projects and implement some of the action plans, such as simulation games, focus group discussions, and workshops with the wider student body. Students also had the opportunity to share about what they have learnt during the overseas fieldwork through posters during events such as the SGH final presentation session and open campus day.

Picture: Students taking part in a simulation game during LC Booth Day, where they simulate countries engaged in diplomatic negotiations in a nuclear arms race

UP（University Partnership）クラス

UP クラスは、高大連携を中心としたプログラムで、大学の先生や企業でお勤めの方をお招きし、本校がテーマに掲げる「環境」「開発」「人権」「平和」の４分野をさらに深められるよう授業をしていただくクラスである。

毎週木曜日の放課後を軸に、１～３年生の希望者を対象に実施し、2019 年度は計 27 回の授業を行った。その一覧が下の表である。

回	日付	講師		内容
1	4/18	ガイダンス		
2	4/25	事前学習		平和
3	5/30	創価大学	石井教授	平和
4	6/6	創価大学	石井教授	平和
5	6/13	事前学習		平和
6	6/20	創価大学	石井教授	平和
7	6/21	平和学習		平和
8	7/10	東京大学	藤井博士	経済学
9	7/11	東京大学	藤井博士	経済学
10	7/12	東京大学	藤井博士	経済学
11	7/18	日本政策金融公庫	足立氏	開発
12	9/5	世界遺産学習会		環境
13	9/12	創価大学	西浦教授	開発
14	9/19	創価大学	西浦教授	開発
15	10/17	創価大学	西浦教授	開発
16	10/24	京都大学	山敷教授	環境
17	10/31	大日本住友製薬株式会社		人権
18	11/7	京都大学	学びコーディネーター	人権
19	11/14	京都大学	山敷教授	環境
20	11/21	京都大学	山敷教授	環境
21	12/12	奈良教育大学	森本教授	開発
22	1/9	創価大学	中山教授	平和
23	1/16	創価大学	中山教授	平和
24	1/23	創価大学	中山教授	平和
25	1/30	タナカバナナ	登氏	開発
26	2/6	JAE	塩見氏	人権
27	2/13	毎日新聞社	鳴神氏	人権

【平和：「貧困・開発・平和」を考える】

2019 年 5 月 30 日(木)、6 月 6 日(木)、20 日(木)　講師：創価大学平和問題研究所　石井秀明　教授

世界の軍事費の現状や、国連が提起する SDGs が制定された背景や、人間開発を優先させ、軍縮を通して軍事化と貧困の連鎖を断ち切る重要性を教えて頂いた。世界平和のために、多角的なアプローチが必要であることや、「人間の安全保障」との考え方を広げていくこと、「平和の文化」を創出していくことの重要性について学んだ。

【振り返り】

2019 年 6 月 13 日(木)

【経済学】

2019 年 7 月 10 日(水)、11 日(木)、12 日(金)　講師：東京大学大学院　藤井大輔特任講師

経済学とは、「限られた資源を最適に使う人間の行動を研究する学問」であり、日常のいたるところに経済学があることを、様々な実例を通して、教えて頂いた。また、ノーベル賞受賞者の素顔を紹介。受賞者の共通点として、学問への情熱や飽くなき探求心を挙げた。

【開発】

2019 年 7 月 18 日(木)　講師：日本政策金融公庫　足立秀機　氏

日本政策金融公庫が実施する、高校生ビジネスプラン・グランプリの応募に向けて、実施可能なプランのつくり方を学んだ。

【人権：世界遺産学習会】

2019 年 9 月 5 日(木)　講師：大阪府教育庁文化財保護課　福田英人　氏

百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産に登録されるまでの取り組みと、今後の方向性についてのお話をお聞きした。

【開発】

2019 年 9 月 12 日(木)、19 日(木)、10 月 17 日(木)　講師：創価大学経済学部　西浦昭雄　教授

開発経済学、アフリカ経済論がご専門で、アフリカの貧困問題を解決していきたいと研究されており、世界の現状と SDGs 達成のためのヒントを数多く教えて頂いた。

【環境】

2019 年 10 月 24 日(木)、11 月 14 日(木)、21 日(木)　講師：京都大学大学院総合生存学館　山敷庸亮教授

奇跡的な惑星である地球の環境を守るために、どう行動すればよいのか、一体何が平和なのかを考えさせられる講義となった。

【人権】

2019 年 10 月 31 日(木)　講師：大日本住友製薬株式会社による出張授業

「科学技術と人の幸せ～“いのち”の大切さを考える～」と題して、遺伝子診断をテーマに、いのちについて皆で考える授業となった。

【人権】

2019 年 11 月 7 日(木)　講師：京都大学　学びコーディネーター　土田亮　氏

京都大学大学院総合生存学館より、土田亮氏をお迎えして、「文系と理系の間：課題解決型の研究のすすめ」のテーマで講義を行って頂いた。

【開発】

2019 年 12 月 12 日(木)　講師：奈良教育大学　森本弘一　教授

カンボジアにおける生物教育の支援に携わってこられた森本教授をお迎えした。カンボジアでは 1970 年代の内戦により、教育システムが崩壊したため、長期間、学校が閉鎖されていた。内戦が終わった後も、教員研修のシステムが整っていなかったことから、カンボジアでの教員養成プログラムに携わってこられた経験を通して、学ぶことができることへの素晴らしさを教えて頂いた。

【平和】

2020 年 1 月 9 日(木)、16 日(木)、23 日(木)　講師：創価大学　中山雅司　教授

国際法、国際機構論、平和学がご専門で、世界を取り巻く現状と、平和な世界を築くためには何が必要かを深く考える授業となった。

【開発】

2020 年 1 月 30 日(木)　講師：株式会社タナカバナナ　登和麻　取締役

「バナナから見た世界」と題し、持続可能な開発とは具体的にどのような開発なのかをお話して頂いた。実際に様々な種類のバナナを持ってきてくださり、世界を身近に感じる講義となった。

【人権】

2020 年 2 月 6 日(木)　講師：JAE　塩見優子　氏

キャリア教育コーディネーターとして、学校と地域、企業をつなぐお仕事をされており、変化の大きな時代を生きるために、どのような力が必要かを学んだ。

【人権】

2020 年 2 月 13 日(木)　講師：毎日新聞社　鳴神太平　記者

「新聞で学ぶ多様な考え方」と題し、新聞記者の仕事についてや、報道の使命についてお話をしてくださった。

◆UP クラスの様子◆

◆年度末アンケートより◆

2 月、受講生徒を対象にアンケートを実施。

【生徒の感想】

・講師の方が学生時代の苦労した時期を乗り越えて、大学に進学し、夢を実現されている姿を通して、改めて自分だけにしか果たせない使命は何なのだろうかと考えながら、日々勉学に励んでいこうと思いました。また、自分らしく挑戦していくことの大切さを学びました。

・私たちの今の学習環境がいかに恵まれているかをひしひしと感じるとともに、学ばせて頂いていることへの感謝と、もっと学んで、学びたくても十分に学べない子どもたちがいるような今の世界の現状をかえていける人材になりたいと思いました。

・自分もまだまだ、諦めてはいけないし、自分にしかできないことを見つけようと改めて、前を向くことができました。

自分自身の変化についての５つの質問項目を 1～4 の 4 段階(値が大きいほど強い)で答えてもらった。以下の表がその結果である。

	4	3	2	1
1. 自分自身が成長した、視野が広がったと感じる。	75%	25%	0%	0%
2. 世界で起こっている様々な問題への関心が高まった。	94%	6%	0%	0%
3. 国連が提唱する SDGs の理解が深まった。	63%	37%	0%	0%

4.ものごとを色々な角度から見たり、考えたりすることができるようになった。	63%	37%	0%	0%
5.地域社会や国際社会に貢献していきたいという気持ちが強まった。	94%	6%	0%	0%

「3.国連が提唱するSDGsの理解が深まった」については、2016年度の年度末アンケートで、高評価（3もしくは4）が75%と全体の4分の3にとどまった反省を生かし、GRITや高校1年生の地理の授業でもSDGsの学習の機会を大幅に増やした。「4. ものごとを色々な角度から見たり、考えたりすることができるようになった」についても、多角的な視点を養うという観点で実施する授業が増えてきたことから、2018年度は高評価（4）が63%となった。

3.と4. 以外の4項目についてはほぼ全員が高評価であった。特に「2. 世界で起こっている様々な問題への関心が高まった」と「5. 地域社会や国際社会に貢献していきたいという気持ちが強まった」は高評価（4）が94%であり、生徒たちのものの見方や考え方を広げることに成功したと自負したい。

SGHの指定終了後となる来年度以降も、UPクラスの実施方法について検討を重ね、さらによりよいものにしていきたい。

成果と分析

1. 2019 年度卒業の海外大学進学者数　16 名（３月現在）

アメリカ創価大学　（ブリッジプログラム含む）

ハワイ大学、チヤップマン大学、ハンガリー国立センメルワイス大学、ハンガリー国立ペーチ大学

ハンガリー国立セゲド大学

2. 2019 年度主な外部コンクール（全国大会）での活躍

日米露３国による核不拡散会議

「世界津波の日」高校サミット in 北海道

第 9 回「ESD 国際交流プログラム」ドイツ・フランス交流プログラム参加（全国 8 名中）

第 22 代「高校生平和大使」大阪代表として国連欧州本部訪問（全国 20 名中）

第 66 回「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」大阪代表

SGH 甲子園 2019「ポスターセッション部門」「プレゼンテーション部門」出場

第 12 回クムホ・アシアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会　全国大会出場

プラン・インターナショナル夏休み読書感想文コンクール 2019 高校生の部最優秀賞受賞

内閣府及び各地方自治体主催・心の輪を広げる体験作文(高校生部門）内閣府特命担当大臣賞受賞

3. 英語外部検定成績

英語能力検定試験合格者数（単位：人）

2015 年度	１級	準１級	２級	２級以上
1069 名中	2（0.2%）	16（1.5%）	263（24.6%）	281（26.3%）
2019 年度	１級	準１級	２級	２級以上
1054 名中	8（0.75%）	35（3.3%）	378（35.8%）	421（39.9%）

各学年における英語能力検定試験合格者数（単位：人）

2019 年度英検合格(3 月現在)TOEIC 含まない	1級	準1級	2級	準2級	3級以下	在校生徒
高校 3 年(H45 期)	6	22	173	68	81	350
高校 2 年(H46 期)	0	10	148	118	75	351
高校 1 年(H47 期)	2	3	57	102	189	353
合計	8	35	378	288	345	1054

高校45期　英語成果報告(最終)

2020/3/12 45期英語教科担当

1. CEFR/ TOEIC/ 英検　レベル別人数

CEFR	TOEIC	12月	英検	1年次3学期	2年次3学期	3年次3学期
C1(945～)	900-990	1	1級	1	2	6
B2 (785～)	800-899	5	準1級	3	13	22
	700-799	7				
B1 (550～)	600-699	14	2級	82	120	173
	500-599	33				
A2 (225～)	400-499	47	準2級	108	78	68
	300-399	68				
	200-299	51				
A1(120～)	100-199	2	3級以下	156	137	81
	10-99	0				
計		228		350	350	350

＊英検の合格者数は、1次試験のみの合格者数も含む。

＊2級以上の最終合格者数は、1級5＋準1級20＋2級140＝165名

2. SGH 英語到達目標　達成度

45期B1以上到達度	57%

○英検1級、準1級、2級の1次試験合格者もしくはTOEIC IPの
リスニングもしくはリーディングもしくはその両方で
275点以上の場合、CEFRのB1レベル以上とする
○この内、B2レベルは22名、C1レベルは6名となります。

3. アメリカ創価大学合格者　人数及びSATスコア

					※各セクション200-800 Reading & Writing	Math
Early出願者	6	Early合格者	5			
Regular出願者	14	Regular合格者	1	800-700	0	11
		Bridge合格者	10	699-600	4	8
		合格者　計	16	599-500	8	0
				499-400	6	0

3.1. 英語の成果報告

SGH 初年度(2015 年度)と今年度(2019 年度)の全校生徒における、「英語能力検定試験合格者数」の 2 級以上の合格者数について分析してみた。1 級の人数は 2 人→8 人、準 1 級は 16 人→35 人、2 級は 263 人→378 人へと大きく変容した。2 級以上の人数に関しては、281 人（26.3%）→421 人(39.9%)と大きな伸びを示した。最高学年にあたる高校 3 年生においては、2 級以上の%は学年全体の 57%まで向上した。全校生徒を対象に SGH プログラムを実施する本校においては、上位層を伸ばすのはもちろん、下位層(3 級以下)の減少にも力を注いできた。「各学年における英語能力検定試験合格者数」における各学年の 3 級以下の人数は、学年が上がるごとに、人数が減少している。また、高校 3 年生(45 期生)の 1 年次から 3 年次までの 3 級以下の人数の推移を見ても、間違いなく本校の 3 年間において下位層の減少が見られ、全校的な英語能力の向上がはかれた。

関西創価高校SGH　GRIT高校45期アンケート結果

1年289(男147、女142)、2年296(男145、女151)、3年258(男123、女135)

問1.　国連が推進するＳＤＧｓを知っていますか。

	①知っている	②少し知っている	③あまり知らない	④全然知らない
(入学前)1年	8.5%	10.9%	18.3%	62.3%
(終了時)1年	46.1%	36.6%	10.9%	6.3%
2年	70.8%	15.9%	9.2%	4.1%
3年	78.3%	16.3%	2.7%	2.7%

問1a.　次のどのことから、国連が推進するＳＤＧｓを知りましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
90.2%	36.9%	50.0%	17.6%	25.0%
⑥創立者の提言	⑦UP・LC	⑧友人や先輩の話		
29.9%	19.3%	9.4%		

問2.　世界で起こっている環境問題について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	20.1%	36.6%	32.0%	11.3%
(終了時)1年	46.8%	29.9%	20.4%	2.8%
2年	42.4%	32.9%	19.3%	5.4%
3年	49.6%	36.0%	10.5%	3.9%

問2a.　次のどのことから、世界で起こっている環境問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
63.8%	60.6%	36.7%	15.8%	23.5%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
17.2%	6.8%			

問2b.　どうして世界で起こっている環境問題について関心を持たなかったのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分は無力だから	③自分には関係ないから	④環境問題は無くならないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
27.0%	43.2%	10.8%	16.2%	18.9%
⑥内容が難しそうだから	⑦大きな問題ではないから			
27.0%	2.7%			

問3.　世界で起こっている開発の現状や問題点について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	14.1%	27.5%	40.1%	18.3%
(終了時)1年	39.8%	27.8%	29.6%	2.8%
2年	37.3%	26.8%	29.8%	6.1%
3年	40.3%	36.4%	20.2%	3.1%

問3a.　次のどのことから、世界の開発の現状や問題点について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
55.6%	54.5%	38.9%	17.7%	25.3%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
15.2%	9.1%			

問3b.　どうして世界の発展途上国における開発の現状や問題点について関心を持たなかったのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分は無力だから	③自分には関係ないから	④豊かになるためには仕方がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
18.3%	40.0%	15.0%	3.3%	18.3%
⑥内容が難しそうだから	⑦大きな問題ではないから			
40.0%	1.7%			

問4. 世界で起こっている人権問題について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	18.0%	30.3%	37.7%	14.1%
(終了時)1年	37.7%	33.1%	25.4%	3.9%
2年	39.0%	27.1%	29.5%	4.4%
3年	41.5%	37.6%	16.3%	4.7%

問4a. 世界で起こっている人権問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
60.8%	62.7%	34.8%	15.7%	23.0%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.7%	11.8%			

問4b. どうして世界で起こっている人権問題について関心を持たなかったのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分は無力だから	③自分には関係ないから	④人権問題はどこにでもあることだから	⑤自分が生きることで精一杯だから
9.3%	46.3%	18.5%	13.0%	25.9%
⑥内容が難しそうだから	⑦大きな問題ではないから			
31.5%	1.9%			

問5. 世界で起こっている紛争や平和に向けての活動について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	27.8%	35.6%	27.8%	8.8%
(終了時)1年	45.8%	29.6%	21.5%	3.2%
2年	48.8%	24.1%	23.1%	4.1%
3年	49.6%	32.9%	14.0%	3.5%

問5a. 次のどのことから、世界で起こっている紛争や平和への活動について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
55.4%	65.3%	43.2%	16.9%	27.7%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
16.0%	8.5%			

問5b. どうして世界で起こっている紛争や平和への活動について関心を持たなかったのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分は無力だから	③自分には関係ないから	④人権問題はどこにでもあることだから	⑤自分が生きることで精一杯だから
15.6%	48.9%	20.0%	15.6%	15.6%
⑥内容が難しそうだから	⑦殺しあうことを考えたくもないから			
35.6%	6.7%			

問6. 世界の初等教育問題について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
3年	41.9%	33.7%	19.8%	4.7%

問6a. 次のどのことから、世界の初等教育問題について関心を持ちましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
73.8%	51.3%	39.5%	11.3%	20.5%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
14.9%	10.3%			

問7. 核兵器廃絶について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	30.6%	33.5%	27.1%	8.8%
(終了時)1年	50.7%	27.1%	19.0%	3.2%
2年	47.5%	25.4%	22.4%	4.7%
3年	48.4%	30.6%	17.4%	3.5%

問7a. 次のどのことから、核兵器廃絶について関心を持ちましたか。（複数回答可）

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
49.0%	58.8%	37.3%	21.1%	26.5%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
22.1%	9.8%			

問7b. どうして核兵器廃絶について関心を持たなかったのですか。（複数回答可）

①面倒くさいから	②自分は無力だから	③自分には関係ないから	④核兵器は必要だから	⑤自分が生きることで精一杯だから
11.1%	42.6%	9.3%	11.1%	14.8%
⑥内容が難しそうだから	⑦今まで使われていないから			
31.5%	3.7%			

問8. 国際的な合意形成の方法について関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	4.9%	9.5%	41.2%	44.4%
(終了時)1年	10.9%	20.8%	46.8%	21.5%
2年	17.3%	18.6%	49.8%	14.2%
3年	26.4%	32.6%	29.8%	11.2%

問8a. 次のどのことから、国際的な合意形成の方法について関心を持ちましたか。（複数回答可）

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
49.3%	52.6%	28.3%	15.8%	20.4%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
12.5%	9.2%			

問8b. どうして国際的な合意形成について関心を持たなかったのですか。（複数回答可）

①面倒くさいから	②自分には苦しむ人を救えないから	③自分の国が平和だから	④語学力がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
11.3%	14.2%	9.4%	25.5%	20.8%
⑥自分には関係ないから	⑦自国の利益が最優先だから	分からないから		
11.3%	2.8%	14.2%		

問9. 国際的な合意形成の難しさを認識していますか。

	①認識している	②少し認識している	③あまり認識していない	④全く認識していない
(入学前)1年	11.3%	12.7%	45.4%	30.6%
(終了時)1年	28.2%	16.9%	40.8%	14.1%
2年	28.1%	15.3%	42.0%	14.6%
3年	47.7%	24.8%	19.4%	8.1%

問9a. 国際的な合意形成を成功させるには、どのような能力が必要と感じましたか。（３つまで複数回答可）

①語学力	②異文化理解力	③リーダーシップ	④使命感	⑤共感力
43.3%	58.3%	19.3%	15.0%	37.4%
⑥ディベート力	⑦誠実な姿勢	⑧幅広い知識	⑨したたかさ	
13.9%	42.8%	25.7%	2.7%	

問10. 将来留学したいと思っていますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	21.8%	32.7%	22.9%	22.5%
(終了時)1年	31.7%	33.8%	22.2%	12.3%
2年	36.3%	35.9%	16.3%	11.5%
3年	41.1%	37.2%	13.2%	8.5%

問11. 将来海外で活躍したいと思いますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	20.8%	34.9%	27.1%	17.3%
(終了時)1年	26.8%	36.6%	26.8%	9.9%
2年	22.4%	35.6%	31.9%	10.2%
3年	27.5%	36.8%	26.4%	9.3%

問11a. 将来海外でどのような立場で活躍したいと思いますか。(複数回答可)

①国連職員・国際機関	②NPOやNGO団体	③グローバル企業	④医療関係	⑤教育関係
9.8%	11.8%	24.8%	13.7%	14.4%
⑥科学者・研究者	⑦企業・実業家			
8.5%	17.0%			

問11b. どうして海外で活躍したいと思わないのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分には苦しむ人を救えないから	③海外は危険だから	④語学力がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
19.6%	6.5%	27.2%	40.2%	18.5%
⑥平凡なままでいいから	⑦自国の中で頑張りたいから			
16.3%	53.3%			

問12. 将来、国際機関(UNDP、国連他)に関わる仕事がしたいと思いますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	5.3%	20.8%	39.4%	34.5%
(終了時)1年	8.1%	27.5%	37.0%	27.5%
2年	7.1%	20.7%	44.4%	27.8%
3年	8.9%	26.0%	32.9%	32.2%

問13. 世界の平和に貢献したいと思いますか。

	①絶対にしたい	②できればしたい	③あまりしたくない	④したくない
(入学前)1年	33.8%	50.7%	12.3%	3.2%
(終了時)1年	47.2%	38.0%	12.3%	2.5%
2年	44.1%	37.6%	14.6%	3.7%
3年	44.2%	45.3%	6.2%	4.3%

問13a. 次のどのことから、世界の平和に貢献したいと思いましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
48.1%	55.4%	40.3%	17.3%	24.7%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
13.9%	14.3%			

問13b. どうして世界の平和に貢献したいと思わないのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分には苦しむ人を救えないから	③海外は危険だから	④語学力がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
25.9%	25.9%	18.5%	29.6%	33.3%
⑥世界は平和にはならないから	⑦自分の周りは平和だから			
3.7%	14.8%			

問14. 海外で通用する語学力は必要であると思いますか。

	①絶対に必要だと思う	②必要だと思う	③あまり必要ではないと思う	④必要ではない
(入学前)1年	47.9%	38.0%	10.9%	3.2%
(終了時)1年	65.5%	25.4%	7.0%	2.1%
2年	58.6%	30.8%	8.1%	2.4%
3年	56.6%	34.5%	6.6%	2.3%

問14a. 次のどれから、海外で通用する語学力は必要であると感じるようになりましたか。(複数回答可)

①フィールドワーク	②Global Camp	③海外の方の講演	④海外の方と話して	⑤授業
26.0%	32.3%	29.4%	45.5%	45.5%
⑥友人や先輩の話	⑦UP・LC			
28.5%	13.2%			

問14b. どうして世界の平和に貢献したいと思わないのですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②国内を出ないから	③必要と感じないから	④語学が嫌いだから	⑤AIが発達するから
8.7%	30.4%	30.4%	8.7%	39.1%

問15. 世界で起こるニュースに対する関心は高まりましたか。

	①関心が高まった	②少し高まった	③あまり高まらなかった	④全然高まらなかった
(入学前)1年	15.8%	33.5%	39.4%	11.3%
(終了時)1年	40.1%	37.3%	19.4%	3.2%
2年	39.3%	33.9%	22.0%	4.7%
3年	41.1%	41.9%	12.8%	4.3%

問15a. 次のどのことから、世界で起こるニュースに対する関心は高まりましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②TV・新聞・ニュース	③授業	④フィールドワーク	⑤ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙｼﾁｽﾞﾝｼｯﾌﾟｾﾐﾅｰ
46.3%	66.8%	43.5%	15.4%	23.4%
⑥UP・LC	⑦友人や先輩の話			
13.1%	9.3%			

問16. グローバルイシューに対する関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	13.7%	25.0%	42.6%	18.7%
(終了時)1年	39.1%	30.3%	25.7%	4.9%
2年	32.9%	33.9%	29.2%	4.1%
3年	37.6%	43.0%	14.3%	5.0%

問17. グローバルイシューに自分が関わりたいと思っていましたか。

	①絶対に関わりたい	②関わりたい	③あまり関わりたくない	④関わりたくない
(入学前)1年	8.5%	23.6%	48.9%	19.0%
(終了時)1年	16.9%	34.2%	41.5%	7.4%
2年	17.8%	51.8%	28.9%	3.6%
3年	23.6%	54.8%	18.3%	3.4%

問17a. グローバルイシューに自分が関わりたいと思った理由は何ですか。(複数回答可)

①他国で起こることは自分と関係があると感じた	②苦しむ人を救いたい	③世界平和に貢献したい	④自分の可能性を試したい
61.3%	63.2%	67.5%	18.4%

問17b. グローバルイシューに自分が関わりたくないと思った理由は何ですか。

①他国で起こることだから	②自分には苦しむ人を救えないから	③世界平和なんて大きすぎるから	④自分や家族に危険が及ぶかもしれないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
11.1%	8.9%	24.4%	6.7%	48.9%
⑥自分には関係ないから	⑦自分の利益を優先したいから			
0.0%	6.7%			

問18. 日本や世界の歴史に関心がありますか。

	①関心がある	②少し関心がある	③あまり関心がない	④全然関心がない
(入学前)1年	24.6%	26.1%	32.0%	17.3%
(終了時)1年	32.0%	30.3%	29.6%	8.1%
2年	39.7%	30.8%	24.4%	5.1%
3年	39.5%	33.7%	20.2%	6.6%

問19. 身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありましたか。

	①ある	②少しある	③あまりない	④ない
(入学前)1年	13.4%	38.4%	38.4%	9.9%
(終了時)1年	22.9%	46.8%	22.5%	7.7%
2年	23.1%	43.4%	27.5%	6.1%
3年	28.3%	53.9%	14.7%	3.1%

問19a. 身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちを持った理由は何ですか。(複数回答可)

①身近な問題が世界につながると感じたから	②まず行動することが大事だと思うから	③さまざまな体験をしたから（失敗や成功）	④人は助け合うことが大切と感じたから
51.4%	59.0%	32.1%	46.2%

問19b. 身の回りで起こる問題に自分が関わりたくないと思った理由は何ですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分には苦しむ人を救えないから	③忙しいから	④自分に被害がが及ぶかもしれないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
43.5%	19.6%	13.0%	23.9%	30.4%
⑥自分には関係ないから	⑦自分の利益を優先したいから			
8.7%	6.5%			

問20. 他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか。

	①ある	②少しある	③あまりない	④ない
(入学前)1年	37.0%	37.3%	18.3%	7.4%
(終了時)1年	50.7%	34.2%	10.6%	4.6%
2年	54.2%	30.8%	12.5%	2.4%
3年	55.8%	34.9%	6.2%	3.1%

問20a. 他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちを持った理由は何ですか。(複数回答可)

①人に支えてもらったことがあるから	②人は助け合うことが大切と感じたから	③心を合わせることが大切だから	④クラブや諸活動
67.5%	66.2%	41.0%	45.3%

問20b. 身の回りで起こる問題に自分が関わりたくないと思った理由は何ですか。(複数回答可)

①面倒くさいから	②自分が第一だから	③嫌な思いをしたことがあるから	④自分には力がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
29.2%	20.8%	12.5%	25.0%	37.5%
⑥受験で精一杯だから	⑦余計なお世話だと思うから			
8.3%	20.8%			

問21. ディスカッション能力(対話力)は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	13.4%	47.9%	31.3%	7.4%
2年	15.6%	45.1%	28.8%	10.5%
3年	24.0%	51.6%	18.2%	6.2%

問21a. 次のどの場面で、ディスカッション能力(討議力・対話力)が向上したと感じますか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UP・LC
72.3%	47.2%	50.8%	48.2%	11.8%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
35.4%	11.8%			

問21b. ディスカッション能力（討議力・対話力）が向上した理由は何ですか？（複数回答可）

①相手の話を聞くようになった（受容）	②知識や語彙（ごい）が増えた（知性）	③相手の立場に立つようになった（共感力）	④たくさんの人と話す機会が増えた（経験）	⑤自分の生き方が前向きになった（使命感）
66.7%	47.7%	52.8%	65.6%	28.7%
⑥感情をコントロールできるようになった	⑦発想力が豊かになった（創造力）			
31.3%	39.0%			

問22. 英語の全般的な能力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	13.7%	37.3%	38.0%	10.9%
2年	14.9%	39.7%	32.5%	12.9%
3年	19.0%	36.8%	33.3%	10.9%

問23. 語学習得に挑戦したいという意欲は向上しましたか

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	35.9%	32.7%	23.6%	7.7%
2年	29.2%	40.3%	24.1%	6.4%
3年	36.4%	37.6%	18.2%	7.8%

問23a. 次のどの場面で、語学習得に挑戦したいという意欲は向上しましたか。（複数回答可）

①フィールドワーク	②Global Camp	③海外の方の講演	④海外の方と話して	⑤授業
30.4%	38.7%	27.2%	43.5%	51.3%
⑥友人や先輩の話	⑦UP・LC			
27.2%	13.6%			

問23b. どうして語学習得に挑戦したいと思わないのですか？（複数回答可）

①面倒くさいから	②授業が面白くないから	③必要性を感じないから	④自分には力がないから	⑤自分が生きることで精一杯だから
23.9%	29.9%	10.4%	35.8%	16.4%
⑥受験で精一杯だから	⑦クラブなど他にやることがあるから			
4.5%	10.4%			

問24. プレゼンテーション能力について（発表する表現力）は向上しましたか

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	13.0%	41.5%	34.5%	10.9%
2年	19.7%	40.0%	31.9%	8.5%
3年	29.8%	48.8%	15.1%	6.2%

問24a. 次のどのような場面で、プレゼンテーション能力(発表する表現力)が向上したと感じますか。(複数回答可)

①GRIT	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UPやLC
73.9%	42.4%	64.0%	21.7%	8.4%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
10.8%	9.4%			

問25. ＩＣＴ（タブレット、PCなど）の活用力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	32.4%	42.6%	19.4%	5.6%
2年	33.2%	36.3%	23.4%	7.1%
3年	35.7%	43.4%	13.6%	7.4%

問25a. 次のどのような場面で、ICT（タブレット、PCなど）の活用力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①GRIT	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UPやLC
71.6%	48.0%	71.6%	33.8%	11.3%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
9.3%	10.8%			

問26. 自分と意見の違う人の話や考え方を認める力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	24.3%	54.2%	16.5%	4.9%
2年	28.1%	47.1%	19.3%	5.4%
3年	41.9%	44.6%	8.1%	5.4%

問26a. 自分と意見の違う人の話や考え方を認める力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①相手に対する共感力が増したから	②多様性を認める心が芽生えたから	③話を聞くことの大切さを知ったから	④答えは一つではないから	⑤さまざまな体験をしたから(失敗や成功)
62.8%	57.0%	54.7%	52.5%	41.7%
⑥協調性の必要性を学んだから				
37.7%				

問27. グループで活動するときにグループをまとめ課題を進める力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	14.4%	38.0%	41.9%	5.6%
2年	15.3%	42.4%	34.9%	7.5%
3年	22.1%	53.1%	19.4%	5.4%

問27a. 次のどのような場面で、グループをまとめ課題を進める力が向上したと感じましたか。(複数回答可)

①ＧＲＩＴ	②学校行事	③授業	④クラブや班活動	⑤UP・LC
67.0%	39.7%	55.7%	40.7%	9.3%
⑥友人や先輩との話	⑦フィールドワーク			
12.4%	10.3%			

問28. 何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力は向上しましたか。

	①大変に向上した	②向上した	③あまり向上していない	④向上していない
1年	21.8%	51.4%	21.1%	5.6%
2年	25.1%	45.4%	24.1%	5.4%
3年	32.6%	48.4%	14.3%	4.7%

問28a. 何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力が向上した理由は何ですか。(複数回答可)

①さまざまな体験をしたから(失敗や成功)	②答えは一つではないから	③協力すれば道が開けることを知ったから	④先輩や仲間の姿を見て	⑤困難を乗り越えた時に大きな結果が出ると知った
71.8%	41.6%	41.1%	45.0%	45.9%
⑥努力と信念の大切さを知った				
44.0%				

問29. あなたはGRITに積極的に取り組みましたか

	①積極的	②ほぼ積極的	③ほぼ消極的	④消極的
1年	22.5%	54.2%	18.0%	5.3%
2年	27.5%	50.2%	17.6%	4.7%
3年	38.8%	47.7%	11.2%	2.3%

問30. GRITに取り組んだあなたのクラスを評価してください

	①積極的	②ほぼ積極的	③ほぼ消極的	④消極的
1年	26.8%	56.7%	13.4%	3.2%
2年	34.9%	48.5%	13.6%	3.1%
3年	44.2%	44.2%	8.5%	3.1%

問31. GRITのプログラムを全体で評価してください

	①大変によかった	②よかった	③よくなかった	④まったくよくなかった
1年	20.1%	64.8%	11.6%	3.5%
2年	22.0%	59.3%	14.6%	4.1%
3年	32.2%	55.0%	7.8%	5.0%

問32. GRITの内容に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	27.5%	43.7%	23.6%	5.3%
2年	30.8%	45.1%	17.3%	6.8%
3年	35.3%	47.7%	11.6%	5.4%

問33. GRITでの友人の意見や姿に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	24.3%	46.8%	23.6%	5.3%
2年	32.5%	45.4%	16.9%	5.1%
3年	37.2%	46.1%	11.6%	5.0%

問34. 今までのグローバルシチズンシップセミナーの内容に触発されることはありましたか

	①大変にあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	22.2%	42.3%	27.1%	8.5%
2年	30.2%	41.4%	20.7%	7.8%
3年	25.2%	43.8%	22.9%	8.1%

問35. 今年度のグローバルシチズンシップセミナーの内容はよかったですか

	①大変によかった	②よかった	③よくなかった	④まったくよくなかった
1年	25.7%	57.4%	12.0%	4.9%
2年	32.2%	49.5%	14.2%	4.1%
3年	24.0%	55.4%	14.0%	6.6%

問36. GRITや本校のSGHの取り組みは、あなたの進路に影響があったと思いますか。

	①大いにあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	15.1%	34.9%	31.7%	18.3%
2年	19.7%	30.8%	32.5%	16.9%
3年	23.3%	35.7%	28.7%	12.4%

問37. 大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望します（しました）か

	①強く希望する	②希望する	③あまり希望しない	④希望しない
1年	36.6%	29.6%	19.0%	14.8%
2年	34.2%	32.2%	18.6%	14.9%
3年	37.6%	35.3%	15.1%	12.0%

問38. 海外大学（ＳＵＡ含む）への進学、海外大学院(大学卒業後)への進学を希望しますか

	①強く希望する	②希望する	③あまり希望しない	④希望しない
1年	11.3%	10.9%	33.5%	44.4%
2年	9.5%	10.5%	29.5%	50.5%
3年	14.0%	11.2%	34.1%	40.7%

問39. GRITや本校のSGHの取り組みを通して、成長できたと思いますか

	①大いにできた	②できた	③あまりできなかった	④まったくできなかった
1年	23.9%	55.6%	14.8%	5.6%
2年	25.8%	50.5%	15.6%	8.1%
3年	33.3%	52.7%	8.5%	5.4%

問40. GRITや本校のSGHの取り組みはあなたの考え方や行動に影響をあたえましたか

	①大いにあった	②あった	③あまりなかった	④まったくなかった
1年	23.9%	47.9%	20.4%	7.7%
2年	27.8%	42.7%	20.7%	8.8%
3年	37.2%	43.8%	13.6%	5.4%

問41. 今年の創立者の平和提言は読みましたか

	①読んだ	②少し読んだ	③これから読む	④読まない
1年	50.7%	32.0%	10.2%	7.0%
2年	19.7%	39.0%	29.2%	12.2%
3年	36.4%	30.6%	20.2%	12.8%

問42. あなたの取得している英語技能検定は何級ですか

	①準1級以上	②2級	③準2級	④３級以下	⑤もっていない
1年	1.1%	26.8%	35.6%	26.4%	10.2%
2年	3.4%	36.6%	29.2%	21.7%	9.2%
3年	8.5%	50.8%	20.2%	11.2%	9.3%

問43. 入学してから今までに何回海外に渡航しましたか

	①0回	②1回	③2回	④3回	⑤4回以上
1年	83.1%	10.6%	2.8%	1.1%	2.5%
2年	79.0%	12.2%	5.1%	1.7%	2.0%
3年	74.8%	13.2%	7.8%	1.9%	2.3%

問44. 高校２年次の探究活動（創価大学でのプレゼン）で培った力は何ですか。（複数回答可）

①リサーチ能力	②発表力	③交渉力	④仲間を思いやる気持ち	⑤行動力
71.3%	69.8%	18.2%	29.8%	38.8%
⑥真剣さ・情熱	⑦根性	⑧世界を俯瞰する力	⑨リーダーシップ	⑩使命感
34.1%	24.8%	19.4%	23.3%	27.9%
⑪共感力	⑫問題解決への創造力	⑬論理的思考	⑭ｸﾘﾃｨｶﾙｼﾝｷﾝｸﾞ	
29.1%	42.2%	30.6%	24.4%	

問45. 高校3年次の「模擬国連」で培った力は何ですか。（複数回答可）

①リサーチ能力	②発表力	③交渉力	④仲間を思いやる気持ち	⑤行動力
64.7%	44.6%	61.6%	32.2%	55.0%
⑥真剣さ・情熱	⑦根性	⑧世界を俯瞰する力	⑨リーダーシップ	⑩使命感
37.6%	29.5%	24.0%	27.1%	30.2%
⑪共感力	⑫問題解決への創造力	⑬論理的思考	⑭ｸﾘﾃｨｶﾙｼﾝｷﾝｸﾞ	
36.0%	41.9%	34.5%	20.9%	

問46. 学年模擬国連は継続してほしいですか。

	①ぜひ継続してほしい	②どちらかといえば継続してほしい	③どちらかといえば継続してほしくない	④継続してほしくない
3年	56.2%	32.2%	5.8%	5.8%

生徒アンケート自由記述分（抜粋）

◯環境問題について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・GRIT で気候変動のことを学んで、こまめに電気を消したり、水の無駄遣いに気を付けるようになった
・自分達が普段あたりまえに食べている食事が世界では当たり前ではないことを改めて深く知り、食品ロスにならないように残さず食べるようになった
・地球サミットのスピーチを聞こうと思った
・企業の取り組みに関心を持つようになった
・水質汚染がこれ以上深刻にならないために、水質汚染の原因となる物質が少ない洗剤を使うようにした
・貧困で苦しむ人たちを救いたいと思い始め、いつか自分の稼いだお金を募金しようと決めた
・調べ学習で海洋プラスチックのことを知り、ビニール袋をスーパーやコンビニでもらわなくなった
・GRIT を通してご飯も満足に食べれず死んでいく人たちの存在を知り、ごはんをなるべく残さないように意識するようになった
・節電に気をつけるようになった
・ゴミの分別や正しい処理についての関心が高まった

◯開発について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・フェアトレードの商品を気にして買うようになった
・環境汚染を減らしたいなと思い無駄な水を使うのをやめた
・国によって様々な開発の問題を抱えていることを学び、日々の世界のニュースにより関心を持つようになりました。
・一人でも多くの途上国の方や、立場の弱い方が質の良い生活を送ってほしいという気持ちが芽生え、募金や自分に出来ることを探すようになりました。
・まだまだ電気や水道のインフラ設備が整っていない国がたくさんあることを知り、積極的に開発に関する新聞記事等に目を通すようになった
・発展途上国で「学びたい」と語る子どもたちの姿に衝撃を受け、自分が学べることに感謝できるようになりました。
・発展途上国の子どもたちのためにはどうしたらいいのか考え、食べ物を無駄にしないようにしようと思い、家にあるものをなるべく食べるようになった
・チョコを買うときフェアトレードを思い起こす
・将来青年海外協力隊として活動してみたいと思うようになった

◯人権問題について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・全員が平等な世界になりたいと思い、人権のニュースや思想家の動画を見るようになった
・人権は大事だと思い、迂闊な発言をしないようにした
・戦争などで無罪の人が殺されているのを知り、人類が不平等すぎると感じた。普段の学校生活の中でも、人によって態度を変えるなど、あってはならないことを見つけたときは、自分から声かけするようにしている
・相手の立場にたったり、人の意見をちゃんと聞くようになった
・まだまだ多くの問題があるのを知ってまずは相手を尊敬することが大切だと思った
・学園にも女性に関する人権問題はあることを知り、自分の身の回りからアクションは起こせるのだと思うようになりました

・知らない間に人権を侵害してしまったり、されたりするSNSなどに気をつけようと思った
・セクシャルマイノリティの人を普通じゃない、ととらえることがナンセンスと思うようになった
・ジェンダー平等のことを学んで電車の中でゲイなどの人を見てもなんとも思わなくなった

〇紛争・平和について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・平和の歌を聞き始めた
・まだ世界では、自分が思っていた以上に、残酷な戦争が続いており、平和を担っていかなければならないと思った。まずは、世界の現状を知ることから始めようと思い、現状の問題を考察し、身近な人から平和についての対話をしたりしている
・将来のビジョンが決まった
・核抑止論のことを知って、身近な家族や友達に自分の知っている核兵器の知識を話すようになった
・内戦やデモなどで、関係ない人が巻き込まれて、命を落とすのはおかしいと思い、まずは身近な喧嘩から、暴力による解決は絶対しないと決めました
・新聞で平和についての記事を読むようになった
・核兵器禁止条約などから平和への関心がうまれ、英語への取り組みを頑張るようになった
・遠い話だと思っていたけど、無関心という第三の暴力を犯していることに気づいた
・見て見ないと分からないので実際に日本の戦争地を見に行ったりしました

〇模擬国連を行う上で苦労したこと、気を付けたことを書いてください。

・相手国の立場をわきまえながら、共通目標の達成に向けて交渉すること
・リサーチをしてもしたりないほど情報がほしいと思った。リサーチ大事
・誰かしら１人になる人がいるけれど、その人も絶対に巻き込むこと
・いかにみんなにわかりやすく伝えられるか
・ウェブで調べる時はサイトごとに違う情報が書いてあったから、確かな情報を得ることが大事
・日本語だけだと、検索しても自分の国のデータが出てこない
・運営側はたいへんでした。みなのモチベーションアップのために、楽しさを意識しました
・相手の話を聞くこと、また、それから良い行動を取ること
・自国と他国のクローズを比べ、似ているところを統合すること
・お互いに利益があるように考えたこと

〇核兵器廃絶について「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・日本が最も深く関わる問題なのになぜ日本は関わらないのかといらだちを感じるようになった
・多角的な問題がある核兵器を徹底的に調べ、少しでも減らす方法はないかと探してみた
・原爆の恐ろしさを知って廃絶の署名をしていった
・様々な核兵器に関する学びを通して、自分の行動が必ず核廃絶に繋がるのだと確信できるようになりました
・TPNWの重要性を知ってもらうゲームを学園生にやってもらった
・原爆資料館に行った

◯世界の平和に貢献したいと思いに関して「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください

・日本でも世界でも自分が思っている以上に悲惨な現状問題があり、私たちのように平和に暮らせていない人たちもいることを考えると、私たちはこんなに幸せに暮らしていていいのかとおもった。東北にいかせてもらった際、学校に帰ってきてから、皆に現状を知ってもらうために全校集会や SGH 報告会で、講義をさせてもらった

・世界が平和になるためにはお互いの状況を知ることが必要なので、他国のことについて調べるようになった

・海外に行かなくても小さなことでも世界の平和に貢献できることがあるのではないかと思う

・小学校からもともと何かしらの形で社会貢献したいと考えていた。3 年間の学びを通して、具体的にどの方面からアプローチしていきたいかを決めることができて、国公立大学受験を決めた

・他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしないとの指針で自分と相手の気持ち両方を尊重するようになった

関西創価高校SGH GRIT教員アンケート結果

実施日:2020/3/6

回答者数 37

問１．本校のＧＲＩＴプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	54.1%	45.9%	0.0%	0.0%

問２．本校のＧＲＩＴプログラムは、「生徒自ら地球的課題に挑み、解決する『使命感』を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	51.4%	43.2%	5.4%	0.0%

問３．本校のＧＲＩＴプログラムは、「世界の現状を知り、苦しみを分かち合う『共感力』向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	43.2%	51.4%	5.4%	0.0%

問４．本校のＧＲＩＴプログラムは、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての問題解決への創造力を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

	①大変によくできている	②よくできている	③あまりよくできてない	④よくできてない
回答	45.9%	45.9%	8.1%	0.0%

問５．本校のＧＲＩＴプログラムは生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	70.3%	29.7%	0.0%	0.0%

問６．あなたは本校のグローバルシチズンシップセミナーの内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	56.8%	40.5%	2.7%	0.0%

問７．本校がＳＧＨとなって、生徒のＩＣＴの取り組みが進んだと思いますか

	①大変に進んだ	②進んだ	③変わらない	④後退した
回答	59.5%	40.5%	0.0%	0.0%

問８．あなたは本校のＬＣ(ラーニングクラスター)の内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	64.9%	35.1%	0.0%	0.0%

問９．あなたは本校のＵＰ(ユニバーシティー・パートナーシップ)クラスの内容が生徒に良い影響を与えたと思いますか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	43.2%	48.6%	8.1%	0.0%

問10．あなたは教員として本校のＳＧＨプログラムに協力的でしたか

	①大変に協力的	②協力的	③あまり協力的でない	④協力的はない
回答	37.8%	59.5%	2.7%	0.0%

問11. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）の内容に触発されることはありましたか

	①大変に触発を受けた	②触発を受けた	③あまり触発されなかった	④触発されなかった
回答	43.2%	56.8%	0.0%	0.0%

問11-1. ①②と答えた人はどのような内容で触発を受けましたか?(複数回答可)

①GRITでの取り組み	②フィールドワーク	③ＵＰ	④ＬＣ	⑤グローバルシチズンシップセミナー
72.2%	33.3%	41.7%	19.4%	61.1%
⑥模擬国連	⑦生徒プレゼン			
50.0%	61.1%			

問12. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）での生徒の意見や姿に触発を受けましたか

	①大変に触発を受けた	②触発を受けた	③あまり触発されなかった	④触発されなかった
回答	45.9%	45.9%	8.1%	0.0%

問12-1. ①②と答えた人はどのような場面で触発を受けましたか?(複数回答可)

①GRITでの取り組み	②フィールドワーク	③ＵＰ	④ＬＣ	⑤グローバルシチズンシップセミナー
78.8%	39.4%	24.2%	24.2%	21.2%
⑥模擬国連	⑦生徒プレゼン			
57.6%	78.8%			

問13. GRITや本校のSGHの取り組みはあなたの教師としての考え方や行動に影響を与えましたか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	43.2%	51.4%	5.4%	0.0%

問14. 自分の授業でアクティブラーニングの要素を少しでも取り入れましたか

	①ほぼ毎回	②週１～２回程度	③学期に１～２回程度	④実施していない
回答	51.4%	24.3%	24.3%	0.0%

問15. 自分の授業に探究学習の要素を少しでも取り入れましたか

	①ほぼ毎回	②週１～２回程度	③学期に１～２回程度	④実施していない
回答	10.8%	24.3%	40.5%	24.3%

問16. ＳＧＨの諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか

	①大いに与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	29.7%	51.4%	18.9%	0.0%

問17. 自分の行っている授業の中で、GRITで活用している手法で用いたものがあれば教えてください。（１回でも構いません。複数選択可です。）

ピアエデュケーション（二人一組で話し合う）	ポスターツアー	ジグソー法	プレゼンテーション	ルーブリック評価
65.7%	14.3%	40.0%	60.0%	42.9%
ミニッツペーパー（振り返りの記入用紙）	ディベート	群読	論文作成	サマリー作成
14.3%	2.9%	11.4%	14.3%	5.7%

問22-1. 高校1年生のGRIT(四分野教育)の内容は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

	①大変に与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	53.8%	46.2%	0.0%	0.0%

問23-1. 高校2年生の探究学習の内容は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

	①大変に与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%

問24-1. 高校3年生の模擬国連の取り組み（核軍縮シュミレーション・模擬国連・論文・英語サマリ）は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

	①大変に与えた	②与えた	③あまり与えていない	④与えていない
回答	58.3%	41.7%	0.0%	0.0%

教員アンケート自由記述分（抜粋）

○あなたは教員として本校のＳＧＨプログラムに取り組む中で「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・地球市民の一員として、今自分ができることを考え、地球の実情を学ぼうとし、そのために今の立場でできる「生徒を育てる」ことを意識し、取り組むことができた。何のための授業であり、学習なのか。日々の学校生活は「世界市民教育」のためにどう必要なのか。それらのために改善していかなければならないことはなんなのかを具体的に考えることができた

・授業の中に世界の諸問題についての題材を取り入れた。HR で世界の諸問題、SDG s について様々な角度で話をした

・SDGs に自らも関心を持ち、授業や課外活動（津波サミットなど）に取り組む際に意識して取り上げるようになった

・SGH の取り組みを通して、情報をインプットするだけではなく、どのように深め、行動につなげていくかを考え、プログラムをデザインしていくことが重要であり、教師の力量が問われることを痛感しました。そのため、SDGs に関する情報などを得ると共に、効果的な手法について学び、自身の授業でも積極的に実践するように心がけました

・貧困問題に取り組んでいる NGO 団体の活動を自分でも調べるようになった

・ＳＧＨプログラムに取り組む生徒の主体的な姿勢に感動し、授業においても考えることに重点を置き、生徒の主体的な発表の場を設ける工夫をした。

○GRIT（ＳＧＨ）の生徒の意見や姿に触発され「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」ということを教えてください。

・生徒の探究活動の視点に感動した。自分の考え方の引き出しが増えた

・立派な生徒たちの姿に触発を受け、自身も生徒から学ぶ思いで生徒に相対するようになった

・生徒主導ということも大事だが、教員の積極的な働きかけが大切だとも感じた

・難しいお題で意見や作品は出てこないだろうと思っていたら、とても素晴らしいものを生徒たちが作り上げました。生徒たちの創造力をもっと信じていこうと考えが変わりました

・生徒が堂々とプレゼン発表している姿に、感動しておりました。通常の授業の成績がなかなか振るわない生徒も、プレゼン発表では、水を得た魚のように、生き生きとプレゼンをしている場面がありました。授業で数値化して測れる力は非常に限られており、本当はもっと他の力を測り、また伸ばしてあげる必要があることを実感します。社会で求められる力は、他人に自分の意見を論理立てて、説得力を持って伝え、実行する力であると思います。その力を、もっと開発できるような、それでいて、現実、生徒たちの受験合格も勝ち取れるような、そのようなタフな人材を育てていきたいと決意しました

・常にグローバルな課題を意識できるようなプログラムを考えた

・引率者としてフィールドワークの学びを通して、生徒の考え方や言動に明らかな変化や成長が見られたことを実感した。自分としては、机上での学びと現地での学びをつなげる工夫をしていこうとの意識の変化があった

○本校の目指すグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」を育むことを実現するために行った授業（研究開発）はありますか？

・共感力の必要性を感じさせるような教材を用いて授業を行った。また、「共感力の欠如」に対して対応策を考えるようなレポートの作成やそのレポートを作り方などの授業を行った

・体育の授業で、ウォーミングアップの時間をチーム毎に考えさせて行わせる主体性を学ぶ形で実施した

・統計学を概括的に学ぶ授業を 2 学期の文系のクラスで実施した。記述統計と推測統計のうち、高校生

で学習しておいた方がよいと思われる内容を選出し、授業を行った。授業用にプリントとスライドを作成した。明年度も同内容を実施できるようにするためである。授業内容に対する生徒の評価は非常に高かった。授業に対する理解度を測るため毎回の授業で Google フォームを用いた小テストを行った。その小テストには授業の感想を入力する設問も含まれていたが、その設問に対する回答は非常に好意的なものであった

・GRIT 論文のため、論理的に論じるためのアカデミックライティングを教えた。自分の論文のサマリの作成を教えた

・NIE の取り組みは受験クラスを担当してからも継続し３年間取り組んできた

・古典作品を読みながら、登場人物の心情を自分に引き寄せて考えるようにし、共感力の育成につながるように取り組んだ

・SDGｓの 17 のゴールの基礎知識と、日本の「SDGｓ未来都市」に関しては十分時間をとって学習した。また、外部の SDGｓに関するアイデアコンテストに、冬休みの課題の中でよいものを応募させた

◯ＳＧＨの取り組みについて通じて感じたことを書いてください。

・国内 FW、海外 FW は、生徒にとってかけがえのない経験をさせていると思います。とても素晴らしい取り組みなので、今後も継続されることを願っています。特に海外 FW はせっかく創り上げたノウハウであると思うので、生徒の負担金が少し増えても実施すべきものであると考えます。語学に取り組む姿勢が大きく変わり、英検への意識はとても高く、素晴らしい結果を出していると感じます。夏のエリアガイダンスでも英検の合格者数については驚く方々がとても多く、学校として自信をもって「語学に力をいれている」と言えるのは大きな啓蒙にも繋がっていると感じます

・将来的に世界で活躍したいと話す生徒が増えたと感じます。一方で、取り組みについていけなかった生徒についても対応が必要だと感じた

・大切な技能技術を学んでいると思うが、教科でやりすぎると生徒がパンクすると感じました。どの教科でもプレゼン発表があったりすると全然時間がありません。大学でも履修上限がある大学もあり、空き時間を確保していますが、毎日６時間ある高校ではそれは不可能かと思います。かといって授業をすべてそれに使うのは授業内容が偏りすぎて教科書を終わらせられないと思います。まず、教科教育があり、それに付加価値を付けるのであって、教科教育をおろそかにして、発表などに重きを置くのは間違っていると思います。教科を超えて学年を通してカリキュラムマネジメントをする必要があると思います。（夏休みの宿題なども）

・SGH の取り組みの中で教員同士の連携ができ、育てたい人物像について話し合う機会が取れた

・国連以外のＮＰＯの活動にも注目していってはどうかと思う

・他校のような一部の生徒にではなく、全生徒を対象にしていた点が良かったと思います。関心があまりない生徒がいることでの難しさもありましたが、そういった生徒たちが時間をかけて問題意識を持つにいたるまでのプロセスが見れて、意識喚起と行動変容について幅広く向き合うことができたと考えています

・「学園」と「世界」を結びつけるだけでなく、足元にある課題の解決にも貢献できるような人材に成長させていきたい。今後は地域にどれだけ還元できるかがポイントだと思う

・高校生の時から、世界の諸問題に目を向けて、友人と探究学習を行うことは大変すばらしい経験だと思います。将来の自分自身の使命の自覚につながると感じます

◯ＧＲＩＴの影響について感じたことを書いてください。

・すぐには結果が出ないけれど将来に大きな影響を与えると思います

・一生の中でなかなか学ぶことのできない課題について学んでいると思うので、とても重要な学びであると感じます。現代社会で生きていく中で、世界のグローバル化、諸問題についての最低限の知識は必ず必要になりますし、世界的教養を身に付けておくのは、世界市民育成を掲げている学園では必要

不可欠であると考えますので、重要な取り組みであると考えます。内容についても、SGH 委員の先生を中心に多くの先生方の意見から最新の問題についてカリキュラムを組んでいただいており、素晴らしいと感じています

・生徒のプレゼン力、人へのかかわり方、問題へのかかわり方すべてがよくなりました。まさしく生き抜いていく力の学び合いができたと思っています

・生徒と教師が向き合うのではなく同じ方向に向かって進むことができた。「学びたい」と感じる生徒が増えた

・生徒の発表能力やリサーチ能力は格段に上がっていると感じる。発想も豊かで、目からうろこのものも多いが、その場の発表だけで終わることなく、彼らの発想を行動に移し続けていくような仕組みができればよいと思う

・GRIT を通して、世界の現状を知ることで、自分の無力さを知り、もっと学んで力をつけていきたいと思うようになりました。そして、生徒も私も、自分は問題解決のために、どのように行動していけるか、貢献していけるのかを真剣に考えるようになったと思います

○ＧＲＩＴの運営について感じたことを書いてください。

・高２のプログラムが確立していないので、運営するのが大変だった

・SGH 委員の先生方、学年の GRIT 担当の先生方の負担がかなり大きくなってしまっていることを危惧しています。45 期に関しては、学年所属の先生方から、副担当を決める or 所属の先生が主担当となる等のサポート体制を構築していかないといけないと感じました。学年会で翌週の GRIT の時間の内容の説明等が行われるので、所属の先生もその時間に必ず参加することで、担任のサポート等できるようにすれば、一日担任が張り付きということも解消されるのではないかと考えます

・毎週の執行会や SGH 委員会が行われ、その内容が学年会の中でもまれて運営できている。今後も続けるのなら、コントロールする組織が必要

・一週目の 3 年間を知らない上での意見ですが、二週目以降の GRIT の内容は、常に改善を加えていかなければならないと感じる。また、その学年ごとの反省を次の学年に引き継げていたかというと、そこの部分も弱かったように感じる。正直負担感は大きいが、教員間の連携を高め、より価値ある形の学びにしていく必要があると思う

・昨年までにやってきた内容を今年やるにあたって、何を残し、何を変更して実施するかについて判断が難しかったと感じています

・毎回の GRIT の取り組みを、素人の担任でもマニュアル通りにやればきちんと運営できるように準備していただいて、とてもありがたかったです。（その分、SGH 委員の先生はとても大変だったと思いますが）ありがとうございました

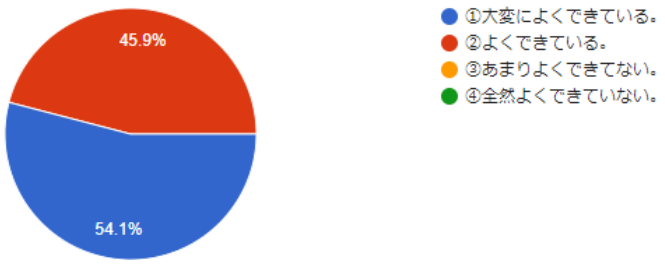
アンケート結果（教員アンケートより）分析（抜粋）

１年間を通しての SGH 活動に対するアンケートを高校教員対象に行った。結果を掲載し、特筆すべき点を記載する。

問１：「本校のＧＲＩＴプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか」の問いに関して、100%の教員が「よくできている」と評価してくれた。

問1. 本校のＧＲＩＴプログラムは、国連が提起する地球的課題の探究に取り組む内容になっていますか

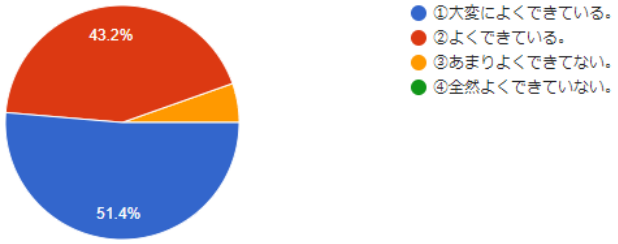
37 件の回答



問２～４：育てたい力に関する教員の評価は、それぞれ高い評価を得た。

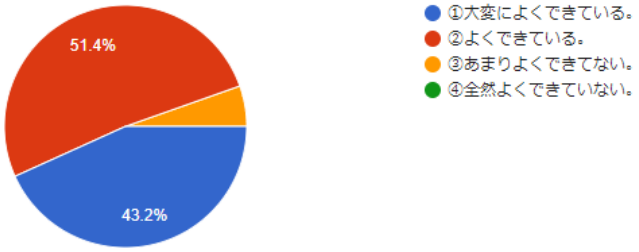
問2. 本校のＧＲＩＴプログラムは、「生徒自ら地球的課題に挑み、解決する『使命感』を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

37 件の回答



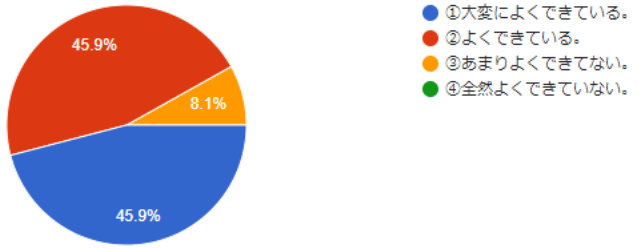
問3. 本校のＧＲＩＴプログラムは、「世界の現状を知り、苦しみを分かち合う『共感力』向上させるプログラムの取り組みになっていますか

37 件の回答

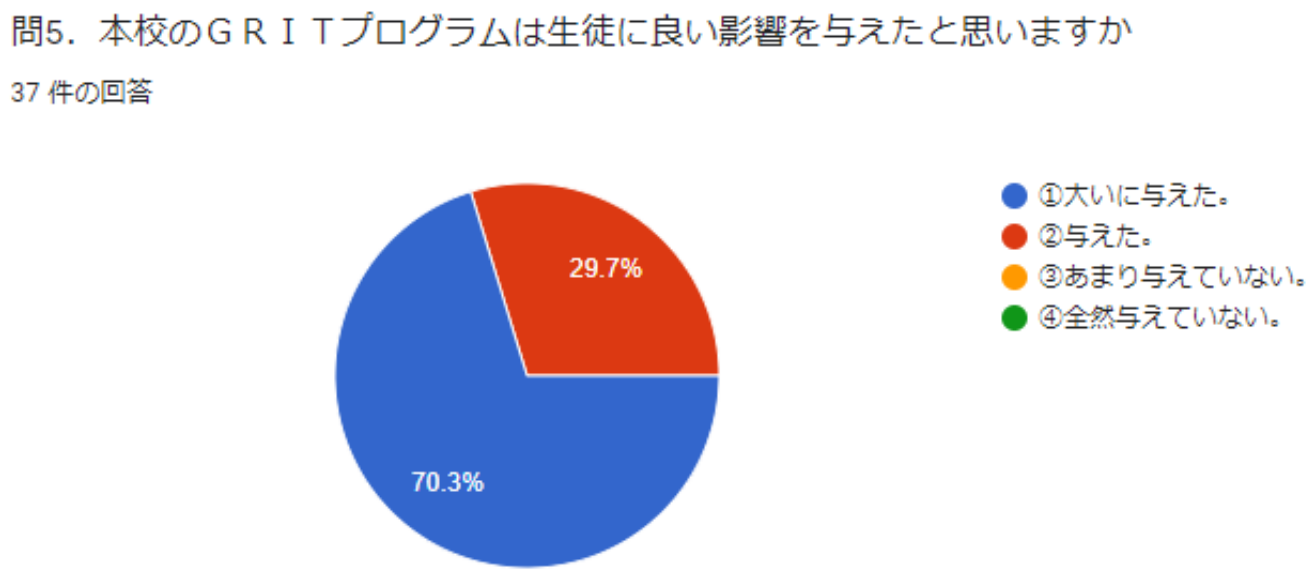


問4. 本校のＧＲＩＴプログラムは、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての　問題解決への創造力を向上させるプログラムの取り組みになっていますか

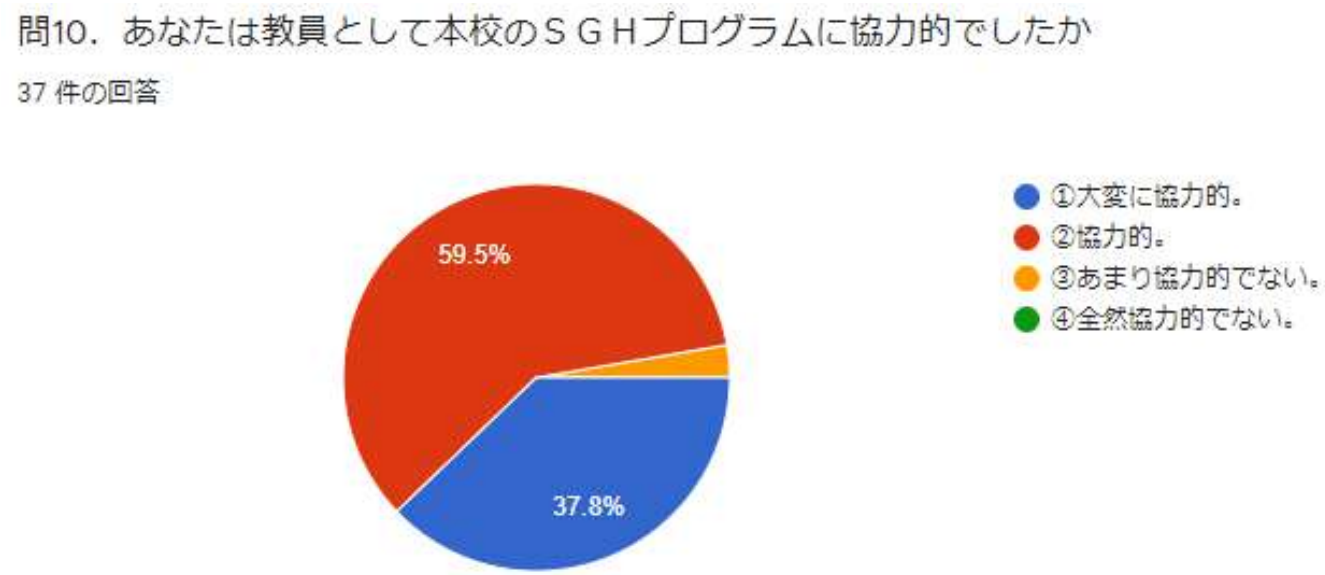
37 件の回答



問５：「本校のＧＲＩＴプログラムは生徒に良い影響を与えたと思いますか」は 100%の教員から「与えた」と評価された。



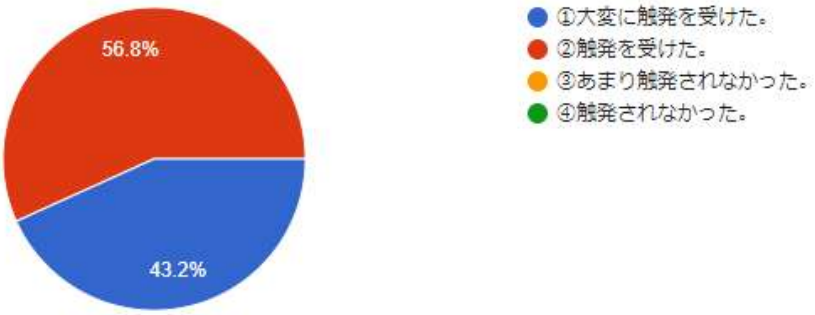
問１０：教員の協力度合いは非常に高く、97.3%の教員が「協力的」であり、「全然協力的でない」人は一人もいなかった。



問１１～１２：「GRIT 内容」による触発及び「GRIT に取り組む生徒の姿」による触発が多くの教員に見られ、相乗効果で教師も生徒も成長することができたと推察される。

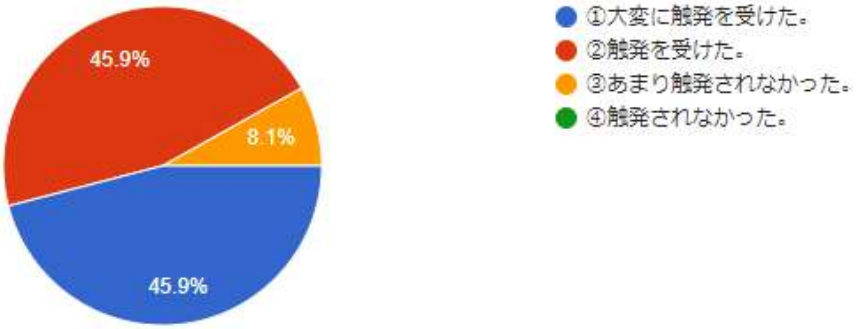
問11. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）の内容に触発されることはありましたか

37 件の回答



問12. 教員としてGRIT（ＳＧＨ）での生徒の意見や姿に触発を受けましたか

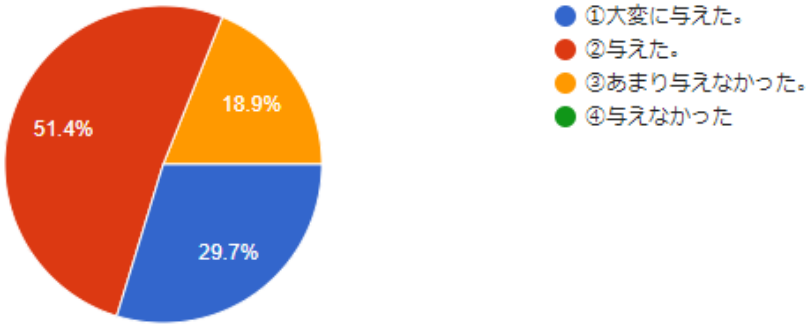
37 件の回答



問１６：SGH の諸活動が教師の指導方法も大きく変容させた。

問16. ＳＧＨの諸活動は、自分の授業や生徒に対する指導法・内容に影響を与えましたか

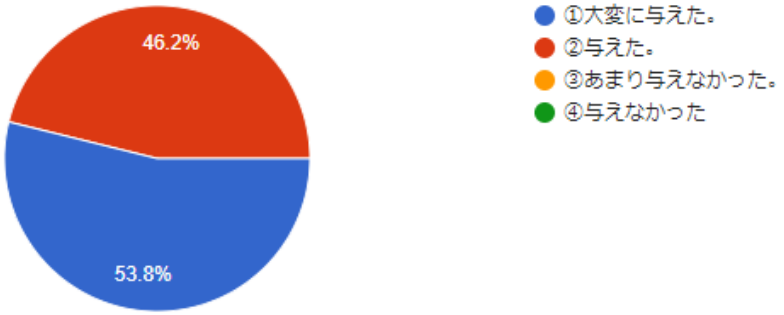
37 件の回答



問２２～２４：各学年の GRIT プログラムに対する評価は、それぞれ実際に担当した教員に評価してもらった結果、100%の教員がよい影響を「与えた」と評価した。

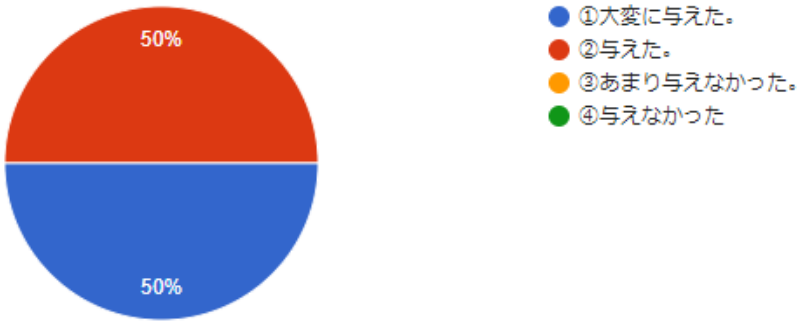
問22-1. 高校1年生のGRIT(四分野教育)の内容は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

26 件の回答



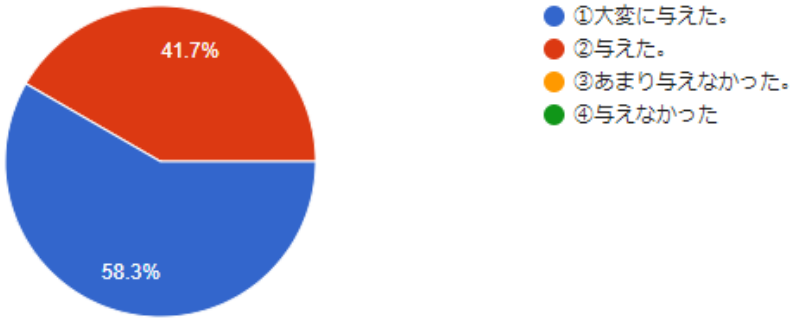
問23-1. 高校2年生の探究学習の内容は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

18 件の回答



問24-1. 高校3年生の模擬国連の取り組み（核軍縮シュミレーション・模擬国連・論文・英語サマリ）は生徒に良い影響を与えたと思いますか。

24 件の回答



SGH の 5 年間の取り組みは、生徒のみならず教員の意識を変容させ、教師自身が成長したことにより、さらに生徒が成長するという、素晴らしい相乗効果をもたらした。教師にとって大変ではあったが喜びもあり、全教職員の団結の力で成功することができた。心より感謝したい。しかしその反面、一部の教員に対する負担感は否めなかった。この 5 年間での研究開発の成果を財産としながら、「持続可能」でさらに魅力的な教育活動を目指して、本校独自の「世界市民教育」を目指していきたい。

（別紙様式３）

令和２年　３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　東京都小平市たかの台２番１号
管理機関名　学校法人　創価学園
代表者名　　理事長　　原田　光治　　印

令和 1 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間

平成３１年　４月１日（契約締結日）～令和２年　３月３１日

２　指定校名

学校名　　関西創価高等学校
学校長名　　杉本　規彦

３　研究開発名

TRY 人(じん)の郷・交野から
平和の創造に挑戦するグローバルリーダー育成プログラム

４　研究開発概要

関西創価高校がＳＧＨを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。Active Learning の土台の上に、全校生徒を対象とした「環境・開発・人権・平和」の 4 分野について学ぶ探究型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time)や Global Citizenship Seminar、希望者を対象とした知的好奇心を高揚させる高大連携プログラムの UP(University Partnership)Class、希望者から選抜された生徒がオールイングリッシュで徹底した探究を行う LC（Learning Cluster）で、確かな知識と広い教養の涵養を目指す「世界市民教育」の教育課程を高大連携して研究開発する。

５　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
運営指導委員会の開催	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
					○			○			○	

（２）実績の説明

○運営指導委員会を、朝野富三氏、梶田叡一氏、米田伸次氏ら三氏が出席し、3 回開催した。1 回目は 8 月 27 日に実施。2 回目は 11 月の中間研究発表会終了後、3 回目は 2 月の最終研究発表会終了後に開催。議事録を作成し、今後の研究開発について助言を頂いた。

○研究発表会ならびに運営指導委員会に、管理機関より、創価教育センター長、副センター長を派遣し、研究開発が適正に行われているか確認した。

○SGH に関わる経費について、管理機関より 190 万円の経費を計上し、研究開発が円滑に進むように支援を行った。それによりフィールドワークの生徒負担金軽減や外部講師・大学院ＴＡの費用を賄うことができた。（全校生徒対象に実施）

6　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（平成３１年４月１日　～　令和２年３月３１日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
GRIT 1	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
GRIT 2	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
GRIT 3	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Global Citizenship Seminar				○				○		○		
GRIT Field Work				○	○							○
University Partnership Class	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Advanced English Class	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Advanced Math Class	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Learning Cluster	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Field Work in Tokyo				○								
Field Work in America										○		
Active Learning	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Global Camp			○			○						
Newspaper in Education	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔
Feel Japan Program	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔

（２）実績の説明

○GRIT（探究型総合学習、「環境・開発・人権・平和」について探究）については、3 年間で行うプログラムの内容と教授法を確定し、持続可能な形で関西創価の世界市民教育として確立することができた。主体的で対話的な深い学びの中で、世界市民としての使命感・共感力・問題解決への創造力を培う学習内容を、全教員が共有し運営していくシステムが完成した。

具体的には、GRIT の内容が各教科に落とし込まれた。1 年生では SDGs の内容を「地理」で徹底して学び、探究しながらプレゼン発表までできるようになった。環境分野の「校内

フィールドワーク」においては、「生物」の授業で行うことにより、理科の教員が担当し、専門的な見地からのアドバイスも含め、より深い学びとなった。また、論理的思考を養ったり、言語技術的な内容を教えるための 5 行エッセイを「国語」と「英語」で同時に行った。2 年生では、「課題探究」を徹底して行うために、担当の全教員が「課題探究メソッド」を身につけるための研鑽を行い、育成のプログラムが完成した。大学院生によるプレゼンテーションで必要な「いかに伝えるのか　どのように伝えるのか」という知識と技術を習得するための講義・授業を 2 回実施、自分たちでもブラッシュアップできる技術を身につけた。3 年生では「模擬国連」の内容を深めるためのリサーチの時間を GRIT の時間だけでなく、「政治・経済」の授業の中で、各自の担当国のリサーチする時間を確保し、政治や経済についてのプレゼン発表を行った。その上で「模擬国連」で培った、各国大使としてのリサーチを論文として論理的にまとめ、授業の中でルーブリックを用いて成績として評価するシステムが構築できた。「数学」の授業では、データ分析やエビデンスを示すのに必要な数値を読み取る、統計学を用いた分析力を培った。論文作成を踏まえ、アカデミックライティング講座を、大学教員を招いて 2 回行い、講義の前には「現代文」の授業とも連携し、きめ細やかに指導した。アカデミックライティング講座は、生徒から大変に良い評価を得るとともに、高大連携が大きく進んだ。また、GRIT で作成した論文を基に、「英語」の授業では英語サマリーの作成を行い、その内容を成績として評価した。このように各教科の中で GRIT の取り組みを成績として評価できたことで、GRIT に取り組む生徒の意識がさらに向上し、内容のレベルも定着した。

〇Global Citizenship Seminar として外部講師を招いての講演を全校生徒に対して 3 回行った。また、平和構築のエンパワーメント育成を目指して、女性にターゲットを絞った「全校女子集会」を関西創価中学校も巻き込んで開催。ユネスコアジア親善大使のアグネス・チャン氏を講師に迎え「平和」について学び深めた。

〇GRIT Field Work として 7 月に東京 10 名、8 月に広島 14 名、3 月に東北 10 名での Field Work を一般公募し実施した。特に「平和」をテーマに核廃絶について探究活動を行った広島 FW では、本校が所在する交野市内各所で「核兵器禁止条約締結」に向けての署名活動を実施することができた。東京 FW では、JICA 地球ひろばにおいて、JICA フィジー事務所とオンラインで英語セッションを行った。東北 FW では東北大学とセッションを行い、SGH 校の仙台二華高校とセッションする計画だったが、コロナウィルスの関係で中止になった。

〇Fieldwork in America では、「核兵器廃絶」をメインテーマにカリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学アーバイン校、サンディエゴ大学、アメリカ創価大学の教授と学生へのプレゼンテーションとディスカッションを通し、探究課題への理解と提言内容をさらに深めた。また、昨年同様、ウォルドルフ学校を訪問し、「Discussion on Global Issues」を開催した。今年度は本校と同じユネスコスクールであるザ・グラウアー・スクールでも同じようにフォーラムを開催した。

〇SOKA Progress Class については、University Partnership (通称 UP)Class を開設し、大学などから講師を招き地球的課題の基礎講座を開催した。Advanced English &Math Class は継続して実施。どの講座も生徒から高い評価を得た。

〇Learning Cluster については、高校 2,3 年生より 22 名を選抜し、Field Work in Tokyo、Field Work in America を実施。年間を通して英語での探究が進み、高校生に

よる平和への提言「Peace Proposal」を完成させた。生徒たちは「環境・開発・人権・平和」の四分野を SDGs に照らして学んだ後、「核廃絶」に焦点を当て研究を続けた。
〇Active Learning については、校内で研究授業ウィークを 2 回開催し、お互いの授業内容の研鑽に努めた。現在、ほぼすべての授業で、主体的で対話的な深い学びを意識した授業が定着した。各教科においても、GRIT の内容を教科横断でさらに深めるための研究が進み、取り組みが大きく向上した。
〇Newspaper in Education については、年間通して各クラスで取り組み、コンクールでも多くの入賞者が出た。
〇Feel Japan Program については、奈良・京都への校外学習をフィールドワークとして行った。
〇その他の取り組みとしては、本校で進める GRIT の四分野の一つである「人権」について、多くの卒業生の弁護士を招き、現実社会を踏まえての「人権研修」を行った。
また、本校の SGH 運営指導委員でもある、梶田叡一氏を招き、本校の SGH 最終報告会において、講演会「グローバル社会を生き抜く資質・能力の育成」を多くの教育機関、行政関係者を招き盛大に開催した。
〇SGH 後のカリキュラムについては、新教育課程を見据えて、「新カリキュラム検討委員会」を発足させ、集中討議の職員会議を何度も開催し、全教員で「育てたい力」についての議論を重ねた。具体的には、GRIT1 としての「探究基礎」「アカデミックライティング」を科目として設定し、さらに深い学びを計画している

7　目標の進捗状況、成果、評価

関西創価高校がＳＧＨを通して生徒に身につけさせたい力は、国連の提起する地球的課題について探究し、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」である。この目標を見据えながら、教員の指導体制も含めて確認したい。
〇SGH 最終の 5 年目となり、すべての教員が 3 年間での GRIT のカリキュラムの流れを認識・理解・経験することで、「育てたい人物像」に沿った、「育てたい力」を明確にしたプログラムが完成した。1 年次は「グローバルイシューとの出会い」をテーマに、「環境」「開発」「人権」「平和」に関する知識のインプットとディスカッションを中心としたプログラムを、SDG s に照らして様々に行った。全生徒がタブレットを持ったことで、本校が NASA と共同で行う「アースカムプロジェクト」に全員が参加可能となり、宇宙から俯瞰的に地球を見つめる目線を持たせることができた。新たなプログラムとしては「AI 兵器」を取り入れ、現時点での AI 兵器の現状をリサーチさせるとともに、自律型致死兵器システム（ＬＡＷＳ）にどう向き合うのかを考え、アメリカとイランの現在の戦闘についても深く考える機会となった。GRIT の大きな柱である SDGs については、「地理」の教科の中で定着した。そのことで、SDG s の学びの深さを授業の成績として評価が可能となり、生徒たちの意識が向上した。チームで別れて SDGs を推進する国内の自治体や企業に対して調査を行い、その振り返りを授業で行ったり、お互いにプレゼン発表することで、身近なところにも、自分たちにできることがあることを学んだ。2 年次は「グローバルイシューとの戦い」をテーマに、「環境・開発・人権・平和」の 4 分野からトピックをチームで選んで探究活動を行った。探究に先駆け、世界の識者（アーノルド・Ｊ・トインビー、

ミハイル・S・ゴルバチョフ、ライナス・ポーリング、ヘンリー・A・キッシンジャー、アンワルル・K・チョウドリ等）と本校の創立者との対談集を学び、世界の識者の考えるグローバルイシューを基に自分たちの取り組みたいトピックを決定。それぞれのチームが1年間かけて探究活動を行い、自分たちなりの提言をまとめた。それぞれのチームが6月には大学教授に探究成果と提言を発表。大学院生によるブラッシュアップを受けて、全チームがパワーポイントを使ってSDGsに照らし合わせたそれぞれの研究・提言を保護者会で発表。3月にはポスターにまとめ、「学年ポスターセッション」を全学年61チームで開催を計画。例年、発表の対象として高校1年生を招待し、総勢700名を超える大規模なポスターセッションを行っている。(本年度はコロナウィルスの関係で中止)このポスターセッションは昨年度から一般にも公開し、教育関係者をはじめ多くの参観を得た。高校2年生にとっては、後輩に1年間の学びを自分の言葉で発表する機会となり、1年生にとっては、来年自分たちがあるべき学びの姿を確認することができ、質疑応答も活発に行える。3年次は「世界を一つにする力」をテーマに、合意形成の力を培った。その集大成として、3年生350名全員で、100ヶ国を分担して模擬国連に取り組んだ。「貧困により教育を受けられないすべての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現」の議題で総会を2回開催。第1回総会では、高校2年生全員を対象に、スカイプを使用して教室に生中継でした。教員による解説も入れながら、模擬国連総会の模様を見学させることで、ロビー活動の際には2年生へのアドバイスも可能となり、来年度に自分たちの行うプログラムのイメージを持たせることができた。このスカイプ中継を高校2年生教員がキャスターとして担当することで、3年次に行う模擬国連のプログラムへのスムーズな移行が実現している。第2回目の総会をSGH中間報告会の日に行うことで、関西創価の学びの成果を大きく教育関係者や行政にも公表することができた。SGH終了後も一般公開並びに他校との交流も検討しており、さらに発展させていきたい。昨年度よりは、SGH委員会の集中討議の際に、1年次、2年次、3年次に行うGRITプログラムの内容や時期、反省点や引き継ぎ事項をグーグルドライブのチームドライブに各学年ごとにまとめ、全教員が昨年度のどの時期にどのようなプログラムを、どのような教材で行ったかが確認でき、反省点や改善点を共有しながらPDCAがスムーズに行える環境が整備された。高校3年生対象の、大学教員を招いての「アカデミック・ライティング講座」は2回行った。大学教員と国語科教員が連携を取りながら、「国語」の授業で事前学習を行い、内容の濃いものとなった。個人の学びの集大成としては、模擬国連の中で各国大使の目線で、「貧困により教育を受けられないすべての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現」について取り組んだことをGRIT論文としてまとめ、その内容は「政治・経済」の授業で成績として評価した。完成したGRIT論文を基に、「英語」の授業で「英語サマリー」を作成させ、その内容を授業の成績として評価した。教科と連携させることで模擬国連総会の終了後に自分の学びを振り返らせ、自分の考えを論理的に「日本語」と「英語」で発信する方法を身につけさせることができた。昨年以上に成果物の内容も大きく向上した。

〇GRITを全校生徒対象に全教員で取り組んだことで、生徒も教師もGRITで行われているActive Learningの様々な手法や効果をよく理解している。その為、全教科に渡ってストレスなくActive Learningの様々な手法が活用され、「主体的・対話的な深い学び」が多くのの教科・授業で実践できた。また、GRITで学ぶ内容やGRITを通して育てたい人間像を全教員が把握しているため、その力を育むための教科横断が進んでいる。また、

SGH 後の GRIT についても全教員で研修会と討論会を開催し、GRIT の継続が確認された。GRIT の内容自体が世界の情勢や新しい情報に左右されるため、さらに内容更新や精査を行い常に時代に即した更新の必要性を確認した。
〇全校生徒にタブレットが貸与されて 4 年目となり、ICT を活用した Active Learning や協働学習が定着してきた。しかし、高度な作業に関してはタブレットには限界があるため、来年度の 1 年生より、Chromebook の貸与に切り替えた。パソコンの BYOD と並行してさらに高度な ICT 教育に取り組んでいく。
〇生徒の意識の変容は各種のコンクールや大会への参加にも表れた。JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでは特別学校賞を受賞するなど、多くの生徒が自主的に参加活躍し、多数の受賞者を輩出した。
〇米国ミドルベリー大学院モントレー校大量破壊兵器不拡散研究所での「日米露の高校生による核不拡散教育会議」（CIF）に 2 名が参加、高い評価を受けた。
〇第 9 回 ESD(持続可能な開発のための教育)国際交流プログラムに、高校 2 年生の生徒が全国 8 名の代表に選ばれ、ドイツフランス研修に参加した。
〇「第二十二代高校生平和大使」として、高校 2 年生の生徒が大阪代表に選ばれ、スイス・ジュネーブにある国連本部を訪問した。
〇第 66 回「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」において、高校 2 年生生徒が大阪府代表となり、全国大会に出場した。
〇Learning Cluster では、「核廃棄廃絶」をテーマに据え、一年間をかけ、高校生による平和提言「High School Peace Proposal」を作成した。活動中、東京へのフィールドワーク、海外へのフィールドワークも行い、専門家や大学教授から講評をいただき、探究課題をさらに深める機会とした。ポスターを作成したグループやボードゲームを作成したグループ等、核兵器の脅威をどのように実感してもらえるのか発表方法にも工夫を凝らした。
〇University Partnership Class を受講した生徒は、各界で活躍する様々な分野の講師から、1 年間にわたり講義を受け、主体的・対話的で深い学びとなった。
〇「世界津波の日」高校サミット in 北海道に 3 名参加。日本を含む世界 44 カ国、約 394 名の生徒とともに調査を行い、自然災害に対する知識を深め、アクションプランのプレゼンテーションを行った。
〇トビタテ！留学 JAPAN に 3 名が選出されアメリカ、アイルランド、カナダへ留学した。
〇世界に興味を持ち、多くの生徒が海外に旅立った。国際会議ならびにＳＧＨとしてのフィールドワークで 17 名、個人留学で 31 名、合計 48 名がこの 1 年間で海外に実際に足を運び探究活動を行った。
〇運営指導委員会を 3 回開催し、運営指導委員からは「関西創価としての取り組みとしては大きく成功している。SGH 終了後にどのように学校としてこのプログラムを財産として残していくのか。また、これからも続くユネスコスクールとして、どのように関西創価の世界市民教育を発信し続けるかが今後の課題」との教示があった。
〇ユネスコスクールとしての取り組みも開始。カナダでの核平和青年サミットに関西創価の教員が招聘され、本校の SGH の取り組みを報告。終了後には、カナダ・ユネスコ協会の責任者から「関西創価の世界市民教育は模範であり、カナダのユネスコスクーでも共有したい」との言葉が寄せられた。さらにユネスコスクールのネットワークを活かして、本

校の取り組みを地域や世界へ広げていきたい。

8　「5 年間の研究開発を終えて」

〇関西創価の SGH プログラムは、平成 26 年度の SGHA を含めて 6 年目となる。本校のメインプログラム探求型総合学習 GRIT について、研究開発の変遷を記載する。

平成 26 年度の SGHA の時には、予算もない関係で「お金が無くてもできるプログラム」ということで、全校生徒対象としては、探求型総合学習 GRIT（Global Research and Inquiry Time)の 4 分野教育（環境・開発・人権・平和）と世界で活躍している方に講演していただく Global Citizenship Seminar、希望者の中から選抜してオールイングリッシュで地球的課題を学ぶ LC（Learning Cluster）からスタートした。土曜日を利用して行う GRIT は 3 学年同時進行でスタートし、いま世界で起こっているグローバルイシューについて全校生徒が知る機会となった。グローバルイシューについて学ぶ中で、興味・関心を持った希望者の中から選抜された LC は意識も非常に高く、知識だけでなくリーダーとしての資質も磨くプログラムとなった。当初、世界市民教育をスタートさせることに対し、生徒たちの関心度合いが危惧されたが、環境・開発・人権・平和のグローバルイシューについて学ぶ内容は、昨今の地球温暖化に伴う気候変動の災害被害の増加などもあり、生徒の学力の高低に関係なく大きな関心事項として受け入れられた。また、世界の各地で起こる、紛争や難民の問題も、同世代の多くの子供や青年が被害者となっている事実を知ることで、生徒にとって「どうしても解決したい課題」と受け止められ、学びが大きく進んだ。当初、毎回の GRIT プログラムの運営に、消極的だった教員も、生徒が生き生きと学ぶ姿に触発され、GRIT に取り組む姿勢が大きく変わった。

平成 27 年度には SGH 校に指定され、予算も計上されたため、新たに University Partnership (通称 UP)Class を開設、大学・企業・国際機関と連携して、希望者に学びの場を提供した。また、国内（広島・東京・北陸）と海外（アメリカ・マレーシア）のフィールドワークも開始し、希望者の中から現地に調査ができる環境を整えた。学びの形態も全校生徒対象の GRIT、希望者が全員受けることのできる UP、希望者から選抜されたメンバーで 1 年間行う LC という関西創価の SGH プログラムの骨格が完成した。平成 27 年度は、GRIT においては、じっくりと学ばせたいとの意見もあり、高校 1 年生の 1 年間で 4 分野を学ぶのではなく、1 年生で「環境・開発」、2 年生で「人権・平和」というように、2 年間で 4 分野を学ぶ方向性に切り替えた。SGHA で 1 年間 4 分野教育（環境・開発・人権・平和）を学んできた 2 年生に対して、GRIT を進める中で、知識のインプットとディスカッションだけで本当に深い学びになるのか？との声が上がり、1 年生で学んだ 4 分野から、自分たちで興味関心を持ったトピックを選び、創価大学と高大接続を行いながら 1 年間かけての「課題探究」を行うプログラムが開発された。

平成 28 年度には、昨年度に高校 1 年生は 1 年間で 4 分野を学ぶのではなく、1 年生で「環境・開発」、2 年生で「人権・平和」というように、2 年間で 4 分野をじっくりと学ぶ方向に決めたが、創価大学と高大接続を行いながら生徒たち自身がトピッ

クを選んで1年間かけての「課題探究」を2年生で行うのなら、1年生は「環境・開発・人権・平和」の4分野の教育を幅広く学ぶことが大切ということになり、元の形に戻った。1年生で「4分野教育」2年生で「課題探究」を学んできた生徒が3年生となることから、さらに発展したプログラムが必要となり、3年生では「国際的な合意形成」の体験をさせる「模擬国連」を、学年全員350人で行うことが決定。また、3年生の「模擬国連」で各国大使として活動した視点で、模擬国連の議題に沿って論文作成と論文を英語サマリーとして作成させるプログラムが開発された。この時点で、手探りではあったが現在の関西創価のSGHプログラムの基本形が完成した。この時点での問題点は、1年生でのプログラムは、SGHAも入れて3年目ということで精査された内容として確立されたが、2年生で行う「課題探究」においては6月に行う創価大学研修までにある程度完成させたため、非常に浅い探究になったことと、6月以降の取り組みにモチベーションが下がってしまい、2学期、3学期に取り組む内容が不十分であった。3年生で行う「模擬国連」においても、教員の経験不足もあり苦労した部分と、「模擬国連」の総会まではモチベーションを保てたが、総会終了後の、個人の論文作成、英語サマリーについては、しっかりとした成果物を作成させるには至らなかった。英語サマリーについては、教科横断の形で成果物を成績に組み込むことを開始したが、基礎となる論文の完成度が低いため、まずは日本語での論文の内容を向上させることが課題となった。高校3年生の「模擬国連」は国連総会を2回行うが、その第1回目を高校2年生に公開することで、2年生も「模擬国連」に興味関心を持ち、次年度へのスムーズな移行へとつながった。

平成29年度には、2年生での「課題探究」のプレゼンテーション作成と発表に関して、モチベーションを維持させるために、「課題探究計画書」をグループで作成させてスケジュールを管理、6月の創価大学での発表については、プレゼンテーションの完成とはせず、「リサーチクエスチョン」「仮説」の作成とし、その内容を大学教授にアドバイスをもらうことに留め、この後の研究時間の確保と、スケジュールを管理することでモチベーションを維持させた。また、グループの中で代表選手型の取り組みになりがちだったことに対しては、高校1年生への学年ポスターセッションを3学期に行うことで、全員が自分の言葉で後輩に説明する機会を設けることができ、全員の意識が大きく向上した。また、各国大使として活動した視点で作成するGRIT論文作成のクオリティー向上のために、創価大学から教員を招き「アカデミックライティング講座」を開設した。内容としては、大学1年生で学ぶ、学術的な論文のルールや手法である。「模擬国連」において、土曜日のGRITの時間だけでは、各国リサーチが時間不足で、浅い内容となるため、政治・経済の授業と連携し、リサーチとディスカッションの時間を確保した。

平成30年度には、高校2年生で行う学年ポスターセッションを、高校1年生への発表だけでなく、一般の希望者や教育関係者にも大きく公開した。交野市の中学教員を招待して参加してもらった結果、大変に感動され、交野市の中学校において、関西創価の取り組みをモデルにした先輩から後輩へのポスターセッションが開催された。高校3年生の「模擬国連」の運営については「模擬国連部」と連携を取りながら、関西創価独自の方法を確立した。GRIT論文作成に関しては、GRIT論文の2000字の内容を、政治・経済の成績に評価として入れることで、生徒たちの論文に取り組む意識

が大きく向上した。

令和元年度には、高校 2 年生の「課題研究」について、職員会議の中で研修会を行い教員が「課題探究メソッド」を確立。生徒たちに課題探究の手法について細かく指導するとともに、発表の手法についても細かくレクチャーすることができた。高校 3 年生で行う、大学教員を招いての「アカデミックライティング講座」は、より内容を充実させるため、年 2 回の開催とし、大学教員と国語科の教員が連携を密にして、国語の授業でも細かく指導できるプログラムとなった。

構想調書の仮説に対する評価

【仮説 1】

世界が課題とする「環境・開発・人権・平和」の４分野について、大学、国際機関、企業と提携し、国連が具体的に提起している諸問題を探究し、生徒たちがチームとして新たな視点からその解決を目指すプロセスを確立することで、語学力の向上や主体的な学びの姿勢を育むことが期待できる。

〇世界に目を向ける教育を行った結果、「海外で通用する語学力は必要であると思いますか」の質問には、「必要」「絶対に必要」が 91.1%という数字を示した。このことから GRIT プログラムが語学の学習意欲を大きく向上させたと考えられる。エビデンスとしては、3 年生においては 350 名中、延べ 159 名の生徒が、この 1 年間で英検準一級以上の試験に挑戦した。約 2 人に 1 人が準一級以上のハイレベルな語学習得に挑戦したことは、意識の変容が行動の変容に移ったと考えられる。

〇「世界の平和に貢献したいと思いますか」の質問には、89.5%の生徒が「貢献したい」と答え、非常に高い数字を示した。「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問には、「平和に貢献したいと思い、進路を定めた」「模擬国連で世界の現状を知り、自分はどれだけ満足な生活をしているのだろうと、身の回りの生活を見直そうと考えるようになった。世界の平和のために今自分ができることは何なのか考えるようになった」「GRIT をやる上で自分が思っている以上に世界が深刻な状況だということを知り、ニュースや新聞をよく見るようになった」などの回答があり、全体的に「学び」に対する意識が高まった。「大学を選ぶときに国際化に重点を置く大学への進学を希望しますか」の質問に、72.9%の生徒が「希望する」と答え、進路にも大きな影響を与えた。「将来留学したいと思いますか」の質問には「絶対にしたい」「できればしたい」が 78.3%を示し、世界に大きく目を開いたと考えられる。「自分と意見の違う人の話や考え方を認める力は向上しましたか」の質問では、86.5%の生徒が「大変に向上した」「向上した」と答えた。

〇高校 2 年生の「課題探究」の時期には、大学院生ＴＡによるアドバイスや、創価大学研修における大学教授からのアドバイスの機会を設けた。高校 3 年生の「模擬国連」の時期には、JICA 関西によるアドバイスなどの取り組みを行うことで、国内にいても世界を感じることができた。大学教員を招いての「アカデミックライティング講座」を高大接続して行っているが、創価大学の教員からは「SGH 以降、関西創価出身の生徒の学術的な論文作成能力が飛躍的に向上しています」との評価をいただいた。

【仮説 2】

世界の現状を知り、苦しみを分かち合う「共感力」の向上の中で、生徒自らが地球的課題に挑み解決しようとする「使命感」を培うことができる。

〇関西創価の SGH プログラムである GRIT では、「環境・開発・人権・平和」の 4 分野を SDG s に照らして学んできた。3 年間 GRIT を学んできた高 3 アンケートでは、「世界で起こっている環境問題について関心がありますか」の質問には。「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 85.6%、「世界の発展途上国における開発の現状や問題点について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 76.7%、「世界で起こっている人権問題について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 79.1%、「世界で起こっている紛争や平和への活動について関心がありますか」の質問には、「関心がある・少し関心がある」と答えた生徒が 82.5%といずれも高い数値を示した。そしてこの 4 分野について関心を持った時に、「どういう気持ちの変化があったか」また、それに伴い「自分の行動がどう変わったか」という質問では、「気持ちの変化に伴う行動の変化」について、具体的な行動や変化が「環境問題」で 151 件、「開発問題」では 115 件、「人権問題」では 123 件、「平和問題」については 126 件の自由記述が回答された。主な回答として「環境問題」では、「エアコンや照明の使い方」「エコバックの使用」「トイレや歯磨きでの水の使用方法」「プラごみの削減」などがあげられ、「開発問題」では「フェアトレード商品の購入」「食品ロスをなくす取り組み」「募金活動の参加」など、「人権問題」では「身近なところでのいじめ」「学校でのジェンダー理解」「難民の現状を伝える啓発活動」などの行動が見られた。「平和問題」については「身近な家族や友達に自分の知っている核兵器の知識を話す」「現在起こっている紛争の現状を調べる」などの答えがあり、全般的には「もっともっと学びたい！」「勉強を始めた」「自分の将来が決まった」などの答えがあった。グローバルイシューについて、高校生という立場で大きくできることは少ないが、学年 350 名の中で 4 つの分野すべてに 100 件以上の何らかの行動を生徒たちが起こしている事実は、GRIT の教育効果として「使命感」「共感力」の育成に大きなものがあったと分析する。

〇「他人のために献身的に働こうとする奉仕の気持ちはありますか」が 90.7%「身の回りで起こる問題に積極的に関わろうとする気持ちはありますか」が 82.2%と高い数字を示した。と答えた。「何か困難なことにぶつかったときに解決方法を探そうとする力は向上しましたか」という質問にも、81%の生徒が「大変に向上した」「向上した」と答えた。以上のアンケートを考察すると、世界の平和に貢献するグローバルリーダーとしての「使命感」「共感力」「問題解決への創造力」につながる、グローバルリーダーとしての心を育んだと考えられる。

【仮説 3】

興味関心を抱く希望者には、高大連携プログラムとして、UP（University Partnership）クラスと呼ばれるグローバルイシューの基礎講座 、SP（SOKA Progress）クラスと呼ばれる講座を開講。そこで学びを深めた生徒の希望者から、さらに選抜して、国際機関と提携してのオールイングリッシュによる LC（Learning

Cluster）プログラムを行うことで、全校生徒の学びを大きくリードするとともに、リーダーを育成することができる。

〇本校の世界市民教育の中心である探究型総合学習 GRIT は、全校生徒を対象に「環境・開発・人権・平和」を SDG s に照らして行われる。希望者や希望者から選抜された生徒が学ぶ機会として設けられた UP・LC・国内フィールドワーク・海外フィールドワークそれぞれにおいて、GRIT と同じように「環境・開発・人権・平和」を SDG s に照らして行われる。希望者や選抜者が先進的に学んだ知識や、リサーチの手法、ディスカッションやプレゼンテーションの手法は、GRIT の授業の中でこの生徒たちの手で広く共有された。生徒自身がファシリテーターとしてリードすることで、質疑応答が活発になり生徒の学びを大きく進めた。

〇UP、LC、フィールドワークの経験者から、多くの全国大会・世界大会の参加者が生まれている。今年も「世界津波の日」高校サミット、トビタテ！留学 JAPAN、「日米露の高校生による核不拡散教育会議」（CIF）、第 66 回「国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」全国大会、第 9 回 ESD(持続可能な開発のための教育)国際交流プログラム、「第二十二代高校生平和大使」などに選ばれた。

以上の理由から、本校の SGH の構想調書における仮説に対して、SGH プログラムは大きな効果を発揮し、目指していた「世界市民教育」は進んだと確信する。持たせたい力として設定した「使命感」「共感力」「問題解決の創造力」についても、おおむね目標を達成することができた。今後の課題として、クラブ活動や生徒会などの諸活動の盛んな本校において、7 時間目に行われる SOKA Progress Class や、University Partnership Class をどのように交通整理しながら行っていくのかが大きな問題となっている。また、生徒に大きな触発を与え、リーダー育成の機会となってきた国内外の GRIT Field Work(アメリカ・東京・広島・東北)についても、その旅費のほとんどを SGH の予算で運営してきた。今後は管理機関からの資金援助をとともに、内容を精査して継続していきたい。GRIT での学びを深めるために、「TOK」（知の理論）の導入、言語技術的要素の習得と学術的文章を書く力を育成する「アカデミック・ライティング」の科目化、「探究基礎」の科目化を実施していく。SGH の 5 年間で開発したプログラムを、さらに発展させていきたい。

【担当者】

担当課	経理募金課	ＴＥＬ	072-891-0011(代)
氏　名	坂井俊仁	ＦＡＸ	072-891-0015
職　名	主任	e-mail	sakai@soka.ed.jp

2019年度第1回SGH運営指導委員会

日時：2019年8月27日（火）10:30～13:00
会場：理事室
参加者：梶田叡一 桃山学院教育大学学長
米田伸次 帝塚山学院大学国際理解研究所顧問
朝野富三 宝塚大学特任教授
武田学園長・木下副学園長・杉本校長・大月副校長・本房教頭・流田教頭
千葉参事・桝田参事・小山SGH委員長
太田創価教育センター長・中西副センター長・角内副センター長・狩野参事　16名
式次第：あいさつ　　杉本校長
関西創価高等学校 SGH 2019年度前半の取り組みについて
大月副校長・小山SGH委員長
運営指導委員の先生方より
あいさつ　　太田センター長・杉本校長・武田学園長

議事録：
SGH最終年度、総仕上げの時を迎えた。
これまでの取り組みは、貴重な財産になっている。
これからの取り組みのためにもご助言をいただきたい。

○手をつなごうと思っている人・学校があるかどうか。
創価大学、東京校はどうか？協力してくれるところが必要。
東西学園の足並みを揃えよ。
法人も学園の意向が決まれば協力を惜しまない。
○海外研修　遠くではなく、近場でよい。アジアに目を向けるべきではないか。韓国、インド、台湾など、交流が進んでいるところはないのか。フィリピンやインドネシア、ニュージーランドなどは、安い上に大勢を連れて行ける。
○留学生の確保　SGIのネットワークで海外から来る生徒を増やすべきだ。海外からの受け入れの流れを作れないのか？検討しているか？
●留学生受け入れのためのカリキュラムやインターナショナルスクールのようなレベルまでの議論は行っていないが、今年度は、ベトナムからの新入生がいる。自分で日本語学校に入り、学園に来た。現在、日本語に苦労しながらも非常にがんばっている。その子のがんばりに周りの生徒が刺激を受けている。WWLは交流が盛り込まれている。短期の留学など、抜本的に考える必要がある。法人と検討し、考えてきたい。
○キリスト教系の学校は、海外の生徒の受け入れに力を入れている。
短期30人から50人、長期とも5人から10人を目標に取り組んでいる。
ベトナムからもかなり来ている。
○日本の教育課程から日本の大学を希望する海外の生徒もいる。大学から留学してくる人も多いが、中

高からの留学生も増えている。ぜひ考えて欲しい。
○海外にＰＲする価値あり。
○GRIT　「環境」「開発」「人権」「平和」の 4 つのテーマ　GRIT を教科化することが大事。
○「人権」というものの把握の問題。4 つのキーワードがバラバラであってはいけない。繋げることが大事だ。これが課題だと思う。SDGs の基本理念は、誰も取り残さないこと。それは、人権や命の尊重につながる。創立者の基本理念に関わる。GRIT のカリキュラム化。「環境」「開発」「人権」「平和」の 4 つのテーマと SDGs の 17 の目標をいかにつなげるか。教科化することが SGH のレガシーになる。
○SDGs の論文審査から
高校生にとって SDGs の問題を投げかける。とても難しい。
身近な課題として、「自分事」として捉えることが大事。
知的なレベルでの理解にとどまる。表面的な理解にとどまっている。
知的な学び、体験の学びを並立させる。問題と共感性、感動をいかに学ぶか。
自分事としてとらえる。これが基本だ。このカリキュラムがない。学校の教育にはない。
この点を考えて教育することが、SGH 後の特色として出せるのではないか。
○開かれた学園教育、これが大きなポイント。海外、地域に。
○東西の学園の連携が大事。現時点では、一緒に活動していない。
どちらかといえば並列だ。融合すれば、新しい価値を生む。これからのポイント。
ＷＷＬについても法人は東西のことをどう考えているか。
関西校は、やりたいという希望が出ているが、東京校はどうなのか。
論議がどこまでできているのか。
○WWL にならなかった場合、ＳＧＨ後の「自走」についても予算はどうするのか？
法人からの手当はあるのか？　寄付を募るなどは可能なのか？
継続するにしてもどのように形を変えて行うのか？シミレーションはしているか？
先ほどの説明では、その点がなかったように思う。
●法人からの手当を要請する。ＦＷは、参加者の一部負担なども考えている。
○GRIT、GCS、UP は継続という理解でよいか？
●すべて残すつもり。特に海外ＦＷをはじめ、ＦＷの教育効果は大きい。ＳＧＨ後もＦＷは残したい。そのために予算はしっかり確保したい。
○「国際課題」をカリキュラム化するのはよいことだ。
○PISA により教育が振り回されている。二つの方向性。一つは、グローバル人材、グローバルリーダーの育成。これからのグローバル社会に適応など。国が予算を出している。
もう一つの流れは、ユネスコスクールだ。関西校に対しては、ユネスコスクールとしても期待している。仙台二華高校の取り組みが優れている。担当者は、悩みながらもがんばっている。
SDGs は表に出るが、どこも ESD を忘れている。どうやって ESD を意識しながらユネスコスクールの取り組みを行っていくか。いかに統一的にとらえるか。SGH を超えた新しい課題となる。教員の中で深掘りし、共有を。
○「生命の尊厳」という建学の精神を踏まえながら世界市民教育をいかに行っていくか？
創価学園以外の学校へいかに波及させるか？また日本でどう広めるか？
学園の取り組みで日本の教育をリードして欲しい。

○本校の卒業生が南アフリカで活躍している。
　他にも海外で活躍している卒業生は、たくさんいる。
　後輩のために役立たせることはできないか。
　海外で活躍している人をリストアップする。
　母校に帰ってきてもらい、話をしてもらうこと。
○自前の資金を確保することが大事。事業は、お金がかかる。そのためには、寄付金を考える。
　支援者を作る。学校のファンドをもつ。校長がお金を持つこと。何とか海外ＦＷを残せ。
　全員に海外を体験して欲しい。
○「人権」についての学び。フィリピンに行かせるのがよい。
　ここでスラム街を見せること。人権のことがよくわかる。何を考えるべきかがわかる。
（梶田先生が関わった）ノートルダム女子大学は、アメリカにしか行っていなかった。
　助言の後、フィリピンに行かせるようになってから学生が変わった。
　人間らしく生きるということ。いかに生きるかということが大事だと考えるようになる。
○昨年度の報告書から
　命と向き合うことから真剣に「生きること」を考えている。
　その「生きること」を話題にし、ともに語り、学ぶ場が必要だ。これからの課題。学びの場、フォーラムを作ることだ。
●首都大学東京の佐藤先生のお話。SGH よりも前に SDGs・ESD をはじめとする理念が大事。この理念を骨格に置いて取り組むこと。関西創価ならではの世界市民教育が大事と感じる。
○WWＬについても関西創価ならではのことを絞り込んでやること。
　GRIT を継続して行うこと。

2019 年度　　関西創価高等学校

スーパーグローバルハイスクール中間研究発表会

【日　時】　２０１９年１１月８日（金）10 時 25 分～15 時 00 分

【会　場】　関西創価高等学校
〒576-0063　大阪府交野市寺 3-20-1
TEL　072-891-0011　　FAX　072-891-0015

【アクセス】・JR 学研都市線「河内磐船」駅下車　徒歩 20 分
・京阪交野線「河内森」駅下車　徒歩 20 分
※JR 河内磐船駅前からタクシーも利用できますが、本校と
河内磐船駅間を学校車両にて送迎させていただきます。
（9 時 30 分～10 時 30 分）（15 時～16 時 15 分）

【研究開発構想名】
「TRY 人の郷・交野から　平和の創造に挑戦する
グローバルリーダー育成プログラム」

【発表会の内容】

9:50	10:25	10:30	12:20	12:30
受付	校長挨拶	SGH ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ GRIT 公開 模擬国連（３年生全員）		昼食
（同窓会館３階）		（講堂）		（同窓会館３階）

13:00	13:55	14:10	14:30	14:50	15:00	16:00
生徒による プレゼンテーション ポスターセッション	取組紹介	生徒による 模擬国連の 取り組み紹介	講評	挨拶	情報交換会	
（同窓会館２階）		（同窓会館３階）			（同窓会館２階）	

【校長挨拶】（　10:25 ～10:30　講堂　）

【SGH プログラム GRIT 公開】（　10:30 ～12:20　講堂　）

GRIT とは、全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラムのことで、毎月２回の土曜登校日に実施しています。「Global Research and Inquiry Time（地球的課題の調査と探究の時間）」の略称で、「根性・負けじ魂」という意味もあります。「環境」「開発」「人権」「平和」をテーマに掲げ、地球的課題の問題解決にグループで取り組む学習や、各界で活躍する講師によるセミナーを開催しています。常に自分の意見を持ち、ディスカッションを通して解決方法を探ることで、知識の習得だけではなく、積極性、主体性を育み、生徒同士の意識を向上させ、グローバルリーダーとしての使命感を高めていきます。

この GRIT の授業公開として、３年生全員による**模擬国連**の模様を参観していただきます。今回は、SDGs（持続可能な開発目標）にも取り上げられている「教育」をテーマに討議します。

＜**模擬国連**の概要＞

議　題：『貧困により教育を受けられないすべての子どもへの公平かつ質の高い初等教育の実現』

参加国：１００カ国（３年生８クラス３５０名を１００のグループに分け、それぞれのグループに国を割り当てています。）

進　行：10:30～10:35　前時の模様をＤＶＤにまとめ放映

10:35～11:55　討議 ／ ロビー活動

決議案提出・説明

11:55～12:05　投票説明

12:05～12:10　投票・開票

12:10～12:20　ベストカントリー賞発表・講評

【昼食】（　12:30 ～13:50　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

ご希望の方は、申込フォームにて、学校のお弁当〔お茶付き〕（700 円）をご注文いただけます。申し込まれた方は、当日、受付にて 700 円をお支払いください。お弁当は、12 時 20 分以降に、受付でお渡しいたします。

【生徒によるプレゼンテーション・ポスターセッション】

（　13:00 ～13:50　　同窓会館２階　会議室他　）

お昼休みに、次の６つの内容について、生徒によるプレゼンテーション並びにポスターセッションを行います。

①広島フィールドワーク報告　　②東京フィールドワーク報告

③東北フィールドワーク報告　　④ESD 国際交流プログラム

⑤「世界津波の日」 2019 高校生サミット in 北海道の報告

⑥高校生平和大使

【本校の取り組みについて】（　13:55 ～14:10　同窓会館３階 IKEDAHALL　）

本校の SGH の取り組みについて紹介いたします。

全ての課題研究推進の土台としての Active Learning を全教科の授業に導入し、①GRIT（全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラム）、②SP（希望者による放課後の特別授業プログラム）、③Learning Cluster（２・３年生の希望者から選抜されたメンバーが英語で地球的課題に取り組むプログラム）という３つの SGH プログラムを実施しています。また、GRIT 等で学び、研究した内容を深めるためのフィールドワーク（FW）も国内と海外で行っています。

【模擬国連の取り組み】（　14:10 ～14:30　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

今回の模擬国連の取り組みについて、中心になって取り組んだ生徒の代表がプレゼンテーションを行います。

※質疑応答

【講評】（　14:30 ～14:50　同窓会館３階　IKEDAHALL　）

本校 SGH 運営指導委員より。

【情報交換会】（　15:10～16:00　　同窓会館２階　Peace Square　）

発表会終了後、情報交換会を行います。参加ご希望の方は、お残りください。

2019年度第2回SGH運営指導委員会

日時：2019年11月8日（金）16:00～17:00
会場：理事室
参加者：梶田叡一 桃山学院教育大学学長
米田伸次 帝塚山学院大学国際理解研究所顧問
朝野富三 宝塚大学特任教授
武田学園長・杉本校長・千葉参事・桝田参事
太田創価教育センター長・中西副センター長・角内副センター長・狩野参事　11名
式次第：あいさつ　　杉本校長
関西創価高等学校 SGH 2019年度前半の取り組みについて
運営指導委員の先生方より
あいさつ　　太田センター長・杉本校長・武田学園長

議事録：
○書く力の育成ということで、アカデミックライティングをカリキュラムに入れることは、うれしい。今の大学生は書く力がない。大学の授業でライティングを担当しているが、指導すると劇的に成長。文は人なりだ。文章には、人柄が出てしまう。文章を見ると人間がわかるという怖さもある。文章を書くことで自分を客観的に見ることができる。ライティングを行うことで成長する。大変に楽しみだ。
○総括をどうするのか。これからどうするのか。生徒がやって来た取り組み・学習を自分との関係とにどう結びつけていくのか。自分とのつながり、気づき、変容、自分のこととしてどう取り組んでいくのか。そのような刺激をどう与えていくのか。
○異なる価値観との交流をすべきだ。それを通して自分をみつめることができる。異文化との交流の機会を増やすこと。地域との連携を。
○経験や成果をつなげること。学校内での継承とともに横にも広げることだ。他校にノウハウを伝えていくべきだ。
○女性の活用。社会に女性が進出している。女性の活躍の様子。ぜひ今後に生かせ。
○牧口常三郎先生は、札幌の小学校の教員で、作文指導から授業の工夫を始めている。創価教育の原点は作文指導だ。

●書く機会が減っている。原稿用紙に向かって書くこと。辞書を引きながら格闘することで、文章に膨らみができる。創立者は、読書の大切さを訴えている。名文に触れることだ。教科書の中身も貧弱になっている。名文が減っている。時事的な内容へと変わってきている。これをどうするか？

○対話ということは、もちろん話し合うことだ。これは、新しい時代を作っていく基本的なスキルだ。新しい見方ができるようになる。ＧＲＩＴで生徒が変容していることは確かだが、社会の変革へと意識を向ける回答が少ない。ここにＧＲＩＴの課題がある。先ほどの発表で、生徒は「行動する」と言っていたが、行動とは何か。何をするのか。設問の中に、もっと子どもたちの中をのぞき込むような問いが必要。何を問いたいのか？何を求めているのか？突っ込んだ設問がない。

○自分の行動を自分の言葉で伝えたいというニーズがないといけない。まず書くことが出発点だと思う。
○アンケートの設問を変えるべきかどうか。比較が必要なので同じ設問にする必要もあろうが。
○模擬国連を見学した際、生徒に「どうやって勉強したのか？」と訊ねた。すると、「タブレットで」という答えが多かった。例えば、青年海外協力隊の人は、どのように学んでいるのか。パソコンだけで得た知識では何の役にも立たない。実地での学習。人と人とのつながりでだ。タブレットで知識を得るのか、人から学ぶのか。4 月から続けてきての模擬国連だ。人と人とのつながりや人との出会いによって積み重ねていくこともできたのではないか。国の援助と市民の援助はちがう、本当に困っている人の力になれるのか？関西創価での外国語の勉強はすごい。しかし、その語学力を持って何を語るのか。自分のストーリーを語ることができるのか。これが、これからの課題だ。

○ＳＧＨが終わって次の段階へと進む。もう一度振り返って次の展開を考えるいい機会だ。やったことはすべてキープをすること。国際性に広がりが出てきた。先ほどの発表では、東京フィールドワークで国際機関を訪問した報告があった。また、ESD プログラムによってフランスに行き、現地の国際機関を訪れたことなど。国際的な機関を訪問することは、大事なことだ。それは、自分自身の将来構想に関わってくる。日本の若者は、今や留学もしない。国際機関で働こうと思う人も少ない。国際機関では、国ごとに人数の割り当てがあるのに、すべての定員が埋まっていない。枠があるのにもったいない。日本では、上智大学がかなり意識して啓蒙している。創価学園の姉妹校として、アメリカ創価大学があることはいいことだ。世界への窓口がある。内発的に国際機関に行きたいと思わせることが大事だ。そのような芽が出てきていると感じる。この芽生えが大事。
○どうやったら自分事になるのか。授業の中での話し合いでよく聞かれるのが、「整った答え」。美しい言葉、整った言葉での発言をよしするな。そのような発言は、往々にして他人の考えからの借り物が多い。実際、自分はどうなのか？自分の考えは？すべてが自分事になるように考えを深めることだ。片鱗は出ていたが、もっと意図的に仕掛けを作ることだ。グローバルイシューが、いつも関心の的になるように。どこの国の人の苦しみも自分のものに感じられるように。そして、行動が自分に返ってくるように。あらゆる授業で、取り組んだことが自分事に感じられるように工夫をして欲しい。
○日本の古典をもっと勉強させるべきだ。聖徳太子は、「和をもって貴しとなす」と述べた。これは、日本的、東洋的な「和」のこと。ヨーロッパ的なハーモニーとは違う。そちらは「力」で調和を作り出している。それで秩序が保たれればよいと思っている。聖徳太子の主張は違う。一人ひとりの心がある。そこに個々のこだわりが出てくる。同じようにはならない。人は皆ちがう。他者が愚かとは限らない。「和」とは慎みだ。自我抑制。自分を控えめにすること。コントロールすること。人を立てる。そういう意味での「和」。結果的に調和できればいいというものではない。
○小中高の時代に仏教を学ばせること。例えば、般若心経と歎異抄など。「色即是空」「空即是色」。突き詰めれば、一切は「空」だ。我々は、それぞれ個別の人間、独立した存在だと思っているが、実は生命の共同体、共生体なのだ。微生物が身体の中にたくさん住んでいる。また、個体には細胞がたくさんある。細胞レベルで見れば、所詮、身体は仮の統合された姿なのだ。これがこれだとこだわらなくてもよい。
○歎異抄とは、弟子の唯円が親鸞の言った言葉を書き留めたもの。その中で親鸞が述べていること。人は、自分の力だけでやっていると思っているようだが、実は大きな力が働いている。親鸞ほど師を大切にした人はいない。法然、親鸞の師弟関係を常に大切にしていた。大きな力の中で生かされている。人間は、つい「私」が主人公と思っているようだが、「私」の思いだけでやっているのではない。多

くの協力があって社会は成り立っている。そういうことを日本の子どもたちに教えたい。日本の中には、精神的な宝がたくさんある。これを通して考える機会にしたい。ヨーロッパには、自分たちが絶対と思う気風が残っている。思想の世界では、絶対個人主義をどう乗り越えるかという課題がある。ヘブライニズムにしても、ヘレニズムにしても共生の思想があった。共に生きるということ。しかし、近代の自我の目覚め、近代の個人主義の勃興により、「個」が成立した。すばらしいことだが、共同体やともに生きるという思想が薄れ、自分のがんばりだけが尊いこと、結果は全部自分で引き受けるという考え方になってしまった。これが行き詰まりの原因だ。1962 年にカトリックの反省が示された。自分たちだけが正しいと思い込んでいた。キリスト教と同じ真理が、別の形で、また、ちがう文化の中で息づいている　それを文章で発表した。この反省が、個人主義の課題を乗り越える鍵となっている。また、ローマ法王が、キリスト教はまちがった歴史をやってきたと認めた。例えば、十字軍やラテンアメリカでの布教。歴史の中でのキリスト教の間違いを世界に向かって謝罪した。これも個人主義の乗り越えの一つの姿。だが、仏法ははじめからそうだった。ヨーロッパで今、気づいたことを仏法はすでに説いている。己を主とするな。釈迦の最後の教典で言っている。「俺が」「俺が」と言う近代の個人主義を乗り越えている。世界中で今、全人類が課題にしていることを、関西創価が教育を通して子どもたちに気づかせている。ヨーロッパの近代の個人主義の克服、それはすでに仏法の釈迦の言葉にある。それを展開したのが、大乗仏教だ。結論を子どもに教えるわけにはいかない。種まきだけだ。大人になってから気づくことだろう。それでよい。

●ＳＧＨでつかんだことをどのような視点で振り返るべきか。視座を示していただいた。関西創価ならでは取り組みへと昇華させて行きたい。

2019年度　関西創価高等学校

スーパーグローバルハイスクール最終研究発表会

【日　時】　２０２０年２月２２日（土）13時 ～ 15時30分

【会　場】　関西創価高等学校　同窓会館３階（IKEDAHALL）
〒576—0063　大阪府交野市寺3-20-1
TEL　072-891-0011　　FAX　072-891-0015

【アクセス】・JR学研都市線「河内磐船」駅下車　徒歩20分
・京阪交野線「河内森」駅下車　徒歩20分
※JR河内磐船駅前からタクシーが利用できますが、本校と河内磐船駅間を学校車両にて送迎させていただきます。
（往路：12時20分～12時50分　復路15時40分～16時10分
それぞれ10分間隔で運行）

【研究開発構想名】
「TRY人の郷・交野から　平和の創造に挑戦する
グローバルリーダー育成プログラム」

【発表会の内容】

12:30　13:00　13:05　13:35　14:15

受付	挨拶	5年間のSGH事業を振り返って	生徒による課題探究プログラム GRITプレゼンテーション

14:15　14:30　14:50　15:30

休憩	ﾗｰﾆﾝｸﾞｸﾗｽﾀｰ ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ	講　演 「グローバル社会を生き抜く資質・能力の育成」 講師：梶田 叡一 先生 （SGH運営指導委員 桃山学院教育大学学長）

【挨拶／5 年間の SGH 事業を振り返って】（13:00～13:35）

校長の挨拶の後、副校長より「5 年間の SGH 事業を振り返って」と題してプレゼンテーションいたします。

本校は、全ての課題研究推進の土台としての Active Learning を全教科の授業に導入し、①GRIT（全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラム）、②UP（希望者による高大連携プログラム）、③Learning Cluster (LC)（２・３年生の希望者から選抜されたメンバーが、英語で地球的課題について取り組むプログラム）という３つの SGH プログラムを実施しています。

この 5 年間の取り組みを紹介とともに、SGH 事業によってどのように学びが、そして生徒が変容したかを報告いたします。

【生徒による GRIT プレゼンテーション】（13:35～14:15）＜２階会議室＞

GRIT とは、全校生徒を対象とした探究型総合学習プログラムのことで、毎月２回の土曜登校日に実施しています。「Global Research and Inquiry Time（地球的課題の調査と探究の時間）」の略称で、「環境」「開発」「人権」「平和」をテーマに掲げ、地球的課題の問題解決にグループで取り組む学習や、各界で活躍する講師によるセミナーを開催しています。

今回は、上記のテーマと関連が深い SDGs から選んだものを研究対象とし、今年１年間の取り組んできた研究の成果を発表します。代表生徒による４つのグループが２会場に分かれ、下記のようにプレゼンテーションを行います。

セッション①：１グループ２０分（発表１０分・質疑応答１０分）×２G
セッション②：１グループ２０分（発表１０分・質疑応答１０分）×２G

※　休憩時間（14:15～14:30）や閉会後の時間を利用して、海外フィールドワークのポスター掲示等をご覧ください。

【ラーニングクラスター（LC）プレゼンテーション】（14:30～14:50）

ラーニングクラスターのメンバーが、課題研究のまとめとして、高校生の視点から考えた地球的課題の解決への提言を英語で発表します。ラーニング・クラスターとは、２・３年生の希望者から選抜された２２名で実施している特設プログラムで、活動の全てを英語で行い、SDGs よりさらにコアなテーマを設定して１年間課題研究を行います。今回発表するテーマは、「人権」についてです。

【講演】（14:50～15:30）

本校の SGH 運営指導委員をお願いしております**梶田 叡一 先生**に**「グローバル社会を生き抜く資質・能力の育成」**と題して講演をしていただきます。

2019 年度第 3 回 SGH 運営指導委員会

日時：2020 年 2 月 22 日（土）16:00～17:00
会場：同窓会館２階会議室
参加者：梶田叡一 桃山学院教育大学学長
米田伸次 帝塚山学院大学国際理解研究所顧問
朝野富三 ジャーナリスト、元宝塚大学特任教授
武田学園長・杉本校長・大月副校長・千葉参事・桝田参事・小山教諭
太田創価教育センター長・中西副センター長・角内副センター長・狩野参事　13 名
式次第：あいさつ　　杉本校長
運営指導委員の先生方より
あいさつ　　太田センター長・杉本校長・武田学園長

議事録：
○ＳＧＨ終了後も世界市民教育として継続していくとの発表があった。心強い。
5 年間見てきて、ＳＧＨの取り組みを通し、学校が大きく成長したことを感じる。
模擬国連を学年全員で取り組んだこと。これが強みであり、目玉である。
「誰も置き去りにしない」とのＳＤＧs の考え、そして「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことをしない」との学校の教育思想が象徴されるようなプログラムだった。
皆が一つのテーマに取り組むことがよかった。
生徒の変容とあったが、生徒だけでなく、学校そのものが変容した。プログラムを各教科に落とし込んだことで学校も教師も変わった。教員の熱意が今問われているが、一生懸命に取り組んだ関西創価の教員に敬意を表したい。
○SGH を今後、いかに発展させるか。どこの学校も悩んでいる。
関西創価はユネスコスクールでもある。これはずっと続く。これをフルに活用することだ。
ユネスコスクールの多くの学校の問題は、外国の学校とつながることができない。外国だから、そして日本人はメッセージを持っていないから。関西創価は、その点を克服する力を持っている。関西創価がユネスコスクールをリードして欲しい。また、身近なネットワークを大事にすべきだ。身近なところからスタートするべきだ。
○「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth」にぜひ出て欲しい。積極的に実績やメッセージを発信して欲しい。
○全校的に SGH に取り組んだのがよかった。多くの学校では、全校的な取り組みができる教育環境にないことが問題になっていた。
○ユネスコスクールは、知識だけではなく、価値観に重点を置いている。多様化した価値観を認める社会にあって、コンセンサスを得ることが難しくなっている。関西創価は、教育理念がはっきりしている。そういう点では、取り組みも含め、アピールしやすいのではないか。全国大会等でメッセージを発信して欲しい。多様化は大事だが、共通のものを持つことが必要。その点、関西創価は、「生命の尊厳」を中心に教えている。すばらしいことだ。
○世界市民教育とは、1970 年代から言われてきた。ある意味、なじみのある言葉ではあるが、関西創

価で独自色を出していくこと。また独自の世界市民教育を作っていくことだ。グローバルシチズンシップの育成が課題だ。

○イギリスに住むブレイディみかこの言葉に感動した。「エンパシー（empathy）」＝感情移入。人の気持ちを思いやること。他者の立場に立って、他者を理解する。他者の立場に立ってどういう行動をするか。まさに共感力の育成だ。

○多様な人、社会と出会う。多様なものとの出会いを大切にするプログラムを作ること。
大学の偉い先生方からばかりが学びではない。市民社会で生きている人から学ぶ機会を作ることが大事だ。地域の中で豊かなものを学ぶのが、真のグローバル教育だと思う。

○これからもグローバル教育が続くと聞いてうれしく思っている。特に外国に触れる機会を作るフィールドワークの継続もうれしい。

○創価の教育には伝統がある。人を強くする教育だ。今は、条件としては恵まれているが、たとえ悪い環境にあっても生き抜く力を持たせること、よそとはちがう教育をすることだ。創価の教育には、燃える思いがある。教育とは熱。見果てぬ夢を見ること。よそではできない本当の教育を東西の学園でやるとのプライドを持つこと。

○グローバルな時代となった。世界市民と言われている。世界中どこへ行っても生き抜ける人を育てて欲しい。

2019 年 11 月 8 日

中間研究発表会 運営指導委員講評

「関西創価高校の世界市民教育への期待」

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟顧問
帝塚山学院大学元教授・国際理解研究所所長

米田 伸次

関西創価高校のスーパグローバル・ハイスクール（以下、ＳＧＨ）の取り組みも、今年度をもって最終年度になった。この５年間、運営指導委員としてＳＧＨの実践にかかわらせていただき、意欲、熱意のあふれる生徒たち、教職員の方々との出会いを得て、私の方こそ多くを学ばせていただいたと感謝している。

◆２０１６年度のＳＧＨ実践中間発表会で、私が関西創価高校のＳＧＨの取り組みの特色としてとりわけ強く感じた次の３点を指摘させていただいた。
その一は、関西創価高校のＳＧＨが同校の「いのちの尊厳」を基底に据えた「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことをしない」という建学の精神、教育理念の上にしっかりと位置付けられているということ、これはＳＤＧｓの基本理念「誰一人取り残さない」にも通じているという点であった。
その二は、ＳＧＨの主目的がグローバル時代の進展に対応した「グローバルリーダー」の育成にあるのに対して、関西創価高校では教育理念を踏まえた世界市民の育成と位置づけ、持続可能な社会を築いていく観点から独自の世界市民教育を実施されているという点であった。
その三は、１年次に全生徒、全教員を必修としたＳＤＧｓの視点に立った世界的課題に取り組む「ＧＲＩＴ」と呼ばれる新しい科目を創設、その学びの仕上げとしてのユニークな全学年生徒の全員参加によるレベルの高い模擬国連会議が全校的に取り組まれるなど、ＳＧＨに全校あげて取り組まれている点であった。
無論、関西創価高校のＳＧＨの特色はこの３つ以外にもあるが、この３つを中心にその内容をこの５年間年々深掘りし、その実践の成果はＳＧＨ５年目の本日の中間発表会で報告された。この５年間の成果は大きなレガシーとしてこれからの関西創価高校の教育の発展的に引き継がれていくに違いないと本日改めて確信した。さらに本日感じたことが２つある。
その（一）は、関西創価の教育理念が今回のＳＧＨの実践を通して今までより一層関西創価高校にしつかりと根づいたのではないかということだ。そ（二）はＳＧＨを通して教職員の皆さんは関西創価の教育により一層自信を確かにされ、生徒たちも関西創価高校により一層の誇りを持つようになったのではないかということだ。

◆関西創価高校は、すでにユネスコが推進しているユネスコスクールに加盟されている。そこで、これまでユネスコスクールにかかわってきた私の立場、経験を踏まえ、アフターＳＧＨの取り組みの一つとしての関西創価高校の市民教育プログラムでこれからもしつかりとおさえていただきたいと願う３点について述べてみる。

その一は、ご承知の通リユネスコスクールとは、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）を実践・推進するユネスコ本部の直轄指定校であり、地域にＥＳＤを広げていく拠点校の役割をも担った学校で、国際的には約１１０００校（国内で約１１００校）を超える学校が国境を超えて学び合う国際的なネツトワークの教育システムである。私はかねてより多くの日本のユネスコスクールがせつかくのこの国際的ネツトワークを有効に活用されていないことが気になっていた。関西創価高校には、これまで積み上げてこられた優れた実績・経験を踏まえて国内だけでなく、とりわけ国外のユネスコスクールとの学びのつながりを一層深め、日本のユネスコスクールのグローバル化をリードしていただきたい。

その二は、今後の我が国のユネスコスクールでは、２０１５年、国連によって提起されたＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）への取り組みが一層強調されてくることは必須であろう。しかし我が国のユネスコスクールの取り組みの全般を見るとＳＤＧｓの基本理念「いのちの尊厳」が学びの基底にすえられてはいないという印象を私はつよく持っている。このことはユネスコスクールだけでなく、我が国全般のＳＤＧｓの多くの取り組みにも言えることだ。ＳＤＧｓの基本理念「誰一人取り残さない」、関西創価の教育理念「いのちの尊厳」を基盤にすえてＳＧＨに取り組んでこられた関西創価高校に、是非これからのＳＤＧｓの基本理念を踏まえての取り組みをリードしていただきたい。

その三は、ＥＳＤでは、持続可能な社会づくりのために価値観の学びが重視されている。そのために地域社会での多様な人びと、地域社会・自然の問題と学びの出会い持つことを重視している。関西創価高校の世界平和教育プログラムの中に、是非これからも地域社会での多様な人びと、地域社会・自然の問題と向き合う機会を一層多く取り入れていただきたい。

◆以上、ＳＧＨの実践の成果をふまえてのこれからの関西創価高校の世界市民教育の発展に向けての私の期待の一端を述べさせていただいた。せつかくの機会なので、今後のさらなる世界市民教育の深堀りに向けての参考になればと、もう少しだけコメントさせていただきたい。

その一は、関西創価高校の地球市民教育と深くかかわって来る「平和の文化」についてだ。関西創価学園の教育理念「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことをしない」を提起されたのは学園創立者の池田大作先生だが、池田先生は「２１世紀は平和の文化を創造していく時代とならねばならない」と述べ、「平和の文化」の基底に「いのちの尊厳」を位置付けられた。池田先生の説かれている「平和の文化」については、かつての国連事務次長チヨウドリ博士も関西創価高校の生徒たちに贈られたメツセージのなかでも「君たちは平和の文化を

創って行かなければならない」と述べておられる。このことからも、これからの世界平和を創設していくうえで「平和の文化」が極めて重要な意味を持った言葉だということが分かる。「平和の文化」はＳＤＧｓを推進しようとする近年、国際的にクローズアップされている概念。しかし、実は「平和の文化」が提起されたのは３０年前の１９８９年、アフリカのコートジボワールのヤムスクロでユネスコによる「人の心の中に平和」の名で開かれた国際会議での「ヤムスクロ宣言」によってであった。「人の心の中に平和の砦を築く」とはユネスコ憲章によるユネスコ理念のキーワードだ。この「ヤムスクロ宣言」での「平和の文化」の提起はユネスコ理念を現下の国際情勢の中で掲げ直したもので、ユネスコ理念を簡潔に表した概念として捉えられている。

ところで、このヤムスクロ会議を受けて、国連は１９９９年「平和の文化に関する宣言と行動計画」を採択、２０００年を「国連平和の文化の国際年」にすることを提起した。さらにこれを受けてユネスコは、世界の人々すべてが「平和の文化」を築くための大切にしたい価値観として「私の平和宣言」６項目を提起した。私は先にＥＳＤは価値観を育む教育として捉えられていると述べたが、ユネスコの期待する価値観とは何かを知る参考として、６項目を提示させていただく。

① 私は、すべてのいのち（命）を大切にします
② 私はどんな暴力も許しません
③ 私は思いやりの心をもち、助け合います
④ 相手の立場に立って考えます
⑤ かけがえのない地球環境を守ります
⑥ 皆で力を合わせて協力します

次に「私の平和宣言」で私が最も注目する２点について述べてみる。その（一）は、「私の平和宣言」の中心となる第①項目に「いのちの尊厳」がすえられている点。この「宣言」では「Ｒｅｓｐｅｃｔ　ａｌｌ　Ｌｉｆｅ」のＬｉｆｅについて我が国では「すべてのいのち」と「すべての人のいのち」の２つの解釈が生まれた。「Ｌｉｆｅ」をどう解釈するかは平和の文化をどうとらえるのかと深くかかわってくる。私はユネスコが１９９０年代から持続可能な開発に注目、さらに２００００年代初めに文化・生物の多様化の尊重を提起してきたユネスコの動向をふまえ「すべてのいのち」の解釈を主張してきた。

「ヤムスクロ宣言」２５周年の２０１４年（これは国連によってＳＤＧｓが提起される前年です）、再びヤムスクロでユネスコによって同じ趣旨の国際会議が開かれ「ヤムスクロ＋２５宣言」が発表されたが、この中に「国際社会には平和の文化を阻むさまざまな問題がある」「平和の文化と持続可能な開発は不可分の関係にある」と述べられていることからも、「すべてのいのち」の解釈を確信している。その（二）は、先にあげた池田先生の「平和の文化を創造していく」、チヨウドリ博士の「君たちは平和の文化を創造していかねばならない」の意味する重要性についてだ。先に紹介した「私の平和宣言」６項目は、「平和の文化」を創造していく、私たちの価値観（考え方、生き方）、行動の規範であり私たちの目指す「平

和の文化」の在り様を示すものだと私は理解している。
その二は、「平和の文化」をいかに創造していくのかについてである。１９９６年、ユネスコは２１世紀の教育の在り方を示した「人間開発のための教育指針・勧告」を発表、この中で「学習の四本柱」として①知ることを学ぶ、②為すことを学ぶ、③（他者と）共に生きることを学ぶ、④人間として生きることを学ぶ、を提起した。以下、「平和の文化」の創造を視野に入れつつこの「指針・勧告」で私が注目する２点につて述べてみる。その（一）は、「四本柱」の「学習」①②③の帰結④について、この「指針・勧告」は④の中で「人間として生きることを学ぶ」ためには、③の「共に生きることを学ぶ」ことがカギである。共に生きるとは、他者とつながって生きることである。では、私たちは何のためにつながるのか。それは、自分を他者のために存在させること、これこそが人間として生きるということであると「学習」を位置付けている点だ。その（二）は、２１世紀に入ってＥＳＤ、ＳＤＧｓの進展の中で「学習の四本柱」にもう一つの新しい５本目の柱が加えられたことだ。それは、学びは自己変革のためだけではない、地域や社会を変革していく活動に参加するためであるという視点。これはＳＤＧｓの目的ともかかわつてくる。

◆ユネスコの「人間開発のための教育指針・勧告」は、「学習の四本柱」の最初に「知ることを学ぶ」を位置づけた。関西創価高校のＳＧＨの取り組みでも１年次に必数科目「ＧＲＩＴ」でのグローバルな国際的な課題の「知る」学習を基底に据え、学年ごとに学びの質をアツプ、幅を広げていくというこの学びの展開は高く評価されるところである。
今，日本の高校では、ＳＧＨやユネスコスクールだけでなく、学校や高校生の間で、様々な形でのＳＤＧｓの取り組みが進められている。その一例に、大阪で毎年開かれている関西圏規模で高校生が自発的に開催しているＳＤＧｓをキーワードにした学びのフォーラム「ユース・ワンワールドフェスティバル」がある。ここには、学校内での学びだけでなく、学校を超えて地域でのグローバルな共通課題に取り組む高校生相互のつながりの学びがみられる。彼らは、こうした取り組みを通して地域の課題を「自分ごと」として学んでいる。この学びの中で彼らは、考え方、生き方の異なるさまざまな人々、地域の課題と出会い、それらと真剣に向き合い、課題の解決に向けて自分のできるところで行動しつつある。私はこうした高校生たちの中に、世界市民の可能性を感じ、日本、世界の未来に希望を感じている。
最後になったが、学校をあげて世界市民教育に取り組まれている関西創価高校の未来に大きな期待を感じつつ、本日の私の話を終わらせていただく。

2020 年 2 月 22 日

最終研究発表会 運営指導委員講演

「グローバル社会を生き抜く資質・能力の育成」

桃山学院教育大学学長

梶田 叡一

今日も全体の研究発表並びに生徒の皆さんの発表を聞けて本当によかったと思っている。５年間の SGH は今年度で終わるが、これはある意味で仕掛け作りの期間、集中的に試みる期間であった。今後は、日常の教育的取り組みの中で、関西創価がどれだけのグローバルな資質能力を持った生徒を育てていけるか、これからが本当の勝負。みんなで考えたプログラムを財産とし、これを来年度以降は、日常の中で生かしていくことだ。グローバルな教育をにらんだユネスコスクールとして、世界の姉妹校と一緒に手を結んでやってほしい。一層の発展を期待している。

関西創価高校への期待を、グローバル教育をすすめていく上で、この場にいる生徒の皆さんにもヒントになるお話をしたい。日本は島国だが、否応なく世界全体をにらんで生きていかなければならない。グローバル化が進んできた現在、日本の中だけで生きることはできなくなっている。日本国内に居ても仕事上のパートナーはどこか海外にいるという時代だ。私の下の妹もジャーナリストとして長年月ロンドンにいたことも、ケープタウンにいたこともあった。身近なところでもこのようなことが当たり前になってきた。関西創価高校の卒業生で私の娘の親友だった人と、私の妹がケープタウンで偶然出会って親しくなっているということも起こっている。世界は狭くなったと思う。どこでどういう人とどういうふうに出会うかわからない。仕事の上でつながりがあるだけではない。新型コロナウイルスのような感染症等も連鎖が世界的に密接になっていることを示すものである。何事も、日本の中だけで完結することはできない時代である。そのような中でどうしても身につけていかなければならない資質能力がある。

第 1 に外国語教育の一層の強化を

私の学生時代は英語だけではなく、第二外国語をやっていた。私はフランス語。その頃の学生は当たり前にやっていた。前提となる英語は高校でしなければならなかった。今の大学はドイツ語・フランス語のような外国語ができない。東大・京大でも厳しい。上智・ICU の英語教育は大丈夫。創価大学もがんばっている。中学高校時代から意図的に取り組むことだ。少なくとも、国際的な活動をしようとしている人は、できれば、英語ともう一つぐらい外国語を中学高校時代からやってほしい。中国に行くと、中国語ができなくても英語ができれば会話ができる。意思が通じる。韓国もそう。日本はだめ。日本の学生や先生方も外国語がで

きない。日本は際立って外国語が弱い。近代において、唯一ヨーロッパの植民地にならなかったのはタイと日本だが、タイは最近外国語教育に力を入れている。関西創価は語学に力を入れてきたが、これを堅持してほしい。

第２に国際交流の一層の推進と積極的な異文化体験を

日本の当たり前がある。アメリカの当たり前がある。国ごとに、その当たり前が違う。１９７０年代、私はよく韓国に行き、ソウル大学での研究会に参加した。韓国の方々に食事に連れて行ってもらったが、食べるときは日本のマナーでは通用しない。よく叱られた・韓国では食器を持ってはいけない。無作法と思われる。食べ方のマナーが違う。反日感情も強かったし、みんな先輩だったから、遠慮会釈なく日本人の無作法をたしなめられた。郷に入っては郷に従えで、韓国では韓国のマナーだ。日本に来たらそれはまた違う。当たり前がちがう。物の食べ方だけではない。発想のしかた、議論のしかたが違う。これがわかるためには、異文化体験が必要である。カンボジアにここ７・８年、学生と一緒に行って交流している。カンボジアでは日本語を学んでいる学生もいて、異文化理解の機会ができている。20 年前、ポルポトの大虐殺があって、彼らにはおじいちゃんたちがいない。家族関係を聞いたりする際、気をつけないと、痛みを伴う記憶を蘇らせてしまう。このように国によってそれぞれ当たり前がちがう。生活習慣や発想が違う。背景にある歴史も違う。日本の中の同質同士とは違うものと出会いを持つことが大事だ。できるだけ外国の人と交流する機会を持った方がよい。

第３に国際的な政治・経済・文化について一層の認識を

日本のテレビだけ見ていると、皆同じような報道をしている。私はできるだけ、BBC、CNN、アルジャジーラを見るようにしている。日本の放送だけだとだめ。一面的見方になってしまう。英語圏の BBC、CNN でもちがう。アルジャジーラになるとなおさらである。皆さんは新聞でも外国のものも見た方がよい。日本の大新聞はみな似通っているが、外国の報道では違う。アンテナを広く張っていかなければならない。同じ出来事をどう見るか。多くの視点を持ってほしい。

第４に日本の伝統・文化について関心を深め、体験的な理解を図る教育活動の強化を

国際的な場で交流すると日本のことをよく聞かれる。日本のことをもっとよく知ること。古事記や万葉集など日本の古典について知らないようではだめだ。たとえばロンドンやニューヨークには多くのアフリカ系の人が来ている。英語を流暢に話す。そのうえコートジボワールの人はフランス語が流暢。ギリシャやローマのこと、シェークスピア等についてもよく知っている。しかし、コートジボワールの人がフランス語でうまく語れたとしても、アフリカのこと、コートジボワールのこと、自国の文化や古典について知っていないと、フランスの人、イギリスの人、アメリカの人と対等には話せない。どれだけ世界的な教養を身につ

けていたとしても、自国の文化について話せないということは二流。では日本人はどれだけ日本の文化や歴史を勉強しているか。

30 年前、大阪大学の教員時代、BBC に招かれて、イギリスの高等教育が様変わりしていることを取材し、BBC ラジオで放送したことがある。その仕事の打ち上げの時に、中華料理屋にスタッフの方々と行った。そのチーフの人が乾杯の時に流暢な日本語を話し始めた。実は彼には日本での留学経験があったのだ。大学では日本の古典を学んだそうだ。平家物語も学んだというので、私が「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり・・・」とそらんずると、それに続けて滔々と暗唱し始めた。イギリス人の古典の勉強は、まず暗唱から入る。私がシェークスピアの『As You Like It』について、大学の時に勉強したことがあると言うと、彼は『As You Like It』の何か所かのサワリを滔々と暗唱し始めた。私はタイトルしか覚えていない。日本とイギリスの古典教育の圧倒的な差を感じた。国際交流の場に出る時には、日本の古典について語れるようになっておくことだ。

第 5 に人類共通の価値意識の理解を

キリスト教の愛と仏教の慈悲―文化が違っても、表現は違っても、喜怒哀楽などの人間としての土台は同じ。それを身につけるといっても、なかなかストレートにはできないから、仕掛けが必要。だから GRIT、模擬国連などが大事になる。どういう仕掛けをすれば、グローバル化の時代に必要な力がつくか。世界の変動は激しい。それに対応した資質を身につけなければならない。OECD や経済産業省がどのようなことを言っているか。Society 5．0 に対応した資質能力。時代は、ＩＣＴを最大限に活用した「超スマート社会」に入りつつある。新しい社会に対応した力をつけていかなければならない。

その土台には、人が人として生きていくのに不可欠な力をつけていかなくてはならない。私は先日、一つの雑誌に、旧約聖書のヨブ記の話を書いた。正義を貫いた人の話。紀元前 5 世紀の話だ。神の許しを得たサタンが、ヨブを試すことにし、彼のすべての財産と家族を失わせる。しかし、それでも彼は挫けない。どう嘲られようと、プライドと精神的な強靭さを失わず、最後にはまた繁栄を取り戻したという話。

大事なのは挫けない心、プライドを失わないこと。もがく中で、プライドをもって次に向かって頑張ること。この強靭さが土台になければ、何が身についていてもだめ。これが大本になって人間ができていく。人間教育だ。牧口常三郎先生がおっしゃっていた人間教育である。

私の先輩の細谷 純という心理学者が、「ジグズデン－ザグズデン(Zigzden-Zagzden)」―結局最後は、それを貫いて生きていけるしぶとさを養うことが大事だとよく言っていた。一生懸命やって、真面目に正しくやってもなかなかうまくいかないことがある、しかし、ジグズデン、ザグズデンで、上手くいこうといかまいと、ジグ・ザグと、つまずき、ころびながら進まざるをえない。その力をどう身につけさせるかである。

人間として、見かけをはじめ、いろいろなところで違っている。祖国、年齢、立場それぞれも。そういったものが、どういうものであろうと、動いている社会に適応して身につけなければならないものは身につけなければならない。しかし、一番の大本は、人間としての強さ、人間としてのプライドだ。それは人間としての共通の土台である。関西創価はそういうことを一番の願いとしてきた。グローバル教育とともに、その土台としての人間教育にも取り組む、これからの関西創価にあらためて期待したいと思う。

平成27年度指定　スーパーグローバルハイスクール　第５年次

研究開発実施報告書

令和２年3月31日

発行　学校法人 創価学園 関西創価高等学校
〒576-0063 大阪府交野市寺3丁目20番1号
電 話 : 072-891-0011（代表）
FAX : 072-891-0015

印刷　萩原株式会社
〒540-0005 大阪市中央区上町 1-4-15
電 話 : 06-6761-8555（代表）
FAX : 06-6761-8553